◎日本最初のアニメーション専門誌◎

季刊 ファントーシュ



手塚治虫
(「ある森の伝説」を語る)

森　卓也
(実力！これが ピンクパンサー！)

松本零士
(「みつばちマーヤ」を作りたい！)

☆劇場公開(待期)アニメーション紹介!!☆

FANTOCHE VOL.2

76年公開(待期)ア



●ウォルトディズニープロ作品



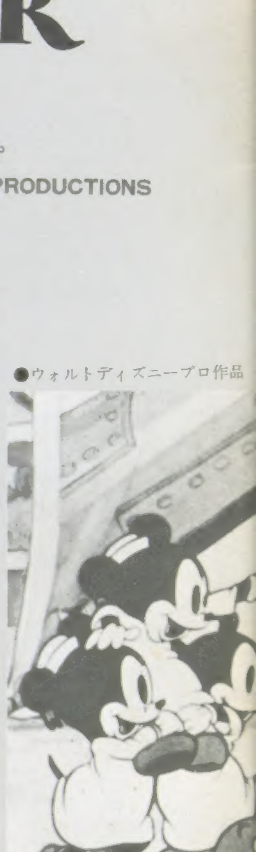


●ウォルトディズニープロ作品

Walt Disney's
PETER PAN
TECHNICOLOR®
© WALT DISNEY PRODUCTIONS

ウォルト・ディズニーの「ピーターパン」(日本語版)が、東宝チャンピオンまつりのメイン番組として3月13日(土)から、全国で公開される。チャンピオンまつりは今まで〝ゴジラ〟等の怪獣映画のシリーズ番組だったが、どうしたことか今回は、まんが映画だらけである。併映作品に短編4本と「タイムボカン」「勇者ライディーン」「元祖・天才バカボン」の計8本立て!!

●ウォルトディズニープロ作品



ニメーション紹介

今年も劇場にお目見えするのはウォルトディズニー作品が主なものになるようですが、この「ファントーシュ」の創刊とともに、日本を市場に、世界各国のアニメーションが登場することを願いここに5ページの特集を組みました。これらは早いもので3月、おそいものでは来年、完成の物もあります。

乞御期待！



●ウォルトディズニープロ作品

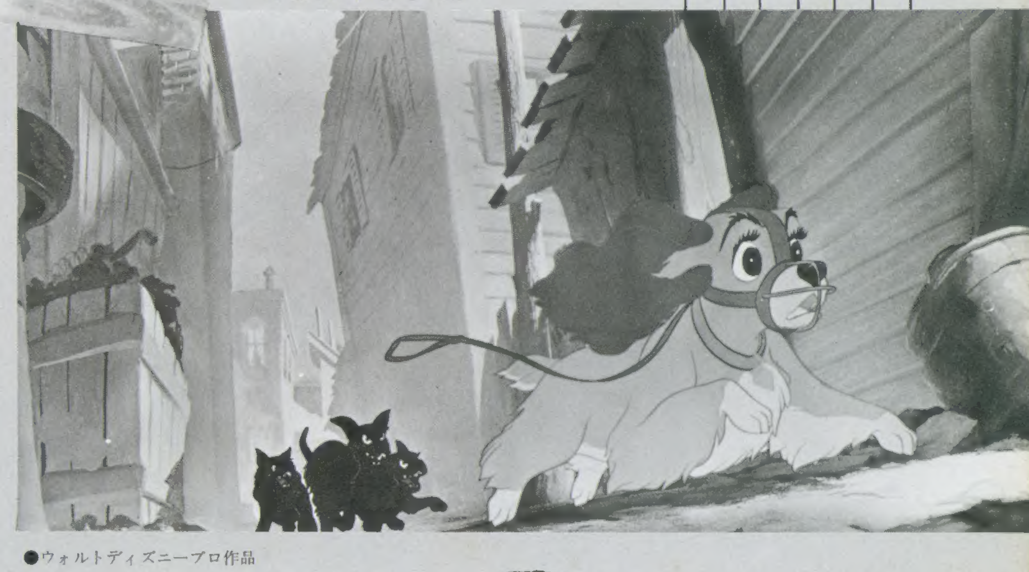
これはおなじみの「メリー・ポピンズ」。同じくディズニーの「史上最大のスーパーチャンピオン」の公開直前に、アンコール公開（東京）される。主演はジュリー・アンドリュース。音楽はシャーマン兄弟。特殊効果はユースタス・ライセット他。
監督はロバート・スティヴンスン。



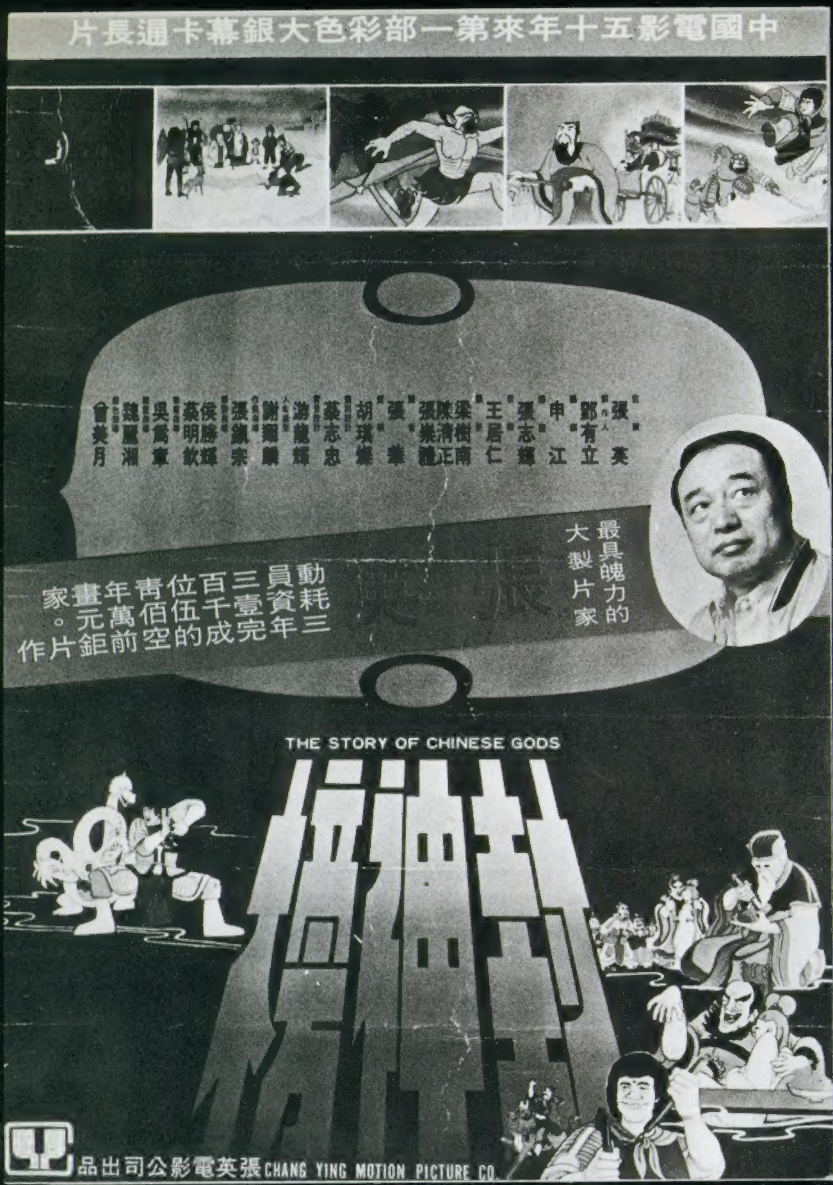
●ウォルトディズニープロ作品

今夏、リバイバル公開される「わんわん物語」。製作年度は1955年。演出はクライド・ジェロニミ、ハミルトン・ラスク、ウィル・フレッド・ヤクソンのトリオ。尚、公開時にアカデミー賞を受賞した短編をあつめた総集編も公開される予定。



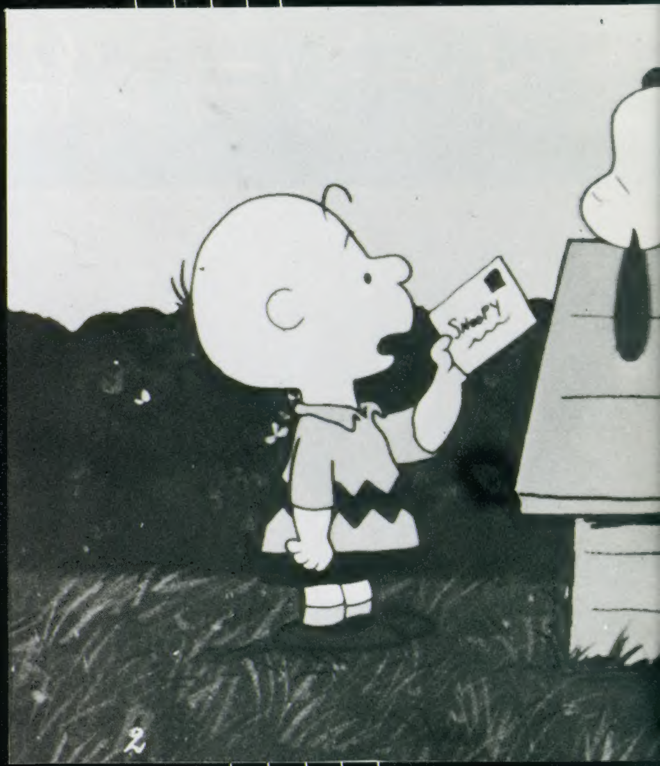


●ウォルトディズニープロ作品



上の写真は、今年から来年にかけて、東宝東和の配給で日本公開される予定の長編アニメ「中国の神々の物語」ですが、正式発表されておらずスチルを入手できず、わがスタッフの手により現地から持ち帰ったポスターです。又、この作品を手がけたスタッフは、東京ムービーが、「巨人の星」当時に技術指導したスタッフで、大塚康生氏の弟子にもあたる。早く劇場で見たいものです。原題「封神傍」





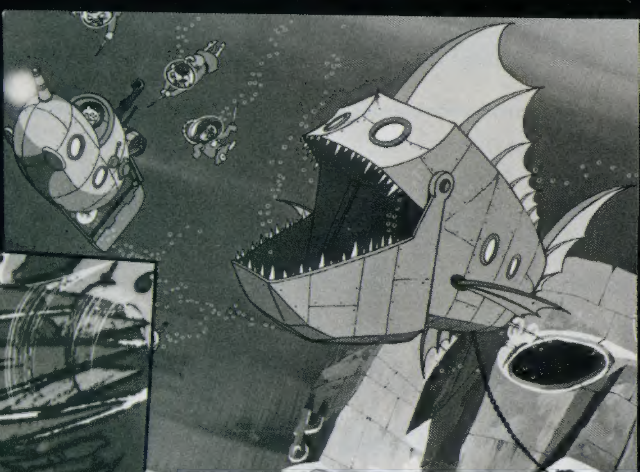
またまたスヌーピーが、大スクリーンにお目見えする。これは４年前に封切られた「スヌーピーとチャリー」のリバイバル公開で、３年前に公開された「スヌーピーの大冒険」を昨年リバイバルしてヒットしたためでしょう。夏休み公開。でも来年になると３作目の〝スヌーピー〞が見れるかもしれませんョ、今、米パラマウント社で製作中……………。（写真は大冒険、公開されるのはチャーリー）

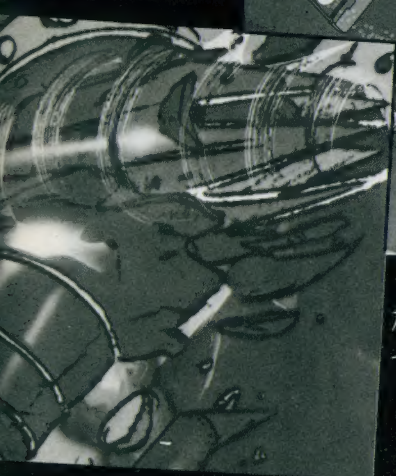


東映対決シリーズ第３弾！「ＵＦＯロボ・グレンダイザー対グレートマジンガー」より。









東映動画創立20周年記念作品「長靴をはいた猫・80日間世界一周」より。東映まんがまつりにて公開。

ファントーシュ



◆パラパラまんがを作りましょう!

左の絵のように、あなたも手造りあにめいしょんを作りませんか!? 3 cm四方のスペースで20枚のパラパラまんがを募集いたします。↗

↗用紙は模造紙かケント紙で、ペン（墨）で書いて下さい。ユニークな作品は、本誌パラパラまんがが劇場に御出演をお願いいたします。申し込みは、編集室・広瀬まで。〆切ナシ。



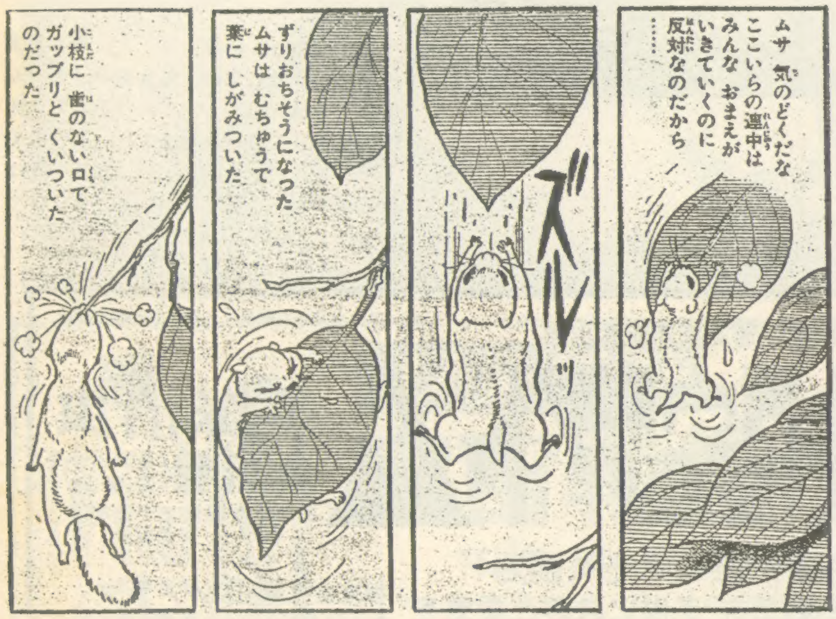
手塚治虫「ある森の伝説」を語る

アニメーターが語る 第2回

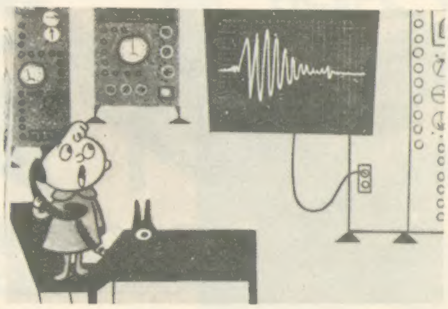
「アニメーターが語る」第２回は〝日本のウォルト・ディズニー〟として、漫画ファン・アニメファンに親しまれている手塚治虫さんです。今回は氏が前々から「作る」と言ってらした「ある森の伝説」に着手しはじめたとお聞きしたので、さっそくお話しをうかがいしてきました。

○「ある森の伝説」とは……

——物語自体は前に少年ジャンプに掲載した〝ライオンブックス〟シリーズの１本「モモンガのムサ」（46年11月22日号）から少年のキャラクターを抜いたものです。実は「森の伝説」を作るために書いたんですがね。音楽はチャイコフスキーの第４番で、第１楽章は誕生シーンで、３分間まったく止メの絵で見せます。それからエミールコールの「ファントーシュ」の様なものになります。そして「フェリクス」から初期のフライシャーの様なものになってゆきます。アニメーションの初期の技術で見せています。それとＵＰＡの「マクボィン」等々、まだ絵をお具せできないので参考までにこの辺の絵を見て下さい。





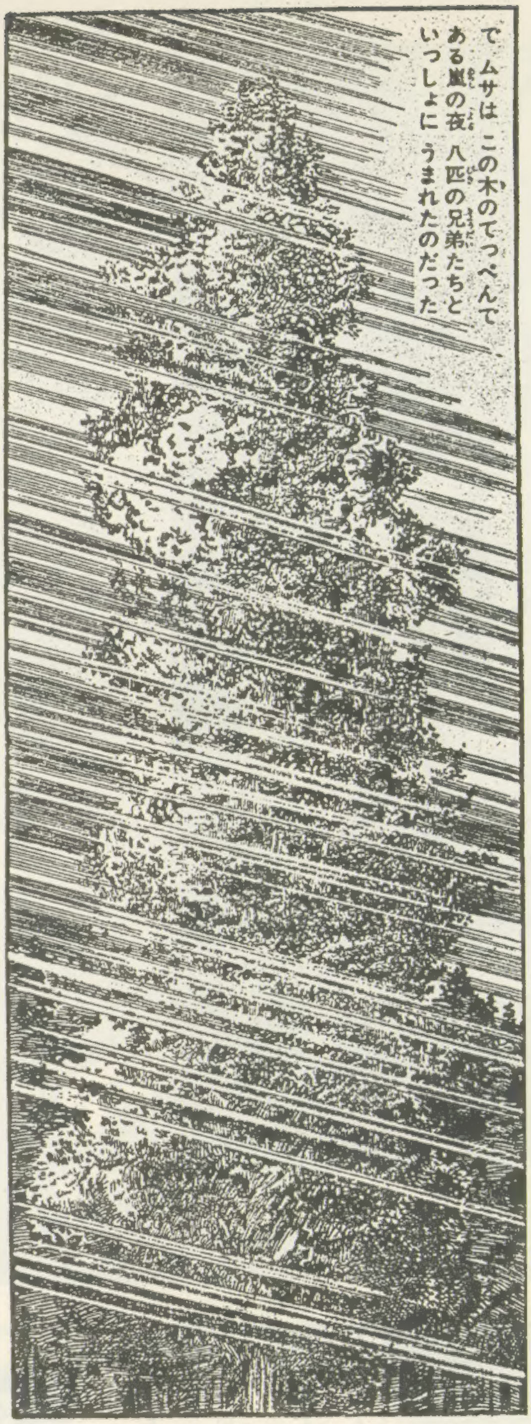


第２楽章。これは一番大変な所なんですが、谷川を下っていく枯葉の上に恋人同志のかげろうが２匹います。このかげろう達が枯葉とともに流れを下りながら、恋をし、死んでいく——そんな話しなんですが、これを始めから終りまでズーと流れていくのを７段マルチで描くんです。これはディズニーを凌いでという復題がついているんですが、ディズニーの「ファンタジア」の一番流麗な所をもう一度再現しようということなんです。しかもワイド画面でね。だから「ファンタジア」の〝くるみ割り人形〟の７段マルチを思い出してもらえば……ま、そんなの無かったけど。

とにかくアッと言わせたい訳です。

第３楽章。ま、そういうディズニーに代表されるフル・アニメーションの世界が一方である。一方ではいらゆるチェコを北心数した実体アニメーションが盛んになっていて、パペットが、あるいは特影方に動いていったというとが第３楽楽章です。第３楽章はチャイコフスキーのものでは非常に短い、どっちかというと、まあスケール…といってコミカルな音楽なんですがね。ここに雨のなんていうとか、雨足って言うのかな？波紋って言うのかな、あの波紋と需のしたたりの流線のアニメです。
だから全部、とにかく波紋としたたりなんです。ほら雨の降っているのを見てると、（窓を指さし）そのしたたりなんてのはどんどん、どんどん形が変っていくでしょう。それをとにかく全部、合成樹脂を流して作るわけです。





第４楽章。森が乱伐されて木がどんどん倒されていく、ブルトーザーが走り、宅地造成が進んでいく。そんな所をまったくリミテッド・アニメーションの手法で描いていきますが、逃げ迷う妖精とか、動物たちはフル・アニメーションの手法で描くんです。つまりフル・アニメーションとリミテッド・アニメーションが交互に、または同時に出てくるわけです。だんだん乱伐が進んできて、最後にはもうリミテッド・アニメーションだけ残るわけです。で、そのフル・アニメーションの世界はどこへやら消えちゃうんです。ということは、ＵＰＡを始めとするそういうリミテッド・アニメーションが、ディズニー・スタイルを押しのけてしまった、ということを風刺している。所がその宅地造成が済んだ荒涼とした森の後の一部に、まだその妖精が住んでいる片隅がある。と、いうことは、こればけ合理化されたアニメ産業の中にね、まだディズニーの亡霊がまだどこかに残っているんじゃないか！とまあ、こういうオチになる。これが第４楽章です。

だから、みんなそれぞれオムニバスっていうか、エピソードになっている訳です。それをみんな手法を変えてね、描いていくということです。これを虫プロがああなる前に、東京交響楽団で音をとりましてね、ビューマーでダイミングをチェッングしようと思った時に、そのフィルムが粉失しちゃってましてね、グループ・タックのどこかにあると思うんです。探してもらっても無いって言うんですよねエ。あの田代君が全部そういう事が好きなんでね、やってもらおうと思っていたら虫プロがああなってしまったんで、とうとう判らなくなっちゃって、もう１回吹き込み直さなければならないんです。

今、描いているのは、ほんとに第１楽章の始めの方でしてね、第２楽章はとても僕の手に追えんから、これはその筋の専門家にやってもらわなくては、そりゃもうサンリオのメンバーに助けてもらうより仕様がない。彼らがもし、浮き上っていれば、やってもらいたいってことです。

○制作費と時間、手間はどれくらい……

だいたい二千万から二千五百万ぐらいですかね、この作品は全体で45分ぐらいのもので45分の内、5分〜10分はこういった調子なんです（と、本誌のマスコットエミール・コールのファントーシュを指さす)。

ほんとに、お金がかかるのは、第2楽章と第3楽章なんです。第3楽章は大体ぼくくらいのものだからね、これは短いんです。第2楽章は長くて延々とあるからここにまあ制作費の80%ぐらいはお金ががかかるでしょう。だいたい17〜18分ぐらいのものです。制作期間は、おそらくサンリオの人間がやると楽しんでやるから(笑) もう2年や3年かかるかな？
だけど、そりゃいいと思う。それだけかかっても残れば……。もちろん、ぼくはアニメばっかりかかってられないのでコツコツやりながら、こりゃ〜良くやった！ってのを1本ぐらいね、残したいからこれはチト奇跡だって海外のやつらもそれを見て「これは、今作ったんですか!?」ってこういう具合に言わせたいわけです。ぼくがなぜ、言わせたいかというと、今はもうどこかの国でもニメは合理化されてみんな割り切っちゃってもう、バカな仕事はやらないんですね、どこでも。

今の70ミリの何とかかったってあんなのできっこないですよ。〔編集注：70ミリのロックミュージカル「メタモルフォセス」＝サンリオ・フィルム製作。次号でくわしく〕金ばっかりかかって元が取れっこないですよ。サンリオは今、向こう見ずだからね。お金をどんどん出してるけどぬ、青くなると思いますよ、売れなくなれば。絶対、ひとりよがりな物を作ったらだめですね、アニメの場合は！。まあ、あの「哀しみのベラドンナ」がいい例でね。(一同笑)
ぼくらの世界ってのは、あの実験映画でだれにも見せない、ほんとにもしタブーで作るというシステムで考えればね、こりゃもう、どんなバカな事やってもいいんだから、少なくとも劇場公開を狙っていわゆるマスの人達だ狙ってる作品ってのは、妥協に妥協を重ねた中でおもしろいものを作らなければならないと思うんです。て、言って「千夜一夜物語」とかそういうのがいいかっていうと、そうじゃないんだけど。
少なくとも、ひとりよがりってのは、独善主義ってのはマズイと思うんです。そういう様なものを恐いものしらずで作ったとしたら、こりゃもう後で損をするのは（大変こまるのは）一番の親分でね、



アニメーターはちゃんとサラリーをもらって描いてるだけだから、こりゃ別に痛くもかゆくもない。親分が大変、困るんですよね。虫プロの場合もそういう傾向がすごくあったわけです。テレビアニメでも、あったしね。ああいう劇場アニメもややもすると、そういう方に結局、向いちゃうの。僕がやめた後のその「ベラドンナ」にしてもね、あそこまで独善的になっちゃうと、そりゃ作った本人はすごくうれしがってたけどね、山本英一さんはね。「手塚さん、一生に一度は、こういうものを作らなくちゃだめですよ」なんて言ってるんだけど、僕の方にしてみれば、かなわないよ。ほいで売れなかったから虫プロを切られちゃった。そういう様な事になっちゃうんですから、そこの所のけじめをはっきりしなきゃならない。しかし「ある森の伝説」こりゃ、売るためのフィルムじゃないから——
だから、どんなバカな事もしていい訳です。僕がもし、今度売るフィルムを作るならば、かなり妥協するね。やっぱ、そりゃそれなりの作り方をしますけどね。







ピーター・セラーズは出演せず、ブレーク・エドワーズも演出しないピンク・パンサーの話をしよう。

もり・たくや

「ピンク・パンサー2」の中に、ひとつだけ、印象に残るギャグがあった。

クローディヌのあとを追ってスイスまでやってきたクルーゾー警部。グスタードの駅を降りたところでタクシーをつかまえ、運転手に、さきにクローディヌが乗ってスタートした車を指して「あの車を追え！」合点承知と運ちゃん、車を降りてスタコラとその車を追っかけて行ってしまい、クルーゾーひとり車中に呆然と取り残される。

その運ちゃんがまた肥ったオッさんで、仕方なくなく大きな鞄をさげてパレス・ホテルまでたどりついたクルーゾーの前を、クローディヌを送りとどけたタクシーがもどってゆくその後をエッチラ・オッチラ、汗ダクになってなおも追いつづけてすれちがう、というダメ押しの笑いもぬかりなく、これはなるほどギャグだなあ、という感じ。

——ということは、この映画で、記憶するに足るのはこのシーンと、評判のアニメーション・タイトルのふたつだけ、という、さみしい結論になるわけで、あとは、監督のブレーク・エドワーズと主演のピーター・セラーズが、ひたすら悦に入っているだけのこと。

ブレーク・エドワーズというのも実にヘンな人で、「ペティコート作戦」「追跡」「暗闇でドッキリ」「地上最大の脱出作戦」などの、私が大好きな作品を何本か作っていて、だから、ごひいき監督のひとりなのだが、どうもこの人、職人芸でなんでも撮っちまうのもいいけれど、せっかくの自分の資質をよく知らないのかなあ、作品に出来不出来がありすぎるのと、ジュリー・アンドリュースにメロメロになって以後の色ボケぶりは、眼をおおわしむるものがある。哀しいねえ、惚れた女と晴れて夫婦となったからには、ここで一番、奮起してこそ男じゃないか。

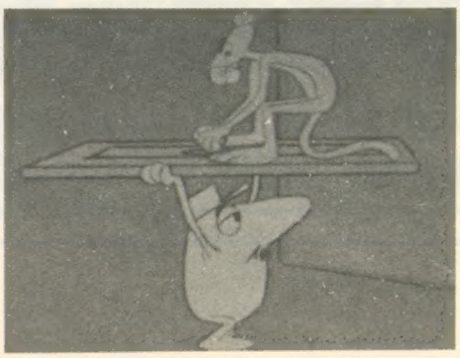
と、まあ、それはそれとして、前作「ピンクの豹」(63年) から11年ぶりの続編、というのも珍らしい。(「ピンク・パンサー2」の年度は75年と公称されているが、タイトルでみるとコピーライト年度は74年とある。つまり、74年製作、75年公開、というわけ。)

そんなに間をおいて作ることになったそもそものきっかけが、NBCテレビで放映を始めたアニメ・シリーズの「ピンク・パンサー」だという。

「ピンクの豹」のタイトル・アニメの好評から、そのキャラクターによる短編アニメ・シリーズ「ピンク・パンサー」が始まったのが64年。タイトルを担当した、もとワーナー漫画のベテラン、フリッツ・フリーレングの製作(1部演出)である。

これは60年代の終りまでで終了した筈だから、こんどのテレビ・シリーズなるものが、たとえば「バックス・バニー・ショー」のように、劇場用の旧「ピンク・パンサー」に、狂言廻しの絵を加えてつないだものなのか、それとも全面的にテレビ用の描きおろしシリーズなのか、そのへんが気になるが、いずれにしても、劇映画 →アニメ →劇映画という尻取りになっているのに変りはない。

(ちなみに、「ピンクの豹」のタイトル・アニメはフリッツ・フリーレングで、クルーゾー警部の第二作「暗闇でドッキリ」はジョージ・ダニング。そして今度の「ピンク・パンサー2」はリチャード・ウィリアムズ。ソウソウたる顔ぶれだが、1本ごとに担当者が変るというのも、ふしぎな気がする)



アニメの「パンサー」シリーズの面白さについては、以前、「ミステリ・マガジン」にも書いたが、フジテレビが契約切れで、プリントをユナイトへ返したため、ちょっと見る機会がなくなった。漫画と言っても、いわゆるジャリ番組むきではないから、むかし(と言いたいほど以前のことだが)「巨泉にまかせろ！」というおふざけ番組の中へ組みこむというスタイルで放送していたけれど、そうした工夫をしないと、せっかくの作品が生かされない。まあ、またのチャンスを気長に待つしか手がなかろう。

ギャグのことをしつっこく書き続けてきて、このごろ、とみに思うのは、文字で表現できるギャグというのは限られていて、ほんとうに見なければわからない、また、だからこそすぐれているギャグに関しては、手も足も出ないということだ。その好例が、テックス・アヴェリーの「へんてこなオペラ」The Magical Maestro('52) がそうで、指揮者に化けた奇術師の、指揮棒ならぬ魔法のステッキの一振りごとに、ステージのオペラ歌手が、フラ・ダンスの踊子、風船を持った子供、カルメン・ミランダ(頭に果物をあしらった珍妙なターバン姿が評判で、当時“ブラジルの爆弾〟と呼ばれたアクの強い歌手)等々に、つぎつぎに変身する可笑しさは、筆舌につくしがたい。練りに練った絵コンテと、何秒何コマという絶妙のタイミングの積み重ねで成立っている作品で、もちろんアヴェリーの傑作の一つなのだが、(ただし、UPAのごく初期に、ジョン・ハブリーが、そっくり同じ発想のThe Magic Flwke 〈'49〉という漫画を作っている)言葉で誰かに伝えるとなると、どうしたって「呪いの黒猫」Bud Luck Blackie ('49) などの方が説明しやすいから、そちらをとってしまう。

パンサー・シリーズの佳作傑作数ある中でも、「大工とその弟子」（「巨泉……」で放送したときの題名を、便宜上使わせてもらう）The Pink Blueplint ('66) は、劇場公開されたアカデミー賞受賞作「いじわるヒョウ・ペンキ屋の巻」('64)に匹敵するできばえだが、これが言葉にならないギャグが多い。いくらか書けそうなギャグを並べてみよう。いつもパンサーにしてやられる例の男が、ブループリント（青写真）をひらいて家を建てにかかると、現われたパンサーが、それを自分のピンクのブループリントとすりかえてしまい、工事が混乱するという一席。

＊ドアだけが立ててある。パンサーがそのノブを握って開けようとしたとき、反対側からきた男が、それとは知らずにドアを水平にかついで右へ。そのまま玄関へはめこむ。内側からパンサーが勢いよく開けたため男は壁との間にはさまる。男がドアを床へ倒してフン然と現われると、（これからがちょっとややこしい）いま玄関先の床（タタキ）に倒れたドアがはね起き、男は再びツブされる。下から現われたのはパンサー。つまり、倒れたドアは、瞬時にして出現した地下室のドアと化したわけ。できたて（？）の地下室を出たパンサーが、くだんのドアを開くと、ノビた男は地下室への階段を転げ落ちる。ふりむいたパンサー、悠然とその地下室の入口を持ちあげて壁へとりつけると、男はその階段から転げ落ちてくる……。

実は、フジテレビで採ったメモ（ひとさまには判読できないシロモノ、なにせ書いた当人でさえ読めないのだ）を引っぱり出して書いているのだが、ギャグの構造というか、方法論的にはわかっていても、いざ書いてみると、画面的につながらないため、何度か立往生した。だから、作品を見ていない人には、読んでもわからなくて当然だとう思う。

アヴェリーも、ドアを使うギャグが好きで「ねむいうさぎ狩り」Doggone Tired ('49) の中でも、うさぎにローラースケートをはかされた猟犬が、地下室へ転げ落ちたかと思ったら2階の階段を転げてくる、というめまぐるしいギャグがあるが、アヴェリー流のスピードと馬力とはこと変って、いとも優雅なピンク・パンサーが、余ノ辞書ニ不可能ノ文字ナシてな例のペースで、おもむろに、という調子ですんなり演ずると、その狂気の味はまた格別なものがある。

＊男がせっせとノコギリびきをしている真下で、パンサーが釘を打っている。その鼻先へおがくずがパラパラ。パンサーがクシャミをしたはずみに、くわえていた釘がダクトへ飛びこみ、はずみで上昇して男の尻へ。イテテと男が落ちる途中で板に当り、その他方の端に乗った釘樽がはねて、地上へ落ちた男の頭上へ。男はハリネズミのごとく相成る。

＊男とパンサー、板の両側に立って、お互いに釘を打ったり打ちかえしたり。しばしくり返して、ゴウを煮やした男、特大の木槌でガン！と打つ。そこでパンサー、古ビルをぶっこわす鉄球を持ち出し、釘はおろか、板もろとも裏側の男まで打ちとばすと、煉瓦塀に激突。その板面から、釘だけがトントコ打ち出されてくる。

双方でやりあって次第にエスカレートするのは、ユーゴのD・ヴコチッチの「ピッコロ」など、よくあるギャグ・シチュエーションなのだが、ここでは、塀にぶつかってピッタリはりついた板から、なおも釘が打ち出されてくるサゲが、実に効いている。板の裏側の男が、どんな状態なのか、一切を観客の想像にゆだねているところが、まことにズルく、イジわるく、ザンコクな可笑しさが、脇腹のあたりから、じんわりこみあげてくるのだ。こういうギャグは、ワレワレ日本人としては、見て笑うことはしても、みずから作り出すところまでは、なかなか行かないのだよ。

＊電気ノコギリ（小型の）をかけようとしたパンサー、つまずいてスイッチが入るノコギリが走り出して梯子をかけおりる。下から昇ってきた男は仰天、縦まっぷたつになった梯子の片側に辛うじてつかまる。かけおりたノコギリはこんどは男がつかまった棒を切りのぼり、男は必死に逃げのぼる。棒の先端で男とノコギリの宙乗り。そして男とノコギリは、シーソーの両端へ落ち、ノコギリははじかれて上り、吊された鉄球のロープを切る。鉄球がシーソーへ落ち、こんどは男がはじき飛ばされて上方の工事の板の上へ、ノコギリが男に迫り、男の周囲の板を丸く切る。男落ちる。

アメリカ漫画映画の典型的なドタバタで、板をわざわざ丸く切りぬいて男を落すくだりなどは、ワーナー漫画そのもの。それも道理で、F・フリーレング以下のスタッフは、ほとんどがワーナーの横すべりなのだから。

ただ、ルーティンとはいえ感服するのは、シーソーではじかれたノコギリが鉄球を落し、鉄球ではじかれたために男がまたもやノコギリに追われる――という段取りのうまさ。間にワン・クッションはさむのがコツなのだが、なかなかそうは考えが働かないものだ。ふつうなら、シーソーではじかれたノコギリが、そのまま男の近くへ落下するという程度で、それではギャグが平板になり、展開が行きづまってしまう。

ただ、この作品、全篇のサゲが弱い。「ペンキ屋の巻」に一歩をゆずるのは、このためだ。どんなふうに弱いのか、記録のために書いておこう。

＊いろいろあったのち、男は車で去る。地中から現われたパンサー、彼の図面通りのピンク・ハウスが建っているのを見て喜び、さっそく玄関を入ると、正面の壁面が（キートン喜劇のごとく）ブッ倒れてしまう。END。

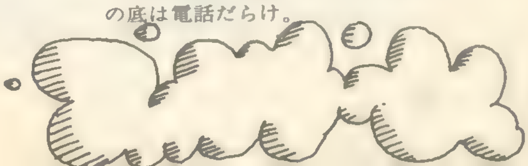


「はと時計の巻」In the Pink of the Night ('68) は、末期のものにしては、いいギャグがつまっている。ただし、ストーリー性があるためか、パンサーの個性が、やや小市民的（イヤらしい言葉だが）になっているのは否めない。演出は珍らしくアート・デヴィス。珍らしく、というのは、このシリーズの演出は、その大半が、ワーナー漫画のレイアウト出身のハウリー・プラットの担当で、初期の何本かは、製作のフリーレング自身が演出し、プラットが演出補を相つとめる、というスタイルだからだ。

＊朝。パンサー眠っている。枕もとの目覚しが鳴ると、パンサー、ベッドから手だけ延ばして引出しからレンチを出し（引出しの中はレンチで一杯）目覚しを叩きつぶし、その上の引出しへ入れる。

＊ラジオにタイムスイッチが入って鳴りだす。パンサー、下の引出しから足でハサミを出し、電源コード(つぎはぎだらけ)をチョン切る。

＊電話が鳴る。パンサーがハンドルを押すと床が開き、電話はその穴へ落ちる。穴の底は電話だらけ。











＊ブラインドが巻き上り、日の光がベッドへさしこむ。あくびをしたパンサー、腕時計を見ると9時。あわてふためいたパンサー、帽子を取り、コーヒー粉を飲み、水を飲み、コップを放り投げる。角砂糖とクリームを飲み、ドアを倒して表へ飛び出し、ハッとしてもどってドアを立て起し、そのままカギをかけて駆け出す。
駅へ着くと、列車は出てしまったあと。

ここまで見て、オヤオヤと思う。これではディズニー漫画のグーフィやドナルド・ダックと同じだ。日常の次元を越えているがゆえにユニークな存在だった筈のパンサーよ、お前もか！

まあ、シリーズ漫画の主人公なるものは、大体において、そうした変遷をたどるとしたものだ。狂気と兇暴で売り出したウッディ・ウッドペッカーも、のちにはみちがえるほど愛らしくなったし、腹ぺこコヨーテをカリカリさせる異次元の鳥ロードランナーも、シリーズの末期には、すっかりコヨーテの次元まで落下してしまった。

しかし、このあと、パンサーがカッコー時計を買ってきてからの騒動は、なかなかの見物である。

＊朝7時。カッコー！の声に、パンサー、反射的にレンチでテーブルを打ちこわす。鳴声のたびに、ハサミで空を切ったり、落し穴のハンドルをおろしたり。

＊カッコー、一段と大声を張上げる。パンサー、ひもでそのくちばしをグルグル巻きにして時計の穴へ押しこむ。カッコーは、分銅づたいに下へ降り、壁ぎわの金庫を、落し穴の上まで押して、再び鎖をつたわって時計へもどる。

7時10分、カッコー、二挺拳銃を乱射する。パンサー、テーブルをぶっ叩いて粉々にする。カッコー、ドラを乱打する。パンサー、ハサミで空を切る。カッコーラッパを吹きならす。パンサーが落し穴のハンドルを押すと、金庫の足に縛ったロープがパンサーの尻尾に結んであり、金庫が落ちると同時にパンサーも落し穴へ引っぱりこまれる。大音響。(F.O.)

＊パンサー、分銅の鎖を結んだカッコー時時の鳥の出入口を釘づけにし、針をペンチで引っこぬく。その穴からカッコー鳥が鳴きたてるので、コルクで栓をする。鳥は、背後の壁を小さなノコギリで丸く切り、ロープづたいに家を抜け出す。

＊眠っているパンサー、ノックの音に、ガウンをまとって起き出し、玄関を開けると、カッコー鳥は、WAKE UPのネオンが点滅するガラクタ・ワンマン・バンドを打ち鳴らしている。パンサー啞然。

パンサーは鳥をつまんでもとの時計へ押しこみ、それを抱えて表へ飛び出し、高い橋の上から投げすてる（シルエットのロング・ショット）。鳥は裏の穴から抜け出し、時計を筏がわりにこいで岸につき、時計をエンヤコラとひきあげる。

ベットにもぐったパンサー、さっきまでカッコー時計があった壁の釘をじっとみる。溺れるカッコー鳥のイメージにつきまとわれ、冷汗をかくパンサー、ついにたまりかねて家を出て、さっきの橋から小手をかざして水面を伺い、ついに飛びこんで川底を探す。その頃すでに時計は家の壁にかかり（どうやって取りつけたのかしら？）鳥はほうきで時計を掃除している。

あきらめたパンサー、橋から花を投げてやり、しょんぼり家路につく。このへん、「トムとジェリー」シリーズでたまに見せる人情ばなしの、雪や嵐の戸外へジェリーを放り出したトム（逆のケースもある）が、後悔したり悩んだり、という、あの趣向である。

帰宅したパンサーが、「クークー！」という鳴声にびっくりしたのは言うまでもない。あとは結末のギャグである。

＊パンサーとカッコー鳥、並んで眠っている。目覚し時計が鳴りひびくと、カッコー鳥、眠ったまま手をのばし、巨大なレンチで目覚しを叩きつぶす。パンサー、鳥の頭をなでる。END。

「ピンク・パンサー」シリーズ62本（らしい）のうち、⅓足らずを見ての印象だけれど、そもそもは「ペンキ屋の巻」「大工とその弟子」などのように、終始超然と、優雅に、相手をパニック状態に追いこむところに、えもいわれぬユニークな味があったのだが、あとあとアイデアが続かなくなり、1940～50年代のアメリカ漫画映画のさまざまなパターンを、使える限りとりいれたのだろう。パンサーのキャラクターが、後期になると、一作ごとに、被害者的になったりサラリーマン的になったり、なんとなくチマチマしてくるのはそのためか。にしても、これは、私が愛惜おくあたわざるところの、アメリカ劇場用短編漫画の伝統の、最後の輝きであるのは確かなのだ。

（追記：「いじわるヒョウ・ペンキ屋の巻」は、ユナイトの最近のリストによると、「ピンクの豹・ペンキ騒動の巻」と改題されている。あたしゃそこまで面倒みきれないよ。）

子門真人——32才



顔を見せぬ歌手を紹介[illegible]
顔を[illegible]ます[illegible]「[illegible]け！たいやきくん」のお兄さん[illegible]

Q　デビュー曲は（？）子供番組ですか？

A　はい「レッツゴー・ライダーキ[illegible]」が最初ですね、46年の[illegible]それが大ヒ[illegible]もありまして[illegible]それから声がかかるようになったんです

Q　それ以前は何を？

A　歌手をやってましたが失敗しまして、[illegible]時期は[illegible]失恋な[illegible]度と歌手はやるまいと決心したんです

Q　でも、唄い出したキッカケは？

A　歌手をやめて制作部門に4年間いたんだけど[illegible]計理にまわされて気持ちがスッ[illegible]制作に[illegible]も役者や歌手との間が近くていやだった[illegible]はじめたんです

Q　[illegible]？

A　[illegible]

Q　その他に趣味は？

A　[illegible]無線ですね[illegible]

Q　アニメーションは良く見ますか？

A　[illegible]作から良く見て[illegible]の「ダンボ」「白雪姫」「百一匹わんちゃん大行進」「わんわん物語」等の一連の作品から[illegible]プロの「千夜一夜物語」も見ましたね

Q　どういう所が魅力ですか？

A　[illegible]ならではの、絵が表現する[illegible]ですね…

Q　話しは変りますが、子供は好きですか？

A　良く聞かれるんですが、実の所よくわからないのが本音です。ただぼくの回りに子供たちが集ってきても気にならない。そういった意味では好きなのかもしれませんネ

Q　話しが飛びに飛びますが、子門さんから見て水木一郎さんってどんな人です[illegible]

A　[illegible]で[illegible]て好青年ですね。

[illegible]次回の予告もしながら話しを[illegible]
[illegible]という意で、おち[illegible]
[illegible]、顔を出すことを約束して[illegible]
尚、子供番組は唄いつ[illegible]

☆子門正人（しもんまさと）本名・藤川正浩
㈱円谷音楽出版　チーフプロデューサー　☆独身
港区六本木２—２—５　第21森ビル別館７F



アニメーションの作り方〔1〕

アニメを作ろうとすると、いろいろな問題にぶつかります。アニメは総合芸術なのですから美術的な事や演出の事も知らなければならないし、音をつけようとすればそれなりに知っていなければなりません。

「アニメの作り方」では、最底知っていたい事をそれぞれの分野について研究して行きたいと思っています

映画は、1秒間に24コマの割で動きをフィルムに記録します。これを映写すると動いている様に見えるわけで、人間の目の残像効果などによるものだとされています。

これは絵についても同じ事が言えます。この本の下のページ数を表わしている物は、本をパラパラとめくる事によって動いている様に見えます

この様に少しづつ変化させた絵をコマ撮りにして連続映写すれば、絵が動いているように見えるのです。こうしてコマ撮りによって動きを作り出す映画（人形や影絵をふくむ）をアニメーション映画と言います。



左下の絵を見て下さい、アニメを作る時のもっとも基本的な例です。撮影機を固定して黒板に絵を画き、それを撮ります。つぎに今撮った絵を消して少し変化させたものを画き撮ります。これをくり返しながら撮り進んでゆけば良いのです。

これはアニメを作る段階における2つの作業を示しています。それは絵を画くことと、撮影をすることです。しかしこの様に画きながら撮ってゆくのでは不便なので、1枚1枚の絵を別の紙に画いて、最後にまとめて撮影する事が考えられます。

そうして絵を画いたり撮ったりするためには、紙が前の紙に対して同じ位置に来ないと絵がズレてしまいます。そのために使われている道具がタップです。

タップには2つ穴の物と3つ穴の物があって、映画やテレビのアニメなどを作る時に使っているのは3つ穴タップです。

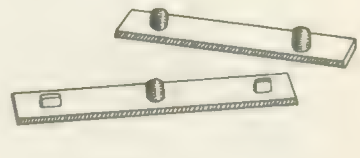
あなたが使うのなら、事務用のパンチで穴のあけられる2つ穴の方が便利です。タップは一部のデザイン学校の売店でも売られていますが、地方の人などタップを手に入れるのが困難な人は自分で作ればいいでしょう

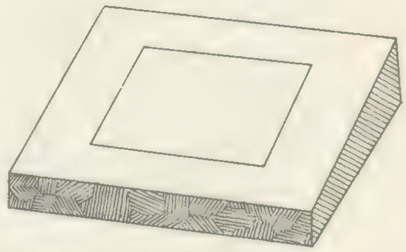
パンチであけた穴に筆の軸をさしたりして都合のいいものを見つけ、台木にうめ込めば出来上りです。市販されているパンチは、穴の中心から中心が80mmで直径が5mmです。

厚紙などはタップを使わないで、4スミを木などで止めてもよく、使い方によっては非常に便利です。

さて今度は絵を画く過程ですが、アニメートする場合、原画（動きの初めと終りを指定する）を中割り（指定されたタイミングに合わせて、初めと終りの絵の間をうめてゆく）するのですから、先に画いた絵と見くらべて画かなければなりません。

ですから下から光を当てて重ねて画けばよく、そのために使用するのがトレス台です。これはアニメばかりではなく他の事に使っても便利なので、一家に一台？はほしい物です。





市販されているものは木や鉄で作った枠にすりガラスをはめ込んで中に10ワットぐらいの螢光灯を入れたもので、これも日曜大工の好きな人ならすぐ作れるでしょう。

元気のいい人なら机に穴をあけてみては？

熱が出るので電球は使われていませんがその方が目が疲れないので、作る人はいろいろ試して下さい。

こうして動画が出来上って、これを撮影すればいいのですがこれだと背景や前景も一枚一枚画かなければならないので手数がかかる、というわけでセルが使われる様になりました。

セルを使うと動く部分の動画をセルにうつせばいいので、人が歩いて来て言葉を話すというシーンでは、背景・人間・口の動きと3枚に分けて画き、それを重ねて撮影すればいいのです。

それによって背景に凝る事ができますし、裏から色をつけるので塗りムラが出ないという長所があります。

しかし出来上った動画をセルにトレスして色を塗るという工程が増えるのと、ただでさえ多くの枚数を使う上に、重ねる分のセルの枚数を合せると3分物でも4000枚近い絵を使うのでその金額もバカになりません。

もっとも今は1秒間に24枚の絵を使うフルアニメはほとんど作られず、1枚の絵で2コマや3コマ撮影するのが普通で、30分もののテレビ番組でも6000枚ぐらいです。

そのため1秒間に24枚使うのが、12枚か8枚になるのですから動きのなめらかさがそこなわれるのは事実です。

セルを使うようになって、さまざまな技法を使えるようになりましたが、1つ1つあげていたらこのコーナーで書ききれないので、また別の機会にしましょう。

最近、画材店などでアニメ用としてセルが売られていますが、少し薄くてもかまわないのでしたらデザイン用のセルフィルム、1m巾で何mという単位で売っていますから、それを切って使えば割安です。

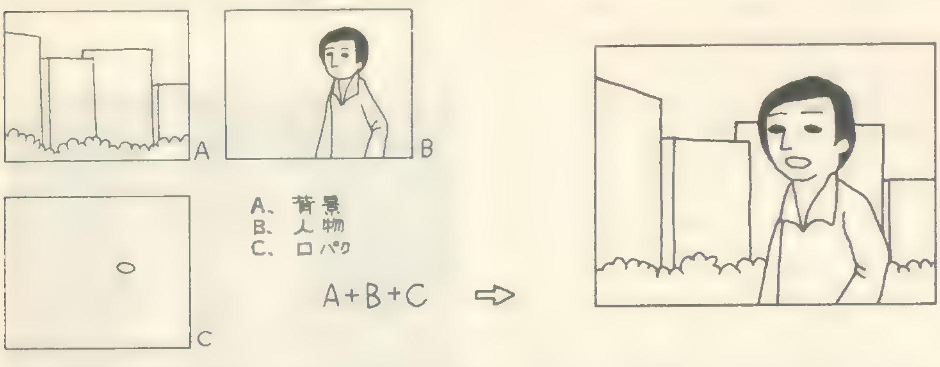
紙に色を塗るのでしたら、色鉛筆・サインペン・絵の具等を使うのですが、セルに塗る場合は表面が非常になめらかで弾いてしまうので、ビニール塗料が使われます。

これも最近はセル用絵の具として画材店で売っているので、これを買って使えばいいでしょう。

ビニール塗料は水でうすめる事が出来、かわくと水に溶けなくなる物ですが、あまりうすめて使うと弾かれてしまうので程々に。
また、セルは重ねて使うので厚く塗らないと下が透けて見えてしまいます。

ビニール塗料は乾くと水で洗ってもとれなくなるので筆はときどき水で洗うようにして使わないとヒドイ目にあいます。失敗した所は竹のヘラ(筆の後ろを削って作ればよい)等で、こすりとります。

他の絵の具としては、ポスターカラー等に弾き止め済（スプレーに入った物が売られています）や石けん・シッカロールを混ぜて使ってもいいのですが、これらは乾燥するとはがれやすくなるので長期に保存することは出来ません。



こうして出来た絵を三脚等で固定して撮影するのですが、その場合床のしっかりした所に置かないと撮影中にズレてしまいます。三脚もグラつく様な物では使いものになりません。カメラもレリーズを使い少しでもズレないようにした方が良いでしょう。

写真の複写台に固定して撮るのもテですし、またまた好きな人は撮影台を作ればよろしい。

絵と背景をただ重ねるだけでなく、間に空間をあけるマルチ効果を使えば距離感を出すこともでき、撮影台は凝れば凝るほどスゴイ物が出来ます。

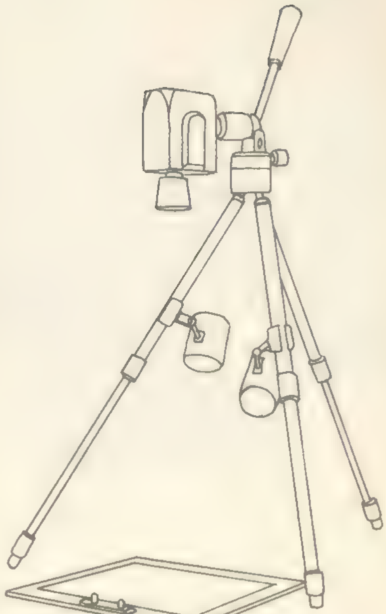
カメラは1眼を使わないと、フレームの位置がズレて半分しか写らなかったりします。2眼の時は撮影台につけて方眼紙を撮ったりしてみて、ファインダーと画面のズレを調べておく事が必要です。

絞りですが、オートの物だと背景のない場合（白バック）では絞りこみすぎてしまうので気をつけて下さい。逆（黒バック）の場合もハレーションを起さないように。

また撮影をする時は、オートをロックしておかないと1コマごとに明るさが変わったりします。

さて、カメラの下に絵がくるようにタップを固定して絵を置き変えて撮影しますが絵が浮き上ったりしないためガラス（無反射ガラスを使った方が良いでしょう）で押さえます。ガラスは一方をガムテープで止めて使っても問題はありません。

照明ですが明るい方が被写体の深度が深くなってピントがハッキリします。今は8㎜でもＡＳＡ200という高感度のフィルムを売っているので100ワットのスタンド2本もあればじゅうぶん撮ることができます。



照明の位置はフレーム内の全体が等しい明るさになることと、反射光がカメラに入らないこと、それに絵を変える時にじゃまにならない様な場所に置くよう注意して下さい。

部屋の明りやカメラ自身が反射して写ることもあります。明りは消すように、カメラには光が当らないように、それでも写るときは黒のラシャ紙でマスクを作ってカメラにかぶせます。

撮影の時も撮ったコマ数・絵の順序・セルを重ねた時の変え忘れなどのミスの危険がいっぱいです。そのためにはタイムシート（使い方は後で）をつけたりして極力失敗をさけましょう。

大ざっぱですが1回目として、もっとも基本的な事と、通常使われている道具について説明してきました。お分りいただけたでしょうか？

アニメは自分のアイデアを自由に生かす事が出来ます。まだ他の人が行なった事のない様な手法もあるでしょう。自主作品なのですから、テレビアニメで使われている技法などにはあまりとらわれないで、自分なりに自由な作品を作ってみて下さい。

● 自主作品解明

「コプト聖歌」



石之博和氏　近　影

「コプト聖歌」とは

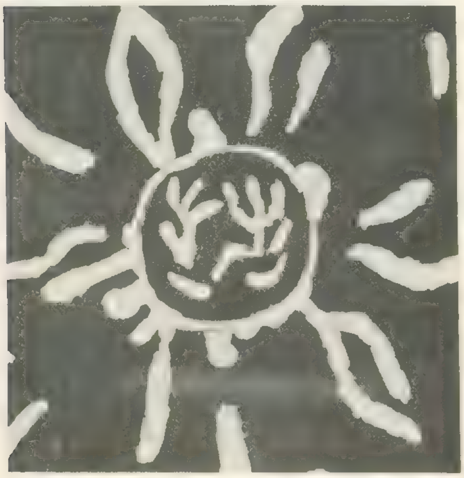
石之博和氏の自主作品「コプト聖歌」は去年の五月に開かれた第一回ＰＡＦ（プライベート・アニメーション・フェスティバル）に参加した作品のひとつで、専門家の間からも数多く賞賛を得た作品である。

この短編は主題曲をテーマにして作られたもので、ストーリーはなくモンタージュである。太陽と風の神話、発掘された古代の神々とその輪郭、伝説的な男女の悲恋といったさまざまな、太古・古代のイメージの断片が、暗黒の中からつぎつぎと現われては消え、また現われては消えて行く。

モノクロの上にさらに黒を基調とした画面は、無限で奥行きのある混沌とした空間を感じさせる。

目を閉じた網膜の底の方から涌きあがって来る様々な幻覚、それを映像化した作品ともいえるだろう。





▲「コプト聖歌」▶
▲（4枚とも）▶

作者のプロフィル

この「コプト」は石野氏が武蔵野美大の学生時代に作りあげたものだそうで、現在の石之氏は東京は世田ヶ谷にあるテレビ動画の下請けスタジオで、プロアニメーターとして活躍しているそうだ。26才。

会ってみると意外にも、あの暗陰な作品の作者とも思えない温和な顔つきの青年で、ややテレながらも「コプト」の説明をしてくれた。

作者「コプト聖歌」を語る

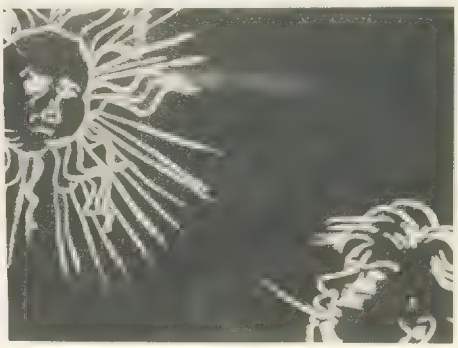
僕が「コプト」を制作したのは（大学の）三年の春から四年にかけてで、今から四年ぐらい前のことだったと思います。

その頃、武蔵野美大漫研のアニメ制作班は新しいテーマ競作として、一風かわった音楽による〝イメージ短編〟を作ろうということになりました。

制作班はその音楽として、最初はナニワ節や お経のテープを使う予定だったらしいのですが、部員関係では手に入りそうもなく、わざわざ買うほどの執着もなかったらしく、たまたまあった宗教音楽のサンプルレコードを使うことになったんです。

各自でその中から好きな曲を選んで制作をはじめたのですが、最初４、５名作っていたのが次々と脱落して、結局完成したのは八木君の「グレゴリオ聖歌」と僕の「コプト聖歌」だけということでした。

さて、制作にあたっては、歌われている内容や「コプト」というのがどこにあるのかもはっきりしないほど未知なるものを使ったわけなのですが、この人間臭い泣きさけぶような音楽に曳かれて、どろどろしたようなものを作ろうと思ったのです。



この歌は一分半ほどの曲なのでフルアニメ（８㎜の場合は１秒当り18ないし24枚書くことになる）にしてやれと思って作りはじめました。最終的には2000枚ぐらいになったと思います。

はじめは紙の上に鉛筆で書いた線をそのまま写すつもりでしたが、それではあまりにも画面が白けてしまって面白くないと思い、逆に背景を黒くぬってりやました。

また黒いクレパスで書いてネガフィルムに撮ろうとも思ったのですが、これは８㎜のネガフィルムが市販されていないのであきらめました。

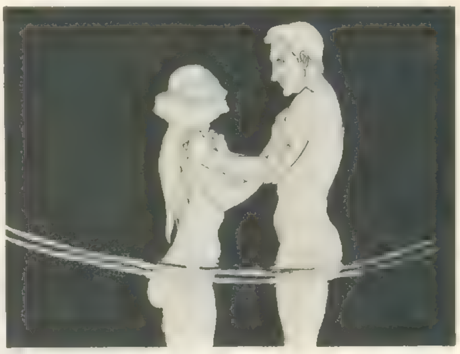
さらに、鉛筆で書かれた線を白いクレパスでなぞり、その上から黒絵具をぬると、クレパスの部分だけはじかれることになり、結構おもしろい効果が出ました。

また、最初は墨汁を使ったのですが、紙にしわがよったり少を反射したりするので、途中でポスターカラーにかえました。これも、濃さによってはクレパスをうまくはじかなかったりで、それほど使いやすくはなかったと思います。

こうして懸命に手を抜こうと努力したわりには、動画を作るのに４ヶ月もかかってしまいました。

その上、Ｏ・Ｌ（オーバーラップ）の部分を作画の時に横着して、そのまま書きこんでしまってそれ用の精密なマスク（上から絵を部分的に隠す紙）も作らずに、つぎはぎの紙で撮ったりしたので、撮影にも思ったより手間どってしまいました。

さて、そんなこんなで出来あがったフィルムをいよいよ音楽といっしょに映してみたのですが、絵が完全に音楽に喰われてしまったと思いました。



つぎの作品の制作は、今のところしばらく作らないつもりです。仕事の方も結構おもしろいし急がしいしで、学生の頃の様にはいかないでしょう。

ただ、プランとしてはＮ君と共作する予定のものがあります。今度はセルアニメになるでしょうけど、テレビアニメとは違った感じにしたいと思っています。ホクホク。

乞御期待。

日本人形アニメーションの歴史　(2)

文・中村武雄

──前回より続く、

話は少しもどってしまうが、歴史的事情をたどってみると。1963年（昭38）三笠映画とパーカープロが「羅生門」（15分）をM・O・M出身の郷田三郎のアニメーションに依り製作。翌1964年（昭39）やはりM・O・Mでアメリカからの仕事の中で育った岡本忠成が（株）エコーを創設し、M・O・Mの在り方に疑問と不満を持つ仲間を叫合して、1965年（昭和）「ふしぎなくすり」から1975年（昭50）「水のたね」（海洋博のための作品）迄に9本の短編といくつかの小品を作っている。

1965年（昭40）国内TVシリーズ「シスコーン王子の冒険」15分、19本を製作したスタジオKAIも、製作主力は、全員M・O・M出身者。アニメーター、撮影、演出、美術、編集、製作部も、ピノッキオシリーズを作り続けたスタッフであり、全員解雇を機にアンチM・O・Mとして製作態勢を作ろうと努力したが、比のシリーズが終ると同時に解散してしまった。

1967年（昭42）TV映画製作会社としては最大手であった国際放映株式会社が実写の中で巧みに人形アニメーションと動画を絡ませた「コメットさん」30分、79本を製作。1972年（昭47）ハリーハウゼンもどきの人形アニメーションを使った特撮映画「魔人ハンター・ミツルギ」30分、13本。翌1973年（昭48）前作「コメットさん」ばりの「変身ポンポコ玉」30分、13本が同じくM・O・Mで育ったアニメーター、真賀里文子、中村武雄(筆者)等の参加に依って製作された。真賀里文子演出に依るケーシー高峰を人形化したミニ番組「サラリーマン、ミニミニ作戦」1970年（昭45）3分、26本のピープロダクションなどの動きもあるが殆ど単発の型で終ってしまっている。

1967年（昭42）消失したM・O・Mプロダクションは、翌1968年（昭43）ヴィデオ東京として再出発した。（持永只仁は比の時期より少し前にM・O・Mから離れ中国通信社に席を置きアニメーションとは関係のない業務に就いている）かつての経営陣は全く参画してはいないが、前身のM・O・Mプロダクションの全ての面での遺産相続人でありアメリカの下請製作が主義であり、1972年（昭47）迄の間に、TV用、50分もの3本、30分もの1本、自主製作1本を製作してヴィデオ東京もクローズした。



「ダニー・ケイの不思議な世界」より「はだかの王様」

人形芸術プロダクション時代に人形作家として参加していた川本喜八郎は、持永只仁にアニメートの手ほどきを受け、持永只仁が去った後の空席になったアニメターと人形作家としての両輪を勤めることとなり、シバプロダクションとして新発足した折りにはチーフ・アニメーターとして子弟の養育にもあたった。　その後、川本喜八郎は飯沢匡等と共にシバプロを離れ、NHKの子供番国の人形製作や人形絵本製作などを業務とする代理社の仕事などをやり、傍ら、全くヒモ付きでない単独な自主製作として1968年（昭48）、京都の壬生狂言から材をとった人形アニメーション映画、「花折り」を初めとし、1974年（昭49）「詩人の生涯」迄、計5本、そして現在「道成寺」などに取材したものを製作中とか。

川本喜八郎等の作品に見られる、羽子板の押し絵状の半立体の人形は、動画に於ける撮影のプロセスと同じ要領で、人形を垂直撮影するものであり、動画に於ける自由な動きは制約され、どうしても平面的、様式的にならざるを得ない。併し、その限りでは容易に、確かな動きが可能であり、自己の世界は作り易い。

1972年（昭47）ヴィデオ東京プロダクション出現。自主作品1本、アメリカTV用、50分、2本が1975（昭50）現在の製作状況。

これでも解る様に、人形映画製作所──M・O・Mプロダクション──ヴィデオ東京と続く、一連の流れの末流に在るもので、内実及び創造姿勢は、M・O・Mと何ら変るところのない遺産継承人と言えるだろう。

功罪相半ばする相で、日本に津波のように押し寄せたアメリカ製人形アニメーション映画もそれとは全く反比例するかのように日本国内で目することは殆ど出来なかった。TTVで何本かは放映されても、アメリカからの輸入作品として、勿論日本側の実際のスタッフの名前など、スタッフタイトルには見ることの出来ない状態で（正確には持永兄仁は、アニマジックテクニシャンとして、TAD-MOCHINAGAと言う二世まがいに変へられて載った例はある）のものであり、比れを是認して来たプロダクション側の姿勢は明らかであると言へるだろう。



1965年（昭39）　株式会社エコー
C→カートーン（動画）

65' ふしぎなくすり
66' ようこそ宇宙人
66' キツツキ計画
68' おじいちゃんが海賊だったころ
68' 10人の小さなインディアン
70' ホーム・マイホーム
70' 花ともぐら
71' チコタン　C
71' お淋し谷　C
71' 12月の歌　C
72' さるかに
72' モチモチの木
73' 南無一病息災
73' 旅は道連れ世は情け
74' 小さな五つのお話
75' 水のたね
75' うらめし電話　C
75' おなかの大きな王子さま　C

1968年（昭43）　川本喜八郎

68' 花折り
71' 犬儒戯画
72' 鬼
73' 旅
74' 詩人の生涯



いずれにしても飛躍的に殖えた人形アニメーター及び各パートのスタッフ達は、受註本数の激減に依って、転業、廃業を余儀なくされ、それぞれが、それぞれの立場で、種々、努力しながらも、現在の日本ではそれは全くの創業的なきびしい努力が必要なのだ。技術者、創造者として生きて来た現場の人間にとっては、外に新しく市場を開拓することは想像を絶する苛酷な条件ばかりで殆ど不可能に近い状態なのだ。

そういうわけで1961年（昭31）にはじまった大きな動きも、大きな成果を生むこも無く、体得した国際水準を上まわる高い技術も、生かされることもなく、くすぶっているのが現状である。

人形映画製作所方式とでもいう、丸物の物体＝人形アニメーションは、精度の高い関節を持った人形と、生理学的、物理学的諸条件を踏んまえた、全くの経験と勘に依る、熟練した基礎技術が欠かせないものであり、ドラマを展開して行くうえでの手法はこれ以外には無いであろう。　一朝一夕では育たない斯横なアニメーターも、現在では5人にも充たない状態である。

以上がC.Fとプライベートフィルムを除く劇映画型式をとった人形アニメーション映画の総てである。

以上でも解るように、人形アニメーションに関わるフィルムは、殆んどが人形映画製作所、及びその後継のアメリカ下請作品の経験を経たものであり、（C.Fに関しても殆どが然り）その道標的意議は否定出来ないと私は思う。

1953年（昭28）から1961年（昭36）アメリカ映画下請を経て本年で22年。1961年以降の14年間は、それ以前の1953年からの8年間に果して匹敵し得る足跡を示したのだろうか？

技術面での進歩はいわずもがな、自ら真に創造者としての姿勢・精神は胸を張れるものがあるのだろうか？



「ピーターコットンテイルがやって来た」
ピーターとビニー大佐



「サンタが街にやって来た」

やっと成年に達した人形アニメーション映画――立体アニメーション映画が市民権を真に獲得する為には、関係者は、自己の立っている処を、見なおしてみる必要があるのではないだろうか。

1968年（昭43）　ヴィデオ東京

68' リトル・ドラマーボーイ
70' サンタが街にやって来た
71' ピーター・コンテイルがやって来た
71' てんまのとらやん　（自主制作）
72' ダニイ・ケイの不思議な世界

1972年（昭47）ヴィデオ東京プロダクション

74' まけうさぎ　（自主制作）
74' サンタのいないクリスマス
75' ルドルフの輝け新年

1957年（昭32）　学研

58' こざるのぶらんこ
59' ポロンギター
59' いねむりぶうちゃん
60' かさじぞう
60' もりのおんがくたい
60' くつやとこびと
61' かもとりごんべい
62' おむすびころりん
62' ありときりぎりす
63' セロひきのゴーシュ
64' 泣いた赤おに
65' つるのおんがえし
66' わらしべ長者
67' 北風のくれたテーブルかけ
67' マッチ売りの少女
68' 海びこ山びこ
68' みにくいあひるの子
69' どうぶつむらのこどもたち
70' 花ともぐら　（エコー）
70' 彦一とんちばなし
71' まこちゃんのこうつうあんぜん
72' むかしむかしももたろう
72' さるかに　（エコー）
72' 王様とナイチンゲール
73' ふしぎな井戸
74' したきりすずめ
74' にんぎょひめ

1959年（昭33）（株）東京中央プロダクション

59' かみなりん子物語
59' 笛吹き王子
60' ピーター兎の冒険
60' ベニスの商人
62' ライオンとねずみ
63' 動物オリンピック
64' 子鬼の祭
64' 三匹のこぶた
65' 七匹のこやぎ
65' 兎と狼
65' 兎とかめ
65' おやゆび姫
66' やくそく（続・ピーター兎の冒険）
66' 一寸法師
67' ずるい旅
67' はだかの王様
68' オモチャの冒険
71' 桃っ子太郎
73' かぐや姫
75' 野ばら

編　前回の訂正・補足

本文中、学研の「人魚姫」が1973年(昭48)とあるは1974（昭49）のまちがいです。また人形芸術プロダクションのリストの中に58' ふしぎな太鼓　が落ちていました。M・O・Mプロダクションの「ルドルフ物語」で、中村武雄、真賀里文子とあるのはまちがいです。

今回は誌面の都合で年代と作品名のみ記載させていただきましたが。前回、付記された名前は、その作品のアニメーターです。

まちがいばかりでほんとにすみません。



「てんまのとらやん」

編　以上二回にわたって、実際に人形アニメーションの仕事に携わる人間である中村さん御自身の立場に立って、日本の人形アニメーションについて書いていただきました。お忙しい中、原稿をいただいた中村武雄さんに誌面を借りて感謝の意を述べさせていただきます。ありがとうございました。

世界のアニメーション作家　ノーマン・マクラレンの世界 2

「目で聞き、耳で見る」邦訳

この邦訳はフィルムコレクターS氏が、マクラレンから贈呈されたフィルムを基にヒアリングで訳したものです。フィルムを観なくては解りにくい所もありますが、それを補う資料価値があると思います。（文責　編集部）

M…マクラレン
N…ナレーター
I…インタビュアー
F…フレンド

N　「隣人」はどうも、しっくりこない映画だと言う人もいます。あまりにも簡単な哲学が混ざりあっているし、特にびっくりする様な暴力はぎこちないと言うのです。それと同時に、人間に用いられているアートテクニックは時々、気まぐれに使われているといわれます

あなたが今ごらんになっている映画「天体」は彼の最近の仕事を最も特長づけているものです。フィルムは20年前に作られ、音楽はつい最近つけ加えられました。というのは、バッハを冒涜することにはならないと決心するのに20年かかったからです。「天体」はクールで抽象的で動物のしぐさや活動よりも幾可学的に魅力があります。

N　マクラレンは「隣人」のテーマにもどったことはありません。

M　いや、それは、私がここで送っている生活で精一杯でそこまでできないからです。家とNFBの間を行ったり来たりで、少数の親しい友人たちと比較的静かに暮らしています。ですから世の中に出て人と会ったり、別の異った文化に接することもありません。随分と昔のものは別として、人間に関する映画は、「隣人」「いたずら椅子」「パ・ドウ・ドウー」だけです。

I　「いたずら椅子」は椅子にこしかけようとする男とアニメ化された椅子がすわらないでくれと返事をする…という話ですね。

M　は…、そうです

I　どちらにも同じように同情的なお気持ちなんですね。

M　すわられる物に対して私は気持ちが動きます。

I　中国国民のようにですか？

M　ええ、開拓者とか敗北者とか。

I　しかし、それほどあなたの映画では扱っていませんね。これはあなたがある意味で運命論でそうしてもしょうがないと思っているからですか。

M　いいえ、私はより〝抽象〟に興味があるからです。

抽象に興味を持ち始めたのは14・5才の頃からです。

これも重要なことだと思いますし…。たとえば音楽のようにそれ自体以外の事物には関知しない…といった抽象分野を開拓していくことに本当に関心が湧いているのです。映画でいえば、目に見えるだけでそれ自体他の物に全く関知しない…それだけで充分に通じる…ものでしょうか。

N　音楽のようにそれ自体が他の物に関与しない…それだけで通じうるもの…。1959年マクラレンはカナダ音楽ジャーナルのためにカノンやフォークなどの6つの音楽形体を具象化しました。譜面から画白いもの、複雑なもの、明るいもの、悲しいものが出てきます。再び彼は我々の目で絵がわかるようにしてくれます。〝目が開き、目が見る〟ように。

N　アニメには人間などのように、ダンスしたり泣いたり、とびはねたり、怒ったりする動物を描くものと、形が幾可学的な様を呈する動きをするものがあります。多分マクラレンは後者の方を追求していくのでしょう。

M　これからどのように変わるかわかりませんが私が作った「垂直線」「水平線」「モザイク」そしてこの「天体」は全部幾可学的でした。私は絵画におけるオプ・ムーヴメントに大変魅かれていることは確かですがそれがきっかけでこの映画を作ったわけではありません。ただ、単に作ったともいえますが、幾可学の可能性を開拓・探究して来たこの10年間の魂でもあるのです。

I　もう人間や動物の生活には興味がなくなってきたということではありませんね。

M　いえ、とんでもない。私の作った「パ・ドウ・ドウー」は全く人間臭いでしょう。それにそれを作った時に繰り返した全体のテストの中であらゆる可能性を発見しました。完成した映画ではそれがあまり使われませんでしたので将来活用しようと思っています。

N　マクラレンはこのテストに彼自身加わっています

M　スピードを自由に変えられるカメラがあれば踊り子の動きを加減できます。

さてここで始めのマクラレンの今日の仕事にもどってみましょ争。　う



N　これは普通の35%黒白フィルムで画面の絵の部分がよくわかりますね。ここの左にある$\frac{1}{11}$の狭さのパターン。これがサウンドトラックで映写機の中で音に変わります。彼は彼自身で作曲してサウンド・トラックを撮っていくのです。すると音を聞き、かつ見ることができます。$\frac{1}{11}$までの狭さでしたら何でもこうです。

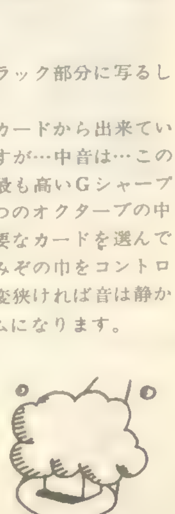
M　映画全体を通じて音楽がだいたい6つぐらいの部分に分かれればいいと思うのですが…。

M　今回はピアノを使ってスタートしようと思います。パターンをひろってポロンポロンとひいていきます。このパターンだけでは聞こえません。これをこの機械で撮影するのです。原理はいとも簡単なしくみです。これは1コマ撮りのカメラでできていてボタンを押すと1コマ撮れます。〔カチャ〕

これは$\frac{1}{24}$秒です。

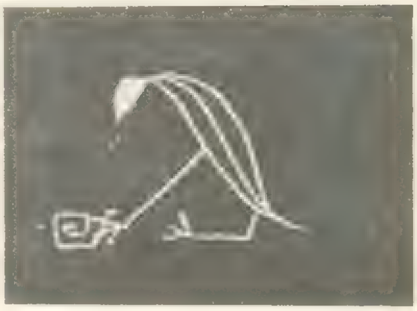
ここがが絵の横のサウンドトラック部分に写るしくみになっているのです。

これが私の鍵盤で多数のカードから出来ています。これは最も低い音ですが…中音は…このようなものです。それから最も高いGシャープはこれなのです。それら6つのオクターブの中に半音があります。私は必要なカードを選んでここに入れます。それからみぞの巾をコントロールします。みぞの巾が大変狭ければ音は静かで、広ければ最大ボリュームになります。



N　マクラレンはこれで1周まわってもとにもどった事になります。
ここで彼は音と絵が本当に1つになるという点に到達したのです。　耳で見、目で聞く映画ができるのは何ヶ月も先になりましょう。
その変りにマクラレンの技術的な独創性によってすばらしい美の傑作の結晶をみましょう。
そうすると、マクラレンが最も力を入れて来たテーマがわかります
それは常に絵と音楽を完全合成することで、（椅のバレーや空間、時間を遊泳する物体…などのように）その最も中心的なできごとは、ニワトリと卵、小鳥とケンカ相手、モザイクの立方体、通り子のわかれた体などのように「増えたり、大きくなったり、バラバラになったりする」ことで、そしてそれらが「再び1つにまとまる」ということではないでしょうか。





M　私にとってはどんな映画も踊りのようなもので、一番大切なものは「動き」「動作」です。
その動いているものが人であろうと、物体であろうと、絵であろうと、どんなしぐさでも、それは踊りのフォームなのです。これが私の映画に対する考え方です
話し言葉が重要であって、あまりドラマチックでない映画も有ることは知っていますが私は自分の映画の中で話し言葉を使ったことはありません。何と言うか、こう、言葉は音楽的な旋律のある映画にはじゃまなように感じますのでね.

N　ボトムは言いました。
「目が聞いたこともない、耳が見たこともない。手で味わえず、舌は考えず、心もそれを話してはくれない。私の夢はまさにそういうものだ。」

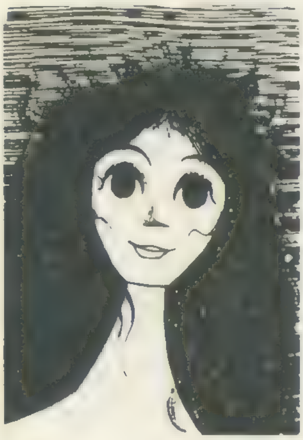
——END——

お詫び

前号のノーマン・マクラレンの世界－1で9ページのはじめ「1937」は「1947」また10ページの左列20〜21行目の「1949年から50年にかけて中国で」は23行目の最初に入る部分でした。訂正してお詫びします。

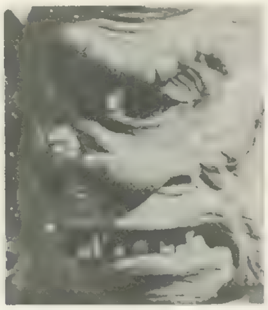


FANTOCHE VOL.3 次号予告



世界のアニメーション作家－2
ラウル・セルベ





レイ・ハリーハウゼン研究（3）

東　狂人

映画フィルムはなぜ？
玩具用35ミリについて――**杉本五郎**

シナリオ「わんぱく王子のおろち退治」
完結――――――――――――

特別寄稿　**月岡貞夫／森卓也**



70ミリ、ロック・ファンタジー長編アニメ
「メタモルフォセス」？

乞御期待！

TVアニメーション小視考②

ガンバの冒険





「ガンバの冒険」より

「ガンバの冒険」は、昭和50年４月～９月まで半年間に放送されたが、当時をふりかえると49年の12月に終了した〝ハイジ〟を追って各社がロボットから遠ざかっていた様な時期だった。その中でズバ抜けた感賞とテンポを一話からズッと見せつづけてきたスタッフの力量には限りない「何か」があるとヒシと感じとられた。先号のハイジと比べて視聴率＝内容という判断はこの作品に関してはいえないとはっきり言える。

が、しかし今頃、この原稿を書く段になって何らかの形でかかわりのある人の話しを聞いて気がついたのだが固定したＴＶアニメ・ファンである小学校低学年の子供達に好かれてたそうだが、子供にはテンポが早すぎて追いつかない部分が少くなくなかったとも言われている。なるほど、われわれ映画やアニメを見なれた、ものにとって体をふるわさんばかりのこの作品を充分理解するのは苦しかったのではないか？そんな感じにもとれる。



「ガンバの冒険」より

さてこの注目をあびる原作をどのようにアニメーションにアレンジをしたのだろうか、

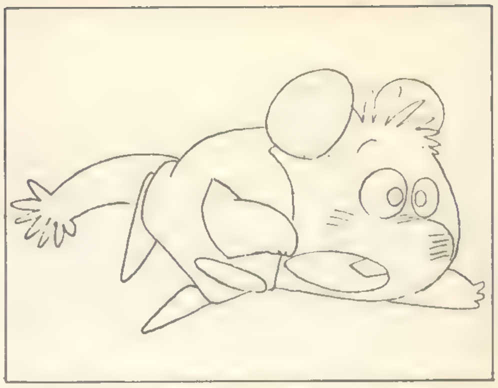
さてはさて、物語のおもしろさのなんのそのアニメならではのおもしろさとは動きです。が、しかしこのガンバに関していうとそれよりもずっとずっとはるかに〝ガンバ〟を表現しているものがあるのです。それはするどくも決まっているレイアウトである。〝画面が物を言う〟そんな言葉が無理なくつくほど才能を発揮させていたようである。〝ハッ〟として〝ワァ〜〜〟と見る者を圧倒するというのか、(わからない人は是非、再放送を見て下さい。)通常、ありきたりの場面設定では絶対ないのである。特にガンバは〝ネズミ〟であるという事をフルに生かして、人間という無言の巨人（人間はすべてモノトーンにしてある）をみせてくれるし、どんどん先へ行くとネズミの目からみた巨大大タンカーまで突然みせてくれる！そして、ぼくの大好きなスタンダード画面にバッチリ収めてくれているという事である〔注・TVアニメーションに場面設定なる職種が加わったのは、ハイジに次ぐ2作目〕。さて、さてはさてレイアウトに共通して言える表現の中に、美術があります。これは〝ガンバ〟だからどうってこと無いのですが色々という種々の手法を投じて描かれてありながらも、不自然に感じずそのシーン・カットにとけこんでいるのがおもしろい効果を出しているのではないでしょうか？

まことに失礼にも〝動きより〟と書き、後まわしにしてしまいましたが、これはほぼ、きまりかけた東京ムービー色というか、非ライブ・アクションという感じで、実際にありえない、出来ない事を大担に演技させてそれらしくみせるという、何ともおかしく、楽しい動きで気にいっておるのですが、まっここでとりあげるなら、キャラクターの線のおもしろさだと言えるでしょう。枚数は1本6.7千枚ほどだそうです。

最後に、突然のように書き始めた原稿ゆえ資料不足がたたり、文になっているのかしらと思ってます。ただ、パート事ウンヌン言うにも、言えるだけのぼく自身の〝描く〟力量が無いのでえらそうに書けないのが残念です。

青木　雄

（このチーフ・ディレクター出崎統氏は、過去に虫プロで「悟空の大冒険」をやっておりやはり感覚とテンポの早さで、子供にはおっつけなかった面があったというくらい、するどき感覚の持ち主）　そんなこんなで視聴率も9％前後をさまよっただけに終り、中止というハメになったそうである。(この中止劇にからむ話しだが、この原作は、国産テレビアニメが初めてとり組んだという児童文学「冒険者たち」(斉藤惇夫・原作）で大変、当時注目をあびた、がこのガンバ・シリーズ・実はもう1冊の氏が書いたシリーズ・ゴリックが主人公である所の「ゴリックの冒険」にガンバが登場することから、これを基盤とするところのストーリーは予定されていたというが、これも再放送の視聴率その他の成績いかんによっては「続・ガンバの冒険」という形で再制作されるようである。)



「ガンバの冒険」より

制作スタッフ（一部）

演　　出／出崎　統・吉田茂承・御厨添輔・竹内哲雄・さきまくら
作画監督／樺島義夫
画面設定／芝山　努
美術設定／小林七郎
色彩設定／関根栄子
撮影監督／清水達正
　　　　　／若葉章夫
文　　芸／飯岡順一
脚　　本／大和屋笠・金子　裕他

東京ムービー作品／日本テレビ／カラー26本





アニメと私

「アニメと私」は、アニメーションを直接の仕事としていらっしゃらない方に、アニメその他の事について、ざっくばらんにお話を聞いてみようという企画です。

今回は、岡本忠成氏（エコー）の「南無一病息災」で歌と語りを担当された及川恒平さんにその時のお話などを中心におしゃべりしていただきました。

——この仕事のきっかけは？

現代音楽の広瀬量平さんが、フォークソングにも興味を持っていらしたようで、ぼくのことを知っていらしたそうなんですが。岡本さんがフォークソングでアニメを作ってみたいということで、広瀬さんを通じて岡本さんを紹介されました。

ぼくは民話なんかが好きで、この「南無—」や前作の「もちもちの木」なども、斎藤隆介さんの原作を読んで偶然よく知っている話だったところに、この仕事の話があったので、これはおもしろいと思いまして………

——やってみてどうでしたか？

岡本さんとの何回かの会議でいっしょに構想を練り上げて、曲を先に作って、それにアニメーションを合わせる形で作られたので、ぼくとしては非常にやりやすかったですね。

アニメの音楽っていうのは芝居の音楽なんかと違って、より綿密に作らなければいけないみたいですね。今回は特に「流れ」ということを重要視して、そのためにテープなんかも止めないで、ギターを持ったまますぐに歌から語りに入っていったりして録音したので、ぼくとしては、全体を通してきれいに流れているんじゃないかナァ、と思っています。（自画自賛ダ、と照れくさそうに）

歌い手が、音の中でイメージを作っていくのではなく見えるもの（絵とかアニメ）と音とが上手にくっついていったら、これからもっとおもしろいことになるんじゃないかと思います。たとえば、ぼくの作る歌っていうのは風景的なものが多いので、「音」が絵として拡がっていくようなことをやりたいと思っていた矢先だったんで、この仕事はすごくおもしろかったです。

——またこのような仕事のお話は？

今度は生でステージに立ってアニメーションといっしょに歌うようなことを岡本さんとやってみようかという話があるんですが。

この「南無——」みたいな形になるかどうか分りませんが、何かの形でアニメに関係のある仕事はこれからもしたいと思いますし、機会があれば、コンサートなんかでも、岡本さんの許しを得た上で、せめてぼくのかかわりあったフィルムぐらいは上映していきたいと思います。

——「ＴＶアニメ」は御覧になりますか？

見ますヨ！　好きだもン。

今やってる手塚治虫さんの「ジャングル大帝」とか「メルモちゃん」はいつも見てるし、「みつばちマーヤ」のファンなんです。

「宇宙戦艦ヤマト」も見られる時は必ず見ます。「波動砲」とか「ワープ」とかぼくたちの日常会話にも出て来るし、ぼくのマネージャーがもっと好きで、松本零二さんの漫画本も全部持っているし、仕事の途中でも「ヤマト」を見られないと機嫌が悪いんです。ファンクラブにも入りたいと言ってました。

「みつばちマーヤ」で、飛んでいるマーヤが、水もに尻尾をポチョン！とつけたりするところがすごく好きです。ああいう物語には奥行きがないとおもしろくないと思うんだけど、「マーヤ」にはそれがあるみたいで、なんとなく画面に引き入れられます。

これは乱暴な考え方かもしれないけど、たとえば岡本さんの「南無——」にしても、あの「マーヤ」にしても、それぞれ発表する市場が違ったり、雑であったり、綿密に作られたりという違いはありますが、これはフォークソングなんかでも言えることだけれども。いわゆるテレビに出るとか、アングラだとかはあっても、最終的にみんなでいっしょになって楽しもうということでは同じなんじゃないかと思います。



——その他、アニメについて何か？

もう少し、マスコミなんかにストレートに取り上げられていいんじゃないかと思います。これは外から見た感じだけれども、見に来る人が片寄っているような気がしますね。

歌なんかでも、踊りを入れたり、照明を工夫したりして「ショウアップ」ということをするのだけれど、そのショウアップとしてアニメーションみたいなものとむすびつけると歌の世界では何か特別なことをしたように受けとられてしまうんですね。

たとえばアニメーションと歌なんかを、一つの表現として、自然に受けとめてくれたら楽しいなと思います。



及川恒平・シンガーソングライター

アニメとのかかわりとして、六文銭時代に虫プロの「クレオパトラ」で「ゲリラの歌」を、また岡本氏の作品として「マルチスクリーンによる一つの試み」を同時代にやっている。５月には４枚目のＬＰが発売される。前作とは反対に、アコースチックな音を主体としたＬＰになるそうで、現在その録音に忙しい毎日を送っている。また同じ頃、詩と随筆の本も出すそうだ。ラジオ関東水曜日深夜にディスクジョッキーもやっている。



「南無一病息災」

民話を題材にした斎藤隆介の原作を、岡本忠成の脚本・演出・作詞により、及川恒平の歌と語りで山あいにくり拡げられる、鬼と猟師の絵馬物語。1973年エコー社制作
○73年度毎日映画コンクール大藤賞
○第３回テヘラン国際映画際入賞



シリーズ

杉本五郎

「映画フィルムはなぜ？」（第二回）

高価な上に燃えやすいセルロイドのかわりに、紙で映画フィルムができないものであろうか？という考えがかなり以前からあった。映画が誕生する前の幻燈時代、すでに絵葉書や、蝶の羽、リンゴ等の実物を反射光で、色も形もそのままに映写する事が出来る実物幻燈機という物があり、実体投影器と言う名で大正時代学校の講堂で物々しく映写して見せてくれた。その反射光で映すと言う原理を映画に応用して、昭和の初期ドイツで16㎜のフィルムを印画紙に焼付け、光源をフィルムの後から前がわへ、つまりレンズの横へ移動させるようにした、普通のフィルムと兼用になる家庭用の映写機がつくられた。しかしこれは絵葉書を映写するのとくらべて16㎜のコマはあまりにも小さく、そのため電球の光源では暗すぎてハッキリ映らず、アークを光源にすると大がかりになって家庭用にならず、ことに具合の悪い事に普通のフィルムと兼用機になっているため、暗さが目立って実用にならなかった。

反射光で映すのをあきらめたドイツでは、安いセロファン紙を使って普通の映写機で映写する事を考えた、セロファン紙はセルロイドフィルムの半分よりもうすいので 200フィートのリールに500フィートを巻く事が出来た。昭和8年（1933）頃から、オザファン（OZAPHAN）フィルムと言う商品名でアグフア社から売り出された　価額が安くかさばらないので図書館等のフィルムライブラリー用に適するとして日本にもかなりの本数輸入された。しかしセロファン紙は水にぬれると10%も伸びるので、普通のフィルムのような現像液が使用できず、ガスで現像するようになっていた。そのために感光乳剤も特種な物で仕上りも黒くはならず、暗紫色でなんとなくしまらない色彩であった。なにしろうすいフィルムなので、35㎜では切れてしまうのか、私の入手した「ドイツ陸軍の演習」「切手アニメ・かえる王女」等は16㎜で、ピントが少し甘い感じがあり、このフィルムでは8㎜にはピントの点で少し無理のように思われた。

映写は普通の映写機で良く映ったが、何となく弱々しくて安心して映写出来なかった。ことに困るのは切れた時で、今日のようにセロテープなどと言う便利な物のない時代なので、、何で貼ってもはがれてしまい、少しベタついて具合が悪かったが、唐傘修理用の紙テープで貼りつけて使用した。そんな不便さも有ってかあまり普及せず、日本物のプリントは製作されなかった。

これとほとんど同じ頃、本格的な紙フィルムを使用する映画が日本で出現した。レフシー（REFCY）家庭映写機と言う物で、映写機メーカーでもフィルムメーカーでもない、東京の家具屋さんが発明し売り出した物である、フィルムの大きさは、35㎜フィルムから両方のパフォレーションの分を切り落した28㎜幅で、送り穴（パフォレーション）は9.5㎜フィルムと同じように、画面と画面の間に一つづつあけてあった。光源は100V100Wの電球なので、幅60㎝ぐらいの大きさまでにしか映写出来なかったが、家庭用の玩具としては一応がまんできるていどには映写出来た　最初のうちはフィリムを掛けまちがえると、フィルムに穴があいたりやぶれたりしてかなり文句が来たが、映写機の機構も何度か改良され、フィルムの紙質や印刷も良くなり、普及しはじめた頃の映写機の値段は高級機が8円50銭で、反般式の16㎜映写機をそのまま大形にしたような形で、普及形は手巻きのポータブル蓄音器と同じ大きさのレザー張りのトランク形で3円70銭であった。昭和12年頃にはこのポータブル形の物を自分で組みたてる、一式箱入りのセットが、デパートの玩具売り場においてあった。この方は外箱は白木のままで、レザー張りの物より形が悪いのに値段はかえって高く、4円50銭であった。

ちなみに当時のセルロイドフィルムを使用する35㎜玩具映写機の値段は、一番安い巻き取りなしの物が75銭、巻き取りつきで1円50銭、スプロケット付（はたきおとし付）の物が2円50銭、プロペラ（シャッター）付だと4円以上であった。



▲初期のレフシー家庭用映写機

16㎜は一番安いジャスパーの手廻し式で18円、モーター付はオリンピックC型が一番安くて33円少し良い物になると150円から250円もする時代であったから、レフシーはけっして高価な玩具ではなかった。

レフシーの紙フィルムは長短とりまぜて100巻近く発売されており、実写は黒か茶か緑のグラビア印刷一色刷りで、漫画はオフセット四色刷り、「馬化汽車」と言う外国物一本がモノクロであった以外は全部総天然色であった。

実写は「孤島の楽園」（うみねこの生活）100呎上下2巻、「海軍満期前の一日」「大観艦式」各100呎、観艦式のフィルムは天皇陛下が写っているので、脱帽正座、冬は外套をぬがせてから映写した。実写の中で「軍隊ラッパ」50呎上下2巻、童謡踊よう「夕やけ小やけ」「雪やこんこん」各50呎、等はレコード式トーキーで、当時一番安いレコードであった、"ツル印レコード"とシンクロするようになっていた。このレコードは材質が悪くこわれやすいので、後にトーキー化した物には踏んでもこわれない、ボール紙入りの蝶印、バタフライレコード、を使用した。バタフライレコードは大正時代に子供用のコワレないレコードとして発売されていた国華レコードを改良したような物で、"国華レコード"は中央まで同質の材料を使用していたが、"バタフライレコード"はさらに固い材質の物を使用し音質を良くし中味は90%までボール紙ですませ、外観は普通のレコードと同じようであるが目方が非常に軽く、踏んでもたたいてもこわれなく値段も安かった。昭和四年（1929）頃から戦事中まで引つづき製作されていたが初期の物は極彩色のレーベルで、あげは蝶の上に金刷りで賜天聴（てんちょうをたまわる）と大書されていた。何しろ安いレコードで、ビクター・コロンビア等が1円50銭の頃、20銭と言う安さであった。安すぎてかえってオモチャとしてあつかわれてしまったが、十分実用にたえる発明品であったのであえて紙面をさいて紹介しておく。

さてレフシーフィルムの事であるが、劇映画は以外に少なくて、時代劇は大河内主演の「血煙荒神山」「高田馬場」の2本だけ、現代劇は鈴木伝明・田中絹代の「進軍」1本だけ、昭和13年には「決死の適前架橋」等の支那事変ニュース映画なども発売されたが何と言っても主力は漫画映画で、日本映画のすべてがモノクロであった時代に、オールカラーであった事は玩具としてはもったいないくらいの物であった。初めの頃は紙の質が悪くケ

紙フィルム はなぜ使われなくなったのか？

バ立ちやすい画用紙のようなボテッとした紙に、目のかなりあらい網版で印刷されていたので、これが拡大されて映写されて、きたない感じであったが、後には紙もつやのある上質な物となり、印刷も工夫して、網版をなるべく使用せずスッキリとした感じになった

フィルムには作者（監督・アニメーター）に関するタイトル（スタッフタイトル）は1枚もついていないが、当時現役の一流どころがほとんど参加していた。私の持っていたレフシーの紙フィルムは総て昭和46年に火災で焼失してしまったので絵を見て再確認する事は出来なくなってしまったが、映画館用の35㎜版からの再版物を入れると山本早苗氏・村田安司氏・大石郁雄氏・瀬尾光世氏・熊川正雄氏・宮下不蔵氏・等々「無敵凹平かっぱ退治」は大藤信郎氏のようにも思えるのだが、はっきりした記憶がない。政岡憲三氏もテスト版を製作したが、あまりに絵が緻密なのと色彩にぼかしが有ったのでことわられてしまった、当時印刷の色版は手工芸的な法方で原版を製作していたので、あまりこまかい物は敬遠されてしまったのである。ここで印象に残る作品を何本か紹介して見よう。

「無敵凹平かっぱ退治」100呎1巻、レフシーの漫画の中で人間の出てくる時代劇は続篇の「かっぱおどり」50呎1巻の2本だけ、これには英字タイトルはついていない、続篇の方は凹平に降参したカッパの大王が凹平のために一族とカッパおどりをおどって見せると言うだけの物で、レコード番号は書かれていないがレコードーキーらしい。

「波乗りこえて」100呎上下2巻、少年が航海中に嵐で難船し孤島に流れ着く、ライオンに追われたりゴリラと闘ったりする、エミールコールの「ボナード先生の難船」と「冒険ダン吉」を合せたような物で、大正末期か昭和のごく初期に製作された映画館用の35㎜を短縮彩色した物。絵は山本早苗氏と思われる、嵐のシーンで古風な日本画的風神雷神があばれるシーンが印象に残る。

「泳げやつわもの」100呎1巻、「泳げや泳げ」の題名で35㎜・16㎜・9.5㎜でも売り出されているが、レフシーの方がカラーなのでより印象が強い、泳げないお猿のモン吉が水泳大会に参加、しかたなく飛びこむが沈んでしまい、水底でカッパと大格闘をしてカッパの頭の皿を取り上げてしまい、かえしてやるかわりにカッパの背中に乗り泳いでいるように見せて一等になると言う物で、プールの底がなぜか海底のように海草やサンゴが有るのが不思議だが、話しとしてはまとまりの良い方である、昭和5年頃の原画と思われる。

「ポン助化け修業」100呎1巻、まだ化ける事の出来ないタヌキのポン助が武者修業にでかける。毎夜お化け（外国風の白入道）にヒヨコをさらわれて困っているニワトリ夫婦にたのまれ、お化けの後をつけて荒寺に行き、お化けが実は古ギツネである事を知る。キツネの寝ているすきに秘伝の一巻を盗み出し、キツネを退治しニワトリ一家を助ける話しで、大石郁雄の名作「孤狸の達引」（昭10）とまったく同じキャラクターを使用している、35㎜版でも16㎜版でも見かけない作品なのでレフリーのオリジナルと思われる。夜のシーンのハーフトーンの部分の印刷の網版がかなり荒いので映写するとよごれた感じがするがアニメの動きは良く傑作である。

「のらくろバンザイ」(DOG A SAPPA-ARS）100呎1巻、この頃から輸出を考えてか英語のタイトルがつくようになる。話は御存知少年倶楽部の人気物猛犬連隊ののらくろが、山猿軍との戦に斥候として敵地に潜入、大砲の弾丸にまたがって体当り自爆するが、コウモリ傘にぶら下って生還する。レフシーのオリジナル作品、昭和12年頃の物

「レフ坊の魚つり」(FISHING A ROU-ND）100呎1巻レフ坊（スクラッピーとムルジリカの合の子のような頭デッカチの少年）と、ポパイのブルートによくにた山賊スタイルの大男が魚つり競走をする話で、レフシーのオリジナル物、アニメの動きはかなり上手で、熊川氏の作画と思われる。

「レフ坊のロケット」（ROCKET）50呎1巻レフ坊の乗ったロケットが宇宙を飛びまわり、月面に軟着ならぬ撃突して三ヶ月にしてしまう話し。

「からすとみみずく」(CRUW AND HO-RND OWL)50呎1巻、みみずくの染物屋さんに色々な色彩に染めてもらって喜んでいる小鳥達を見いた白いカラスが、うらやましくなり、みみずくに「まだだれも染めた事のない色に染めてくれ」とたのみマックロにされてしまう。カラーとしての効果もあり、動きも良く秀作。これも熊川氏らしい。

アニメのレコードドーキーとしては、「ねずみの戦争」100呎、台所でネズミ達（初期のミッキーに似ている）が、ねこの留守に戦争ごっこをはじめ、帰って来たねこにバケツをかぶせてしまう話し。「汽車」50呎、今は山中、今は浜、と言う唱歌に合わせて風景が展開するだけのもので、ストーリーはない。なにしろレフシーのトーキーは映写機のハンドルシャフトにレフキシブルコード（金属性の水道のホースのような物）でレコードの中心部のシャフトと連結する方式で、高級機しか連結できず、ポータブル型の方はレコードを聞きながらハンドルを廻して合せるより方法がなかった。

その他か変った物としては自画用フィルムと言う物があり、白紙のフィルムの裏面にマス目と同心円が印刷されていて、裏から光をあてこのマス目で見当をつけながら自作のアニメがカメラなしでつくれるようになっていた。

「自由着色フィルム」と言う、線書きだけの物もあり、ぬり絵のように色鉛筆やえのぐで好な色を着けてたのしむ物もあった。これは一本の長さが1ｍぐらいの物でこれを輪にしてエンドレスに映写するようになっていた。このようにレフシーは付属品もそろっていて玩具映画としては傑出した物であったが、取りあつかっている店が少なく、東京でもデパートでしか見かけなかった。少年倶楽部の代理部でも扱っていて、通信販売で購入した人も多いと思う、しかし35㎜のセルロイドフィルムの映画を追い越す事はとても無理で、売れ行はなぜか思わしくなく、アニメーターの中には作品の代金がわりに本業の方の家具をもらって来たという話しもあった。やがて戦争の進展とともに資材が不足になり製作を中止した。ドロヌマの戦争時代に足をつっこんでからの作品で、それもおそらくレフシーの最後のアニメと思われる物に「愛馬進軍歌」という題名で、劇映画の「愛馬進軍歌」とは似ても似つかぬ日本マンガにしては珍らしいナンセンスマンガがあった。何事にも軍が干渉した時代なので固い題名で製作許可を取ったのであろうか、長さは50呎しかないがテンポが早い、物語りはサーカスの馬が出征して手柄をたてる話で、先ず巻頭サーカスで人を乗せて走っているところへ赤紙が来る、馬がバンザイをして走りだすとそのままワイプで弾丸飛び交う戦地を走っている、敵の弾丸はだんだん大形になってついには馬の体より大きな物が飛んでくる、馬はすかさず立ち上ってゲンコツでなぐり返し力コブをつくって見せてアイリスになると言う物で、固い物ばかり見せられていた時代なので久しぶりのギャグマンガに、たのしくなってしまった。燃えつきようとするローソクの最後の光りといえよう。



レフシーフィルムの最盛期には当然の事ながら模倣した物がつくられた。

月虎印安全映写機と言う物で35mmの紙フィルムを使用し送り穴は両側あった、映写機はセルロイドフィルムを使用する35mmの中級の玩具機を改造した物で、当時俗悪少雑誌として学校から読むのを禁止されていた「譚海」（たんかい）の広告欄にのっていた。（と言うこのはこっそり読んでいたわけだが）この広告はいつの間にか消えてしまったが、おそらくレフシーが非常に多くパテントを取っていたので、これにふれたのではないかと思われる。

レフシーと前後して、"カードシネマ" と言う不思議な物が売り出された、35mmの一コマづつがメンコのような厚紙に印刷されていて、細長い金族のケースの中にはいっている、ちょうど駅の窓口にあるキップのケースのような物である。このケースを映写機に入れて手でハンドルを廻すと、一枚づつ下のケースにかき落されるようになっており、レフシー同様に反射光で映写をするのである。私の見た物は色刷りのアニメばかりであった。原理としてはこれでも映写にはさしつかえないのだが、フィルムのようにつながっていないのでひっくり返すとバラバラになってえらい事になる、カードの裏に番号は打ってあるが、やはり普及はしなかった。

他にもレコードのような丸い厚紙に動画をエンドレスに印刷し、そのへりに歯車のような凹凸をつけて、ここを映写機の端から少し出し指でこの部分をトントンとたたくと画面がひとコマづつ進むという、メカの全くない（したがって故障しない）映画と幻燈の合の子のような物も売られていた。

以上は直接私自身が見た物であるが、実はさらに古い時代に紙フィルムのアニメーション映画が日本人の手で製作されていた。明治も終りに近い43年（1910）頃、現在銀座三愛の丸いビルがあるところから新橋に向って少し行ったところに吉川と言う玩具屋があった、この店は後に反対側の日本橋よりに引越し店名も、キンタローと変え現在も営業している。この店のウインドに日本紙に油を引いた唐傘のような半透明な紙に、スミと染料で動画を書いた紙フィルムを使用、ランプで写す手廻しの映写機が売り物としてかざってあったのを、当時小学生であった私の父が見て、買おうかどうしようかとかなりまよった事が有った。

現在、松屋デパートのあるところに、その頃は伊東屋と言う文具店がありその正面に丸八と言う薬屋と山城屋と言うラシャ問屋が並んでいた。この山城屋の息子であった父はお小遣いも充分にあったので、紙フィルムより本物の映画用フィルムを使う、フランス製のアーバン型の映写機を買ってしまった。当時はまだ33mmの家庭用の玩具フィルムは製作されていなくて、映画館で使用済みになった外国映画の古物をこの店で、1尺（約30cm）16銭で売っていた、又、映画のコマを集める事も流行していたので1コマ1銭で切り売りもしていた。100尺のフィルムは16円に当る、映写時間は1秒16コマとして1分40秒である。たったこれだけのフィルムに高級官使の月給程の費用のかかる映画は本当に大変な大道楽であった。

我が家のフィルムコレクションの第一歩はこの時にはじまったのであゆが映写機もフィルムもすべて大正12年（1932）の関東大震災で焼失してしまった。今となっては何処のだれが作ったのか解らなくなってしまったが、紙フィルムのアニメとその映写機が明治の頃に日本人の手で作られ売られていた事は事実である。

さて本題にもどって、紙フィルムになぜ使用されなくなったかと言えば、反射式ではどうしても明るさが不足する事と、拡大して映写する都合上印刷では写真ほどの鮮明な物が出来ないからであろう。

しかし多量生産する必要が有る場合最画フィルムを印刷で製作すると言う事はかなり重要な課題である。フィルムはカラーでもモノクロでも感光乳剤に銀を使用するので特別に税がかけられているが印刷で済ませればかなりコストダウン出来る。すでに映画館用35mmリーダーの秒読み数字の部分を印刷で作った物がかなり出まわっている。又現在現像所から帰って来る現像済み16mmや8mmのリーダー部分も、未感光の白味ではなく白色のペイントを塗った物になった、広い意味での印刷物である。将来何らかの方法でもっとキメの細かい印刷が出来るようになれば、既製の画フィルムを安く提供する事が可能になるであろう。しかしフィルムのベースがすべて不燃性になってしまった今日では、安全の意味から紙を使用する必要はなくなったので、紙フィルムが今後復活する事はないと思われる。

（つづく）

▼ポータブル普及型と紙フィルム



次回は戦前どこの家庭にもあると言われた程普及していた35mm玩具映写機と、その80%以上を占めていたアニメフィルムについて書く予定です。

昭和46年の火災により私の玩具フィルムのコレクションはすべて焼失してしまいました今回の文も記憶で書いていますので、正確を期するためにも、玩具フィルムをお持ちの方がありましたら、アニメ・劇・実写・何でも結構です参考にお見せください、誌上を借りて御願い致します。

私は「みつばちマーヤ」を作りたい。松本零士

**宇宙戦艦ヤマト
の監督をやる話しは、どんな形で……**

あれは、ほんとにふってわいた話しで、ぼくの所へ話しが来るまでに、企画書もできてたし、よみうりテレビで放送する事も決まってました。ただ〝ヤマトがどこかへ行くんだ〟という、行くという部分までの設定ができてたわけです。その段回では、イスカンダルへ何をしに行ってどうこうというような細かい設定はできてませんでしたね。

企画は大部前からあった様ですが……

うん、それはねぼくもこの頃になって知ったことなんですが、それはヤマトではなく小惑星を、(岩みたいな船を)飛ばすという話しがあったというのをズーとたって聞いたのね、こちらはいきなりヤマトのはなしで、戦艦ヤマトを宇宙に飛ばすんだという話しでどうだろうか？というはなしを聞いたから、こちらのカミタカとしては非常におそかったわけね何故それがヤマトにかわったかはわかりません。ぼくが行った時には、あのりッパな企画書ができていて、ヤマトのデザインも岩盤をつけたような船（いわゆる船ネ、戦艦ではない）.のデザインができてましたネ、だれのデザインかはわからないけど、コスチューム・デザインも何点かありました。
さて、どうするか、という段回で会議に入ったわけです。



「宇宙戦艦ヤマト」より

練りに練ったワケですね。

10時間くらい会議をやったりネ、そんな事ばっかりやっていたから練りに練ったつもりだったけど…………。それにヤマトそのものが誤解をまねきやすいテーマだったので、戦記物とまぎらわしいんで、それを極力宇宙物として作り直していくという方向で会議をくり返したんです

キャラクターの性格が回を追うごとに変ったようですが。

あれがね結局、大勢でやってるために、大勢っていっても正確に言うと、西崎さんとおれと山本映一さんの三者で性格設定を決めていくわけ、それプラス藤川さん（脚本）とで決めていくとね、4人の扇動であっさいったりこっちいったりするわけね、特に山本さんと西崎さんとおれとの間の性格設定のとりきめが時々変って行くんで、それが全体に不統一を描いた原因になっているわけです。(キャラクターとしてネ、つくり方としてではなく)キャラの性格上の移りかわりみたいなのを感じさせるのはその辺にあると思いますネ。
これはまあ試行錯誤の形をとったんで、どれが良かったかと言われると正直いって、おれにもわからないのね、こちらは本当に生まれてはじめてのアニメーションなんだから、おれにとっては一つの実験みたいなものだから、もうわけがわからないけれど、
当時としては1話から3話くらいまでは主人公・古代だとかあの辺の性格を追っていきたかったという希望はあったけれど、それが良かったか悪かったかといわれると、こちらもまだ結論がでたわけじゃないから今、再放送をやっているんで、当時夢中でわからなかった欠点が良くわかるネ、冷静になるし、当時できそこなったと思った部分でも今みるとかえっていい面もでてくるんで、今、再放送をみて、しみじみと反省をしているんだ(笑)

だから本当にいきなりあーいう仕事に加わってやってね、ある程度まかされてやったということは非常に幸福なことだったんで、こういう舞台が与えられたということについてはかんしゃしているんです。
結局、あれは自分にとってひとつの勉強だったわけです。

**宇宙戦艦ヤマト
の原作者は——**

ヤマトは正確に言うと企画・原案というのが西崎氏で、ストーリーの原作者となるとあいまいでわからない。協議して作りあげたものとなるのかなあ？自分として言えることは、各話を追っていく基本的なストーリーやアイデアの大部分を出したという気憶があるわけで、設定を含め、個々の細かい戦斗アイデアまで含めたもの、アイデアその他も共同作品だからといって出しおしみもしなかったし。だから、その間に対してはあいまいだね。







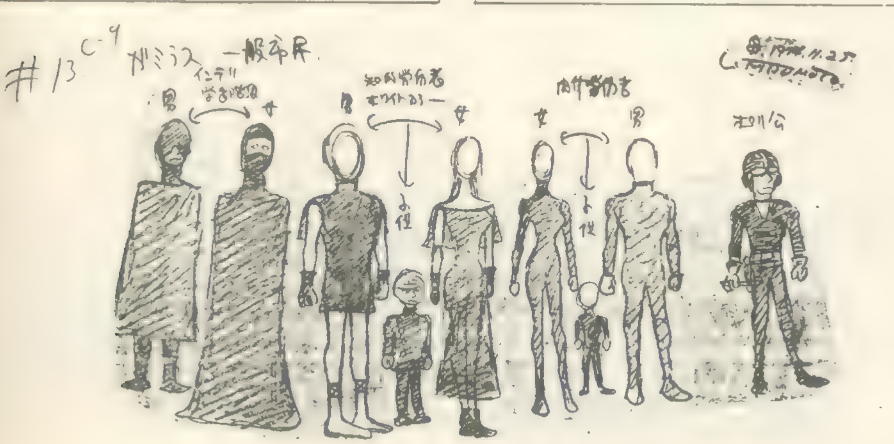
もう少し、ああしたかった……
てな事はありますか？

ムード的には，もっとヤマトの重量感というかロマンというか、そんな乗組員の少年や男の子たちのそういうロマンをもっとおもてに出しても良かったと思う。さいわい主題歌その他、音楽が良かったんですくわれたんだけど、もっと正面きって１本、はっきりとおるムードというのを出したかった。スターシアのあつかいがまだもの足りない、今度あれに必的するものが相手がたにあった場合、もっと完全に動かすつもりですし、女のキャラクターをキチンと動してみたい気がするね。

飛び立つまでにもっと時間がほしかった様ですが

うん、本当は６話ぐらいで飛び立つ予定だったと思うんだが、これは色々な方面からの要望で早急にヤマトの全容を出してほしいということだったので、ねじまげてああしてしまった。最初のストーリーではああはなってないね。

これはおやじとせがれ向けでね、だからあのヤマトが起きあがるところ、もっとじっくりやりたかった。演出方法もこちらのいたりなさで……もの足りない。もっと大々的、もっとはなばなしく登場させたかった。



当初39本、３クールだったはずですが、

39本やってたら、ほんとにヘタばってただろうなあ、物語は完璧になったと思うけど。

ＴＶアニメにつきものの中たるみが……

あのビーメラ星あたりが、ちょっと脱線してしまったのかなあ、と言ってもおれの責任でもあるんだから、今さらグチを言ってもあとの祭り、いさぎよくしましょう。　完全なＳＦとして作りたかったという、こちらには願望があるわけ、そこら辺で「ヤマト」という素材をあつかっていくには、ちょっとムリな部分があるわけだよね。あらゆる設定そのもの、ヤマトを使うになんにしろ、完全なＳＦとして後指のさされないものを作りたかったというコーカイがあります。ところがこれはヤマトのねらいと脱線する部分も出てくるし、それにはそれの事情があるからこちらも押しとおせないしやむをえない。

だけど、まあこちらにすれば良くもまあ、あそこまでやらせてくれたという気もあるしね、まあ、いい場所を与えてくれたという感謝をしこそすれ、それ以上どうこうとはない。ただ、たださぞや現場は大変だったろう……

キャプテン・ハーロックという人は？

あれは39本だったら出す予定だったキャラクターで、26本になった時すでに時間的な余裕がなかったためカットしたんですが、ハーロックは私の主役級の大事なキャラクターで中学の時に作りあげていた人物です。出す時は中途半端な出し方はしたくないヨ、あいつだけは。

ファンの女の子の反響は……

うん、手紙を山の様にもらったけど、おれ大筆不精だからあまり返事かかなかったけどね。「ヤマト」を作る時、打ち合わせの段階で、こちらが意図してた方向にもってたものに対する、一応予側された反応があったということになるのかなあ、こういう作り方をすればこうなるかもしれん。という予側は漠然とあったけれど、おやじとせがれ向きのつもりでいたので女の人が、ああまで盛大に見てくれたということに、正直いってたまげた。

私は「みつばちマーヤ」を作りたい。



**主人公をお兄さんとして
あこがれている様ですが？**

そういう話しは良く聞くよ。

これは血のかよったキャラクターとして受けとられたという事は非常にうれしい事だよね。フィクションの人物でもあるし、しょせんセル板に書かれた絵なのにね。その辺で、性格設定とか血のかよわせかたというのが非常に大事な事になるわけです。

ヤマトを終えて………

西崎氏は、アニメーションを初じめてやるおれという男にまかせてどうなるかわからない――すると山本氏の他いろいろな人達は長年の経験があるから、こういえばどういうものがあがるか絶対的な信頼感があったわけ、しかしこの監督は何をしでかすかわからないわけ、さぞ不安だったろうに、こっちだってこれからおれはどうなるのだろう（笑）と考えたもの。大いに勉強になりましたね。



「宇宙戦艦ヤマト」より

又、アニメはやりたいですか？

ウン、あれでコリただろうとみんな言うけど別にやり方の問題であってね、当然なんであれこそいい試練の場だったから何にも変えがたい経験だった。あの時にしみじみと感じたんだけど、現場のみなさんというか、こちらは去年いきなりやっただけのことで、とにかくアニメについてはアマチュアだよね、ところがみなさんは20年近いキャリアがあるんだよね。こちらもよくわからなかったんだけど、口でしゃべったり、打ち合わせをした事がほぼ確実にフィルムになってきてるわけです。このとき、ああこの人たちはほんとのプロだという信頼感ができて、それはもう次をやるときこっちのプラスになるわけ、ここはあの人にまかせれば絶対できると、自分がゴチャゴチャ口を出して言う必要もないというそういうみんなのプロという腕前をはっきり認識したし、大勢の人と知り合いになってずいぶんプラスになりました。

ほんとうは、漫画映画（まだアニメと呼ばれてない頃）を作ることが、おれの主たる目的だった。しかし作るには、金とかスタジオとかの問題がからんできて結局、雑誌への方へ行ってしまった。

はじめて東京へでてきた時、当時「みつばちマーヤ」を作った会社がたしかにあったヨ。思い違いで、別の会社からの話しだったかもしれないけれど、第3者を通じて、入らないかとさそいがあった。さて入ってしまって自分の立場がどうなるか、自分のやりたいことと無縁のアニメを作ることになるので、自分のいる所をはっきりさせて、自分にもっともてきしたものを作るべきだと片いじをはって行かなかった。

**では漫画映画にあこがれて、それから
雑誌漫画の方へ入っていった………**

そう漫画を書くこと全体が好きで、紙にかくことと平行して漫画映画にあこがれた。だからどうしてもディズニーやフライシャーかぶれになってしまうが、さいわい九州にいた時はめぐまれていてソ連のアニメを映画館で見れた。あっちこっちと片寄らず、色々なアニメをたくさん見ることができたわけで、大変めぐまれていたみたいだった。

こちらもＳＦと同時に「マーヤ」のようなメルヘンチックな、おだやかなものを作りたい、生涯の夢と言うと大げさだけど完全に全部自分の手で作りたいのは「みつばちマーヤ」でネ、自分の感じかた、描写の仕方で完全に、１本にまとめたいという気がある。

正直いってＴＶで始まった時、大変、気になった「おれもやりてえなあ〜〜」。

自分だったらこうする。というのがあるんです。絵的にもものすごく清れいなイメージの浮かぶ原作なんで、それを自分なりのイメージで昆虫の世界をテーマにして完全にやれたらというのが、願望です。

「マーヤ」は作りたいね！完璧と言うのはおこがましいが、少なくともあのイメージはつくってみせるというのが子供の時から思い描いてきた……だから１カット１カット全部できあがっており、色まで決まってる。とにかく漫画映画をつくりたいのは１にも２にも、「みつばちマーヤ」を完全に映画にしたいと気があったんで、その事ばかり空想していた。

ヤマトはヤマトでうれしかったけれど、〝マーヤ〟を依頼してくれりゃ大いにハリキッタんだけど。

ヤマトだとか、ＳＦポイッ物をやると、そういうものばかり志向してるみたいに誤解されてね。ぼくには両面あっておだやかな、マーヤだとかそのタイプのアニメを作りたい、という気があるわけです。そのどっちに向いているのかといわれたら、作ってみせてくれたら自分でもわかると思うけど、世の中はそう甘くはないだろうね。しかし、両方をやってみたい。その両方の接点が〝スターシア〟だとか、女のだし方の部分の共通点になってくるわけで、どうなるかそれこそわからないけれど、何とかなるのではあるまいか!?とにかく色々勉強して、色々やってみたい………。

それから、フライシャーの「バッタ君、街へ行く」が、おれは大好きです。

51年2月3日夜
松本零士宅にて



IT CAME FROM BEYOND THE SEA



▲「キングコング」のスケッチより

レイ・ハリーハウゼン研究 (2)

東 狂人

ハウゼンなどというと、私は子供の頃に読んだ「ほらふき男爵」を思い出してしまう。

目を向いて？襲って来る骸骨とチャンバラをしたり，得体の知れぬ大怪物が町を我が物顔に歩き廻ったり、銀幕の上にウソ八百を並べたれる――特撮マンというのは、言わばスクリーンの大ほら(horror)吹きではないのか。

前回の話は静岡の某アニメ団体の機関紙、「しあにむ」の会員が書いたものであるが、とてもまとまりがよく要約されていたので載せさせて戴だいた。

話が重複するが、今回はハリーハウゼンがどの様にしてこの「ほら吹き」になって行ったかをもう少し詳しく追っかけてみようかと思う。

彼がこの世に生を受けたのは1920年、禁酒法やらマフィアやらで昨今話題の、華やかなりしローリングトエンチーのロスアンジュルスにその幼少を送った。金星から帰ったロケットの中のゼリー状の卵から生まれたわけでは決して無かった………ようである。

怪獣映画の嫌いなガキ、いや、お坊ちゃまには、今だにお目にかかったことがない。男の子なら誰しも一度は憧れるものだと私は思っている。レイ・ハリーハウゼンもとんな男の子だったのだろう。

キングコングに掴まったのは、女優のフェイ・レイだけでは無かった。

ハリーハウゼンが13才の年、ハリウッドの観光名所の一つである、グロウマンズ・チャイニーズシアター（スターの手形なんかがあるところだ）でウィリス・J・オブライエンの「キング・コング」が公開された。劇場の前にはジャングルのセットの中にフラミンゴが放たれ、オリジナルの「コング」のフィルムを見た人には解ると思うが、歯をむき出したコングの顔が画面にアップする時に使われた等身大？のバストサイズのキングコングのメカ（六人がかりでコンプレッサーを使って動かしたそうだ）が彼に、おいでおいでをしていたそうな。



▼「EVOLUTION」より木星の怪物

コングが日本で公開されたのは昭和8年9月。後に、東宝で「ゴジラ」を作る時にスタッフたちは「ゴジラ」も人形で、というつもりだったが予算の関係でぬいぐるみになってしまったというような話も聞いたことがあるが、これは、予算をきりつめても人形でやるために新方式を開発していったアメリカの事を考えると、何とも面映ゆい、象徴的な話である。

フォームラバーの代りに怪獣映画制作の夢をいっぱいに詰め込まれたハリーハウゼンは16mmのカメラを自費で購入、母親の毛皮コートの切れ端からアニメ用の熊のぬいぐるみを作ったりしながら、自宅のガレージでフィルムの制作にとりかかる。出来上ったフィルムは、何度かオブライエンのもとへ持ち込まれたらしいが、そのソーセージのような足をしたステゴザウルスの事を注意され、高校へ行く傍ら、ロサンジェルス市立専門学校で、彫刻やら絵画や解剖学、それに写真、演劇などを、もっと真面目に勉強するようになる。

17才の時、彼はロス市内のクリフトン・ズカフェテリアで開かれたＳＦファンの集いで、後のサイエンスファンタジー大小説家――レイ・ブラッドベリと会う。同い年の彼らは、名前も同じせいもあってか、ハリーハウゼンのスケッチなどを見せて話をするうちに、すっかり仲良くなり、電話をかけてはお互いの将来の夢を語り合ったりしたそうだ。

ハローウィン（万世節）の晩にハリーハウゼンの作った生ゴム製のお面をかぶり、オールナイトの映画館にボブ・ホープの「猫とカナリヤ」を二人で見に行き、幕間に観客を飛び上らせるといったいたずらもした。きっと、二人ともテニス靴を履いていたに違いない。

その後、彼は、南カリフォルニア大学で映画の勉強（編集・美術など）をする。傍らハリウッド美術センターや美術学生協会でさらに彫刻と絵画を習う。

彼が初めてストップフレームアニメーションを仕事として行ったのは、あのジョージ・パルの所であった。今日、彼はＳＦ映画の制作者として知られているが（最新作は今年の正月の「ドク・サベージの大冒険」)、もとは人形アニメーションを作っていた人なんである。

彼の人形は「パペトーン」または「マッド・キャップモデルス」といわれるもので、関節によるキャラクターのアニメートでなく、大部分は、たとえば手を動かしたければ、動きの途中の少しづつ形の違った手の部品を一コマごとに取り換えたりしながら動かすもので、その特異な動きと、そこから生まれる質感、キャラクターなどは目を見張るものがあるが、あまりに予算がかさむので、パラマウントが制作をうち切ったという、いわくつきのものである。機会があったらぜひ見ておいてもらいたい。日本では、黒ン坊とかかしの「ジャスパーちゃん」や、ワルツ王ヨハンシュトラウスがモデルの「シュトラウス先生」などがＴＶで放映されたが、これは20代の方でないと記憶に無いかもしれない。

大戦が始まる。

二年間程、パルのところにいた彼は、陸軍の機関「シグナル・コープス」で兵隊向けの雑誌「Yank Magazine」の表紙の仕事などをした。

大戦が終り、パルとの仕事で身につけた、「パペトーン」の技術を基礎にして、何と学校教育用の人形アニメーション「マザーグース」や「赤ずきんちゃん」などのお伽話ばかりを作りはじめる。

３～４年前の正月に、偶然、某国営教育放送でこのシリーズが放送されたのにお目にかかることができたが、スタッフ・タイトルなんぞは無く、ただ合衆国の学校教育用のフィルムとあるだけであったのだが、きみ悪いほどによく動く赤ずきんちゃんや狼が、ハリーハウゼンのものと知ったのは、ごく最近の事である。（イヤ本当にきみ悪かった……）





▲J・パルとパペトーンの役者たち



▶「乙女の敵」はジョーヤングが許さない

戦争の為に廻り道をさせられてしまった彼は、1946年「猿人ジョーヤング」で念願のオブライエンと、やっといっしょに仕事をするチャンスにぶつかった。オブライエンの指導のもとにではあるが、本物のゴリラの骨格を参考に、そのアマーチュア（これは動物でいうとその骨の部分と関節を兼ねたもので、人形の動きはこれにより支えられる）を作り、それを用いてフィルムの80%のアニメートを手掛けたというから、これが彼の最初の劇場用作品と言っても差しつかえないであろう。

このジョーヤングは、キングコングと同じく巨大な猿であるが、コングに較べ二廻り程小さく3～4mぐらいかと思われる。（モデルの実際の大きさは40cm）キャラクターも実物のゴリラに近いようだし、性格もコング程狂暴ではない。しかし美人に弱い点ではコングと同様で、言うことを実によく聞くし、火事場から人を助けたりするなど、善人、いや善猿であろうか。このフィルムは制作に二年を費やし、公開は1949年で、その年のアカデミー特殊効果賞を受けている。

1953年「原子怪獣現わる」で彼はアニメによる特撮マンとして一本立ちする。

この「原子怪獣——」は、幼ななじみの小説家、ブラッドベリの短編で、サタディ・イブニングポストに載った「The Fog-hor（霧笛）」が原作である（日本でも短編集「ウは宇宙船のウ」に入っている）。原作では霧笛に誘われて燈台を壊しに来る怪獣を、陸地に引っ張りあげてひと暴れさせる純粋？な怪獣映画である。原作を紹介したついでにお好きな方には絶対に読んでおいて損の無いのが、やはりブラッドベリの「よろこびの機械」の中の短編「ティラノソウルス・レクス」である…と書けば恐竜の出て来る話だということは察しがつくだろうが、その恐竜は鉄の骨と生ゴムの肌を持っている。

これはブラッドベリの友人であるハリーハウゼンをモデルにして書かれた、まぎれもない「人形アニメーション特撮者」のお話である。どんな材料を用いてこの人形が作られているか、また、とりわけ出来上った人形自体の持つ質感がどんなものであるかの描写がすばらしい。ためしてみて下サイ。

アニメーションの人形と実写の人間等との合成で、特に絡み合いの場合、最も簡単と思われるのがリア・プロジェクション方式である。これは半透明なスクリーンの後側から背景などを映写し、その前面で人形や役者が演技するもので、実写の中で「スクリーン・プロセス」として、走行中の自動車の車窓風景などはよく用いられる（要するにスタジオの中では車が走れないんで景色の方を走らすワケですナ）。

アニメを使った特撮では、ミニチュアの恐竜の人形アニメを、拡大投写したスクリーンの前で、それに合わせて演技したり、一コマづつ写し出される役者の演技と手前の人形のアニメーションとを、一コマづつ撮影し、最終的に一つの画面の上で両者が絡み合ったりするのに用いられる。この場合、スクリーンにはライトを直接あてられない。影絵遊びの際に観客側が明るいと影絵がよく見えないのと同じ理くつである。また物体の影をスクリーンの上に落す事も命取りである。バックが平らなスクリーンに過ぎないのがばれてしまうからである。

「原子怪獣———」での技術的な特色は、何といっても、前述のリア・プロジェクション方式の欠点を補うばかりでなく、より複雑な効果の望める「フロントプロジェクション方式」の採用であろう。ではこのフロントプロジェクションとはいったい何ぞなもっしゃ？

こいつは次回に取って置くとしよう。

（つづく）

▼ヘンゼルとグレーテルの表情を見てもらいたい



レイ・ハリーハウゼン年代記

1920　ロサンジェルスに生まれる。

1933　オブライエンの「キングコング」公開
Fantasy Film Animationの虜になる。
以後、スケッチや人形作りなど、暗中模索の時期に入る。

1937　小説家、レイ・ブラッドベリと会う。
以後、交友は現在まで親しく続けられている。

1938　自費で購入した16mmカメラではじめてのアニメーションフィルムを作る。
（ステゴザウルスや大熊の出てくる話で題名は不明）他に、
「Evolution」「David and Goliath」

1940～42　ジョージ・パルのところでパペトーンの仕事をする。お伽話のフィルムも作ろうとするが、戦争のために断念。

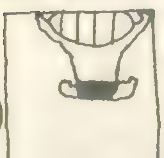
1942～45　Army Sighal Corpsで軍の機関誌の表紙の仕事などをする。

1945　大戦終了と供に、念願のお伽話のシリーズの制作にとりかかる。以後8年間に「マザーグース物語」「赤ずきんちゃん」「ラプンツェル」「ヘンゼルとグレーテル」「ミダス王の物語」などを学校教育用に作る。他にTVコマーシャル用用に「Kenny Key」というのがある。
シリーズの最後は「兎と亀」でこれは完成には至らなかった。

1946～48　オブライエンと供に「猿人ジョーヤング」の仕事をする。
○Mighty Joe young
1949公開　RKO制作

1953　彼の最初の特殊効果担当映画
「原子怪獣現わる」
○The Beast from 20,000Fathoms
1953　W.B

監督　ユージン・ローリエ
原作　レイ・ブラッドベリ
脚本　ロー・モーヘイム
フレッド・フレイバーガー
特殊効果　レイ・ハリーハウゼン
制作　ハル・チェスター、ジャック・ディエツ
音楽　デビット・ブットルフ







スサノオも凝視する
スサノオの心の声「お母さまとそっくりだ………」
クシナダヒメ、子ねずみを掌に抱いて
クシナダ「有難う、あたしのお友達を助けてくれた……」
アカハナ、不思議そうにスサノオとクシナダヒメを見くらべる。
クシナダ「(一歩寄って)でも、こんな淋しい処へなにをしに来たの？」
スサノオ「………」
アカハナ、横からスサノオを突っく
スサノオ「ウ……ウン、お母さまの国を探しているんです」
クシナダ「お母さまのお国………!?」
スサノオ「うん」

120 **肥の川のほとり**

子ねずみを抱いたクシナダとスサノオ歩いて来る
その後、少し離れてアカハナ達
スサノオ「ここはどこなの？」
クシナダ「出雲の国」
スサノオ「キミの家はこの近くなの？」
クシナダ「この川の川上よ」
川へ流れ込む小さな流れを、スサノオ軽くとび渡る。
クシナダヒメ、ためらう、
(水鏡で)スサノオ、手をとって渡してやる
クシナダヒメ、ふと川上を見て
クシナダ「あっ！」
と顔色を変える。
スサノオ「どうしたんです？」
川上から流れの色がみるみる濁った赤色に染まってくる。
クシナダ「恐怖の顔　あ、、どうしよう」

121 **アシナツチの家**

アシナツチ（クシナタヒメの父親）がスサノオ達に話している。
母親のテナツチはクシナタヒメを抱くようにして泣いている。
スサノオ「ヤマタノオロチ!?」
アシナツチ「頭が八つもある大蛇なんです。毎年川の色か赤く変るとその大蛇かやってきて娘を一人ずつさらって行くのです」
スサノオ「毎年ですって？」
アシナツチ「はい、もう七人の娘がさらわれ残ったのは此のクシナダヒメだけになってしまいました」
泣いているクシナダヒメ
それをじっと見ていたスサノオ
スサノオ「(力強く)よし、僕がヤマタノオロチとたゝかいましょう」
アカハナ「たかが蛇じゃないか、心配すんなよ」

122 **アシナツチの家の前**

スサノオを中心に作戦会議をしている
スサノオ「ヤマタノオロチが来るまでに、あと三日しか日がないということだ。
タイタンボウ、いい考えはないかね」
タイタンボウ「さあ……頭が八つもあんじゃ……」
アカハナ「いやあ、大したことないさ」
アカハナ、ヘタヘタと座り込んでしまう。
そのとき、
「イイカンガエガ　アリマスヨ」
と声かする
見ると、さっきの子ねずみを連れた親ねずみか立っている。
親ねすみ、チョコチョコと走ってスサノオの前に来ると、丁寧に一礼して
親ねすみ「先ほどは、私の息子をお助け下さいまして有難うございました……
スサノオさま、ヤマタノオロチのことでございますが………」
スサノオ「よい考えがあるといったね」
親ねずみ「はい、何しろ大きな蛇ですから、首がずっと上の方で、こちらも飛んで斗わないと、とっても勝目はございません」
スサノオ「飛んで斗うたって………」
親ねずみ「アメノハヤコマを使うのです。ここから東へ約五里ほど—」

〈次号へつづく〉



と思わず岩戸をもう少し開いて見てしまう。
オモイカネ「ソラッ」
その瞬間タジカラ、満身の力をこめて岩戸を引っぱるが、岩戸はあくどころか少しづつしまってゆく。
オモイカネ「こりゃいかん」
タジカラ汗をタラ〱うん〱ひっはるかピクトモしない
オモイカネ慌ててかけつけタジカラの体をひっはる
神々もかけつけオモイカネを引っぱる
神A慌ててオモイカネのヒゲを引はる　岩戸、又少し開いたかと思うと又、しまってゆく、神々慌てて又エンヤコラと引っはる　岩戸開きかけたりしまったり。

109 **Bタカマガハラの遠景**

暗黒のタカマガハラ全景
岩戸のあるあたりが明るくなったり暗くなったり

109 **C岩戸**

岩戸遂に大きく開く
タジカラ力あまってひっくりかえる
オモイカネのふれる、神々ワーとカン声をあげる。
「開いたぞ！」

110 **タカマガ原**

みるみる明るくなっていくタカマガ原の光景。
オモイカネ「いてて、こりゃわしのヒゲじゃ」

111 **宙空**

さっと光が射す　（F・O）

112 **欠番**　F・I

113 **欠番**　（F・I）

114 **アマテラスの宮殿・内部**

アマテラス、宣言する
アマテラス「スサノオ、みんなの意見です。お前はこのタカマガ原から出て行かねばなりません」
スサノオ「はい、わかりました」
とうなだれる　（O・L）

115 **タカマガ原のはずれ**

広漠とした雲海をバックに突き出たタカマガ原のはずれ。
アマテラスの前に膝まずくスサノオ
その後にアカハナ、タイタンボウ、
そして天の鳥舟が置いてある
（他の神々はいない）
アマテラス「（さとすようにやさしく）スサノオ、私はね、必ずしもお前が悪いことをしたとは思いません。でも、その結果困ったことが起ったのは確かですからね」
スサノオ「はい、悪うございました」



アマテラス　お前は乱暴者だけど、心の正しい良い子です。」
アカハナ、得たりとチョコチョコと前へ出て
アカハナ「え、そうですとも……」
タイタンボウ、慌ててアカハナの尻尾を引っはる
アマテラス「（やさしくうなずいて）自信をなくさず求めるものをお探しなさい。でも、その前にあなたは恐ろしい敵に出あうかもしれません
スサノオ「恐ろしい敵に！」
アマテラス「ええ、だけど、くじけず勇敢にその敵と斗い、苦しんでいる人達を救うのです。そうすればあなたは必ず母なるしあわせの国を見出すことが出来るでしょう」
スサノオ「（力強く）はい、分りました、お姉さま」
アマテラス、歩み寄ってスサノオの手をとり
アマテラス「どんなことにもまけてはいけない、スサノオ、元気でお行き
スサノオ、うなずいて立ち上りきびすを返し、一行は天の鳥舟に乗る。
スサノオ達を乗せた鳥舟、静かに動きだして雲海の中に降りて行く。
スサノオ「さようなら」
と手を振る。
アカハナ達も手を振る
只一人、岩上に立ってやさしく見送るアマテラスの神々しい姿
それがOLして、一群の雲の中に光りを放つ赤い太陽の姿になる
（F・O）

116 **山道**

（F・I）
タカマガハラとは違い、リアルな重苦しい感じの山道である。
雨が降っている。

117 **密林の中**

スサノオ達の一行が歩いて行く。
妖なお暗い感じの鬱蒼とした原始林
スサノオたち。その中をかき分けながら進んで行く。
こうもりがとび交い、カメレオンのような原始動物の爬虫類が木の枝から見下している

118 **川のほとり**

スサノオ達来る。
雨はやんでいるが川の流れは早い。
小さな枝きれに一匹の子ねずみが危げにのっかって流されて来る。
アカハナ「あ、子ねずみだ、溺れちまうぞ！」
スサノオ、流れの中に入って行って、子ねずみを救い上げる。
（O・L）

119 **別の川沿いの道**

スサノオ達、来る。
タイタンボウの頭に突然ポコンと木の実が落ちてくる
タイタンボウ「ありゃ……」
と見まわして首をひねる。
今度は、アカハナの頭にポコンと当る
アカハナ「アイタタッ」
と頭をかかえてタイタンボウと顔を見合わせると―
「ウフフウフフフ……」
と笑い声がして、一行の前へ、
美しい少女がさっと飛びおりる
クシナダ姫である。
スサノオ、はっと立ちすくむ。
スサノオの手にいた子ねずみが、ぱっととびおりて、クシナダの肩にかけのぼる。
唖然として見るアカハナとタイタンボウ
クシナダヒメ、ものおじしない澄んだ目でスサノオを見ている



と、オモイカネにとびついてひっかいたり、かみついたり、おろおろ見ているタイタイボウ。
スサノオも見かねて争いに加わる。
乱斗になる。

アマテラス「おやめ、どちらもおやめなさい」

神 A「放っておくとつけ上るぞ」

神 B「アマテラスさまのおいゝつけでも、これだけはきけません」

と乱斗が続く。
タジカラオ、騒ぎもしらず、こっくりこっくりやっている。
アマテラス淋しそうに立ちつくしている
投げとばされた神の一人が、その足許にころがってくる
アマテラスの顔がさっと硬ばる。
アマテラスの姿は、みる〳〵光の中にかくれ騒ぎの中から天の岩屋の方へとおざかってゆく
スサノオ、それを見て

スサノオ「あっ、お姉さま！〳〵〳〵……」

と神々を払いのけて追う
タジカラオ、やっと気がついて眼をパチクリやっている。

98 天の岩屋の前

天の岩屋は大きな岩山である。
光のかたまりと化して岩戸に向ってゆくアマテラス必死に追うスサノオ
アマテラスが近づくと、すーッと岩の一部が横すべりして開く。
アマテラス、中へ入る。
じりじりと岩戸がしまりはじめる。
スサノオ、はっと息を呑んで立ちつくす。

スサノオ「お姉さま〳〵！」

閉ってゆく岩戸
それにつれて辺りは次第に暗くなり、岩戸から洩れる昼の光りが細くなってゆく。
後から追って来たタカマガハラの神々も棒立ちになる。

オモイカネ「大変だ！世界が闇になってしまうぞ」

99 天の岩戸

岩戸か殆んど閉っている。
中から洩れていた光が次第に一糸の光芒となりやがて細くなり、ひたりと閉ざされる。
すると、岩戸の近くにそびえ立った岩々が悪神悪鬼の姿となる。

100 花園

咲き誇っていた花々、みるみるしぼんでゆく。

101 欠番

102 天の岩戸の前

篝火がたかれている、岩戸の前の広い平な岩場にオモイカネを中心に神々、車座になっている

オモイカネ「このまゝでは世の中に悪神がはびこってしまう」

神 A「なんとかしなければ……」

オモイカネ「こうなっては何か計略を用いるより仕方あるまい」

と考え込む
神々、オモイカネを見守る

オモイカネ「そうだ！いい方法があるぞ」

103 欠番

104 欠番

105 岩屋の前

あかあかともえる篝火。

オモイカネ「さあ、はじめよう」

アメのウズメがとび出して踊り出す。
岩戸の前を神々がくるりと車座になって囲んでいる。
タジカラオ、うとうとしている
楽師か音楽を奏し始める。
笛、太鼓、にぎやかに
オモイカネ、タジカラオにささやく

オモイカネ「いいか、タジカラオ、コレちょっとでも岩戸が動いたら（両手で戸を開けるマネをして）いいな強引に開けちまうんだ」

タジカラオ、大きなアクビをするがオモイカネに挾まれて慌てて口を押えてうなずく。

× × ×

中央で踊るアメノウズメ

× × ×

見守る神々

× × ×

踊りは高潮してくる。
まわりの人々手拍子、足拍子

× × ×

踊り狂うアメノウズメ、踊りながら身につけた長い布をとって打ちふり、空に向ってさっと投げる。
（この辺より、踊りの描写、次第に幻想的になる）
布は光り輝き、宙空にぐんぐんのびて七色の霧に変る。
その霧の上を踊りつゝ宙空に舞うアメノウズメ、両手のさきの枝を打ちふるたびに美しい星くずが散らばる
やんやとはやしたてる神々

× × ×

106 岩屋の中

外の賑やかな音が聞えてくる。
アマテラス、不審気に首をかしげる。

107 岩屋の前

踊りは最高潮に達しつゝいる
人々は楽しそうに手をうち、笑いさざめく。
と、一条の光か、岩戸の隙間から洩れ出る。
オモイカネ、はっとして
「それッ」とタジカラに合図する…が、タジカラ、居睡りしている。
オモイカネ、慌てゝかけ寄り、タジカラをゆすぶるが起きない。「コラ、タジカラおきて、おきなさい？」
オモイカネ、仕方なく丸太ん棒でポカンとタジカラの頭をひっぱたく。

オモイカネ「コラッ」

タジカラ、ねぼけまなこで起き上りオモイカネにせき立てられて岩戸のかげに行き身がまえる。
オモイカネ、つまづく

× × ×

踊り狂うアメのウズメ

×× × ×

アマテラス「何を楽しそうに騒いでいるのです……外は真暗だというのに」

オモイカネ「実は、貴い方がアマテラスさまの代りにおいでになったのです……この方ですよ」

と鏡を差し出す。

108 鏡

そこに写るアマテラス自身の顔

109 A 岩戸

アマテラス「まあ」





85 川岸
アカハナ達、わっと歓声をあげる。
（O・L）

86 アマテラスの宮殿の庭
背景にアマテラスの宮殿の見える美しい花園。
逍遙するアマテラス、その後に従うスサノオ。
後の方に控えているタイタンボウ、アカハナ。
スサノオ「お姉さま、お母さまのおられる平和で美しい国ってごぞんじですか？」
アマテラス「……知りません……そんなことよりスサノオ、此処で働いてみたら？」
スサノオ「でも……やっぱりお母さまの国へ行きたいんです」
アマテラス「そう（と、にっこりして）ところで、スサノオここは土地が沢山ありますから、それをきりひらいて、火の国とやらの人たちが暮らせるようにしてあげたら……」

87 開墾地
身体を起して汗をふくスサノオ。
タイタンボウたちも、一生懸命土地を耕している。
アカハナもプリプリしながら耕している。
アカハナ「だいたい、この僕がなんだってタイタンボウのためにこんなことをやらなきゃならないんだ！」
タイタンボウ、クワを振り上げると、クワにくっついた土がザーッとアカハナにかかる。
アカハナ、クワを放り出してふくれる。

88 アマテラスの畑地
神々があちこちで耕している。
馬にスキをつけて耕している神の姿も見える。
放れ馬が一頭、草をたべている。
スサノオ達、来る。
アカハナ、馬を見つけて
アカハナ「そうだ、僕たちも馬を使ってやろうよ」
タイタンボウ「いいんですか、勝手に使っちゃって」
アカハナ「何だとォ、お前のためにやってんじゃないか、手伝え」
と馬を引っぱるが動かない
アカハナ「こいつ、ぼくをばかにするとこわいぞ」
スサノオ「よーし」
と丸太棒で馬の尻を思いきりひっぱたく。
馬「ヒヒーン」と竿立ちになって物凄い勢いで走り出す。
慌てて追いかけるスサノオたち。
馬は畑を踏み荒しー
稲城を倒して突っ走る。
右往左往して逃げる神々。
アカハナ「だれか〜、だれかたすけてヨー」

89 ハタオリ場の建物外景
馬はスサノオたちに追われて走って来てハタオリ場にとび込む。

90 ハタオリ場の中
ハタの台から、織られた白布が建物の中に張られている。
とび込んだ馬か、ハタオリ場の中を暴れ廻る。
ハタの台がひっくり返り、織られた白布が引き切られ……
追いかけるスサノオ達も織布にひっかかってもがいている。

91 アマテラスのハタオリ場
岩の上にアマテラスのハタ織り場がある。周囲には従女が控えている
その下の方には白雲がたなびいている
織られた白布は霧のようにはるか雲の中にまで流れでている。
アマテラス、ハタの台に坐ったまま
アマテラス「今度だけは許して上げて下さい。あの子もそんなことになるとは思っていなかったのでしょう」

92 アマテラスの土地
豊かに実る稲穂、広々とした水田
スサノオたち、水田を見わたして、
スサノオ「此の水を貰って、こっちにも田んぼを作ろう」
タイタンボウ「いいんですか？ そんなことして」
アカハナ「なくなりゃしないさ。これだけありゃ」
と足で蹴ってアゼをこわす。
水が流れ出る

93 アマテラスの宮殿
キザハシの上に立ったアマテラス。
後にひかえているオモイカネ。
その前に二、三の農民がひざまづいている。
アマテラス「（眉をひそめて）田の畦をこわして……!?
（うなずいて）そうですか、スサノオには私からきつく云っておきます
……でも、あの子は何も知らないから、そのほうが田んぼがもっと広くなると思ったのでしょう」

94 アメノヤス川のほとり
川の中にドボンと根こそぎの大木が投げ込まれる
スサノオ、流れを見て
スサノオ「田んぼの水を使っていけないのなら、仕方がないや、この川の水を引こう」
アカハナ達、石をかかえて運んで来て、大木の上から川の中へ放りこむ。
スサノオ、大きな岩をかかえて来て放りこむ。
物すごい水沫。
アカハナとタイタンボウ、ずぶぬれになる。

95 川
積み石工事、完了している。
アカハナ「ワーイ、終ったぞ！」
せきとめられた水が溢れてくる。
スサノオ「あっ！」
アカハナ「あっ、大変だ」
水はどんどん溢れ出し洪水となってしまう

96 激流
ー橋を流し
ー畑を浸し
ー木を倒し
轟々と水は流れる。

97 アマテラスの宮殿
アマテラスはじめ、タジカラ、アメノウズメ等がずーと並び座している。
その前にスサノオ、タイタンボウ、アカハナ。
オモイカネ「まったくもってけしくりからん」
スサノオ「だってそんなつもりじゃなかったんだよ」
神 A「何を言ってるんだ、畑もなえもめちゃめちゃだ」
神 B「だまってりゃいい気になって」
神 A「いやがらせにきまっている」
オモイカネ「ほんとに悪い子じゃ」
神 B「タカマガハラをのっとる気ですな、要するに」
スサノオ「ばかいうな！」
スサノオ、神（B）をちょっと突く。
途端に宮殿からとびだしていってしまう神
神 A「ほら見ろ」
神 C「それとり押えろ！」
等、神々騒ぐ、スサノオに殺倒する、乱斗になる。
アカハナ「ヨーシ、スサノオさまに手出しすると承知しないぞ」
このハゲアタマジジイ」



小さい火の神は剣に当って次々に消えていく。
大もとの火の神、狼狽する
スサノオ、氷の玉を火の神めがけて投げる
火の神、びっくりして逃げ出すが、
氷の玉は生きもののように火の神を追いまわす。
氷の玉はだんだん追いついて、遂に火の神の体の廻りをぐるぐるまわる
棒立ちの火の神、みるみる凍ってしまう。

71 火の山

氷の玉、火の吐く山の上をグルグルとび廻る。
玉から霧のように、したたりおちる青い冷気が山の峰を包み、みるみる火は消えて、赤く燃えていた山が青く冷たい色に変っていく。

（O・L）

72 村人たちの家の前

タイタンボウ達の前にスサノオ、アカハナ、
タイタンボウ「どうも有難うございました」
アカハナ「（得意満面）いや、なに」
タイタンボウ「おかげさまで、火の神も参ったようで……」
アカハナ「軽いもんさ」
と、ふんずり返る。ふんぞりかえりすぎてひっくりかえってしまう。
スサノオ「（笑ってアカハナに）さあ、出かけよう。早くタカマガ原へ行かなきゃ」
村人たちの一番前で皆と何か話していたタイタンボウ、スサノオの前に進み出て、
タイタンボウ「スサノオさま、お願いです。私を一緒に連れてって下さい」
スサノオ「どうして？」
タイタンボウ「御覧のように、此処は土地が悪くて、狭いんで、みんなで住めるような豊かな土地を見つけたいのです」
スサノオ、うなずく。
スサノオ「いいとも」
ほっとするタイタンボウ。
アカハナ、そっくり返ってタイタンボウを突っつく。
アカハナ「おいっ、タイタンボウ、ボクはスサノオさまの一の家来なんだぞ、つまりだなボクはお前の先輩なんだ。分ったな」
タイタンボウ「へい、分りました」
その時、遠くから火の神の大声が聞こえてくる。
火の神「スサノオさまーー」
はっと山を振り仰ぐ一同。

73 山の頂上

火の神が、遠く山頂の火口に立って、スサノオたちの方へつかんでいたものを投げる。
その手元から、美しい天の鳥舟が、空中をゆっくり旋回しながら近づいてくる。
火の神「おわびのしるしに、天の鳥舟をあげるよ。乗っていって下さアい」

74 村人たちの家の前

近ずいてくる天の鳥舟。

（O・L）

75 宙空

朝雲の中を飛ぶ天の鳥舟。
スサノオ、アカハナ、タイタンボウがのっている。
アカハナ達、手を振る。
タイタンボウ角ぶえを吹く。

76 火の国

山の頂上で火の神が見送っている。
山麓では村人たちが手を振っている。

77 空

飛ぶ鳥舟、スサノオ達、手を振っている

（O・L）

78 夕焼の空

夕陽に美しく映えるバラ色の雲の間を縫って昇って行く舟。

（O・L）

79 夜の空

美しい星空、天の川が流れている。
鳥舟、とんで行く。
眺めていたアカハナ、首をすくめる。
スレスレに流れ星が飛び過ぎて行く

80 朝の空

金色に照り映える雲海。
鳥舟、雲の中からのぼってくる。
スサノオ「あ、タカマガ原だ……」
見た眼の行く手に赤く輝く太陽を囲んで、雲の一群がバラ色に映えている。

（O・L）

81 タカマガ原の遠景

同じく見た眼で、タカマガ原の全景
宙空に棚引く白雲の中に、タカマガ原の山や森が見えている。

（O・L）

82 タカマガ原のはずれ

雲海の中に横たわるタカマガ原の岸辺。
美しい雲が前景を流れて、とまっている天の鳥舟その前におり立っているスサノオ達の一行。
スサノオ「（眼をみはって）わア、すてきだなア」
美しいタカマガ原の情景（この描写幻想的に）五色の雲の流れる中に、豊かに実る稲田の穂、はるか雲海の中までキラキラ光りながら流れゆくアメのヤス川。

83 アメのヤス川の岸辺

彼方の雲の上に並ぶ御殿の屋根
スサノオ達、歩いてくる。
アカハナ「ねえスサノオ、此の川の向こうがきっとアマテラスさまの御殿だね」
と、スサノオを振り返る
と、その時、光の尾をひいた鏑矢が一筋アカハナをかすめて木に突き刺さる。
アカハナ、びっくりしてとび上る。
矢の来た方からさっと光りがさしてあたりが明るくなる
スサノオ、はっとして見る。
まばゆいばかりの光りを放って川向こうに立ってこちらを見ているアマテラス。
その背後にオモイカネをはじめズラリと並ぶタカマガ原の神々。
アマテラス「何ものです！、何しにタカマガ原に来たのです」
スサノオ「あ、お姉さま！」
アマテラス「スサノオ、スサノオではありませんか。
スサノオ「母の国へ行く途中なのです」
アマテラス「（眉をひそめて）母の国ですって！」
スサノオ「え、」
オモイカネ、アマテラスの後に寄って囁く。
オモイカネ「アマテラス様、だまされてはなりませんぞ」
スサノオ「本当です。お姉さま、嘘なんかつきませんよ」
アマテラス「（考えて）それではスサノオの心を試してみましょう、一人で川原へ出なさい」
無言で川原へ進むスサノオ。
不安気に見送るアカハナ達。
見守る神々、タギカラ、こっくりこっくり居睡りをしている。
オモイカネに突っつかれて慌てて眼をさます。

84 川岸 欠番

に舌を出してあえいでいる
一つの民家の前でタイタンボウがスサノオと話している。
タイタンボウ「なししろ、川はすっかり干上ってしまうし、雨は降らないし、…みんな火の神の仕業なんです」
スサノオ「火の神？」

59 山
頂上から黒煙がもうもうと上る。
時々、怖ろしい地鳴りがする。

60 火山、麓
タイタンボウに案内されて、スサノオとアカハナが来る
タイタンボウ、火山を指さして、

61 火山
噴煙をふきあげている
地鳴り、

62 全麓 エ
スサノオ、山に向って大声で叫ぶ、
スサノオ「おーい、火の神！」

63 火山
声に応じて、一層はげしく地鳴りをたてて煙を噴きあげる。

64の全麓
スサノオ声「おーい、火の神！」
スサノオ、叫ぶ。
スサノオ「出て来いよ！　話があるんだ」

65 火山
答えるように火は猛然と燃え上り、炎の色が変ってくる
火柱の中に火の神の顔が出て来る。
火の神「お前は誰だ！」

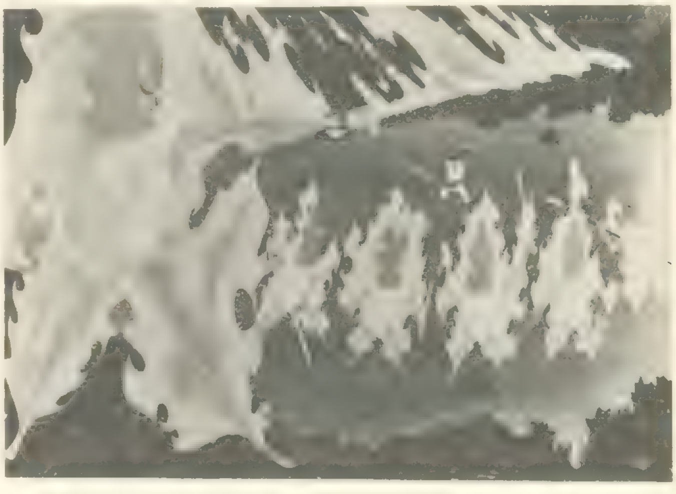
66 全麓
スサノオ「イザナギイイザナミの子、スサノオだ。この国を暖かくしてくれるのはいいけれど、すこし暖かすぎるぞ、みんな困っているんだ、やめてくれないか」

67 火山
火の神は怒って、かっかと赤く燃える
火の神「黙れ！　何がイザナギ、イザナミの子だ、生意気な、とっとと帰れ！　焼き殺すぞ！」
火の神の言葉と共に、ゴーッと地鳴りがし、炎が一きわ強く立つ。

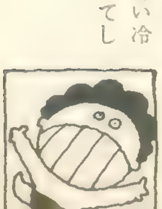
68 全麓
スサノオ「お父さまとお母さまをバカにしたな、ようし」
いうなり、スラリと剣を抜き放ち、火山を駆け上る。

69 火山
火の神「小僧めッ、くるか！」
駆け上ってくるスサノオに向って、次々に火の玉を投げつける。
火の玉は途中から無数の剣に変り、スサノオに集中する。
スサノオ、たくみにそれをよけ、払い落して突進する。
火柱は炎の塊りになって舞い上り、すさまじい勢いで宙をとび、スサノオの近くの岩の上におちる。
ハッと燃え立つ炎か、火の神の姿に変り、赤熱した剣を振るってスサノオに立ち向う
火花を散らしての立廻りがつづく。
刃が当るたびに火の神の剣から火の粉が飛び散る。
スサノオ、火の神を真二つに切る。
と、一瞬、火の神の体は二つの炎になって炎え上り、二人の火の神になってかかってくる
更にそれを切ると、又、倍に数が増える
スサノオが切るたびに、火の神は半分ずつの大きさになって執拗に敵対する
スサノオに疲労の色が見えてくる
スサノオ、次代に押されて後退する
タイタンボウ「アチチチ……」

70 全麓
スサノオ、火の神に包み込まれて後退していく
アカハナ達、ハラハラして見ている。
スサノオ、目茶々々に切る、その度に火の神の数が増えてしまう。
アカハナ「スサノオ、しっかりッ！」
と応援すると小さくなった火の神の一ツがアカハナの尻尾にくっつく。
と同時に、火の玉になってぼーっと燃える
アカハナ「アチチチ」
タイタン「タスケテクレー」
と例の調子でパタパタと地面を叩く
火の玉おちる。おちた火の玉に足がはえてアカハナを追いかける。
タイタンボウも火の神の群に襲われて悲鳴を上げて逃げ廻っている
悪戦苦斗のスサノオ
飛びかかる火の神の群、「エイッ」と斬ると火の神は二人の火の神に変り、それが二つの火の玉になって襲いかかる
少し離れた岩の上に、ぼーっと燃え上った大きな炎のかたまりが、前の大きさの火の神になる。
火の神「わっははは、どうた、恐れいったか！」
小さな火の神に追われて逃げるアカハナ、その手から氷の玉がおちる。
氷の玉、追って来た火の神に当ると、火の神、じゅっと蒸発してしまう。
アカハナ「タタタタ、たすけてくれ——」
アカハナ「そうた、こいつがあったっけ」
と氷の玉を拾い上げる
スサノオとタイタンボウ、火の神達に囲まれている。
アカハナが氷の玉を持ち、スサノオにかけよる
ジリジリと迫る火の神の群。



アカハナ、氷の玉を出してスサノオに見せる。
アカハナ「スサノオ」と耳うち
スサノオ「エッ！　兄さんが」
アカハナ、氷の玉をスサノオの剣に近ずけて祈る
アカハナ「ツクヨミさま、どうぞ火の神を倒す力をお与え下さい」
氷の玉が剣にふれると、さっと剣の色が氷色に変り、キラキラ光り出す
その時、大きな火の神が手をあげて、
火の神「それッ」
と合図する。
と、小さい火の神の群は、一斉にスサノオたちめがけて殺到しはじめる。
スサノオ、縦横に剣でなぎ払う
剣にあたった火の神は一瞬、青い冷気に包まれて、ジューと蒸発してしまう



ても、大丈夫だよ」
戦の大臣たちがスサノオを氷づけのまま担いで来る。ツクヨミ、何か口の中で呪文をとなえて、さっと片手をスサノオの方へ差し出す。と、その指先から光が走って、スサノオをつゝむ。
みるみる氷がとけてスサノオは、もとの姿に戻る
喜ぶアカハナ。
スサノオ、自分の体を見つめ、あたりを見廻して、戦の大臣を見つける
スサノオ「こいつ、よくも僕を氷づけにしたな！」
と云うや、側の柱を引き抜いてふりあげる
びっくりして逃げる戦の大臣、兵卒達
スサノオ、柱をふり廻して暴れる。柱にふれて壁かくずれたり、大きな鏡か割れたり、柱が曲ったり、大さわぎになる
一段高い所でじっと見ているツクヨミ
逃げまどう戦の大臣、兵卒達。
そこえ水晶の破片がとんでくる。アカハナ、とび上ってよける。
スサノオ、一息ついて
スサノオ「みんな弱いんだなア」
ツクヨミ「（静かに）乱暴してはいけないね、スサノオ」
言葉ともほに、スサノオのこわしたところが次々と元通りになる。スサノオびっくりして見ている。
スサノオ「（強がりをいう）乱暴なんかしてないよ」
ツクヨミ、スサノオの側に寄って、
ツクヨミ「スサノオ、何しにここへ来たんだね？」
スサノオ「母の国へ行くの」
ツクヨミ「母の国……？」
スサノオ「うん、お母さまのいらっしゃる処。兄さんはどこだか知っている？」
ツクヨミ「（驚いて）母上のいる処だって!?それはお前……（いいかけて）知らん、そんな処、知らん」
スサノオ「そんな処だって!?そこは素晴らしく平和で美しいしあわせの国なんだよ」
ツクヨミ「それは……そうかも知れない。でもお前の行ける国じゃないんだ。諦めなさい。諦めてお父さまのところへ帰るんだ。
スサノオ「（怒って）じゃ、兄さんはお母さまに、もう会えないっていうの、会えなくても平気なの」
ツクヨミ「平気じゃない、平気じゃないが……仕方のないことなんだ」
スサノオ「兄さまはお母さまが好きじゃないんだ。兄さんになんかもう頼まない」
いいすてると、足音荒く出て行こうとする
ツクヨミ「スサノオ、おまち！」
スサノオ、どんどん行く。
ツクヨミ「（呼ぶ）待つんだ、スサノオ」
スサノオ、見むきもしない。スサノオの前に鏡の壁が出来る。スサノオ、構わず身体ごと鏡を破って行く。その前に更に鏡、スサノオ、また破って通る
じっと見送るツクヨミ。
アカハナ、ツクヨミの顔をうかがいながら、お愛想笑いなどしてスサノオの後を追おうとする
ツクヨミ「おまえ」
とび上るアカハナ。
ツクヨミ、自分の前へ手をさしのべる……と、八方から青い光りがその掌に集まって、キラキラ光る青い玉になる。
ツクヨミそれをアカハナに渡し、
ツクヨミ「何か困ったことがあったら、これを使いなさい」
アカハナ「……」
戦の大臣、すっとんで来て、アカハナの手から玉をひったくり、
戦の大臣「と、とんでもございません。これは大切な氷の玉ですぞ！」
ツクヨミ「いいんだ」
氷の玉、大臣の手からひとりでにするりと舞い上ってアカハナの手に戻る
ツクヨミ「……（アカハナに）スサノオを頼むよ、アカハナ」
と鼻をひとこすり上げると急いでスサノオを追う。

53　欠番

54　鐘乳洞のような処
だんだん道が狭くなる。
迷路のように岩が垂れ下っている
恐る恐る行くアカハナとスサノオ。
アカハナ「もうだめだよスサノオ、帰ろうよ。」
スサノオ「何いってんだい、元気を出せ」
アカハナ「何か喰べたいなァー」

55　上り坂の白砂地帯
ところどころに真赤な鉱石や紫の水晶のようなものが燦然と輝いている。
スサノオ達、のぼって行く。
突然、足もとから物凄い突風が吹き上げ、あっという間に、スサノオとアカハナは吹き上げられて行く。

56　洞穴
アカハナの耳を捉んで吹き上げられて行くスサノオ。
流れるバックが様々な色に変って行く。

57　火の国、洞穴の外
コークスのような岩が重なり、処々赤く燃えている
あちこちから煙か立っている
岩壁に洞穴がポッカリ口を開けている
スサノオとアカハナ、放り出されて転がる。
二人、やれやれと起き上ったとたんに物凄い爆発音と共に灼熱した岩塊や土砂が降って来る。
二人、慌てて岩のくぼみに退避する。
爆発、おさまる。
アカハナ「あゝ、びっくりした」
スサノオ、くぼみから出て行く。
アカハナも続いて出ようとすると、後からニューッと手が出てアカハナの肩を叩く。
声「今出ちゃ危いよ」
アカハナ「あゝそうかい」
と気軽に返事するが、はっと気ずき、ギョッとして立ちすくむ。
アカハナの後に大男（タイタンボウ）が出て来て立つ。
アカハナ、そうっと後に手をのばしてみる　タイタンボウにさわる。
アカハナ、恐る恐る振り向いて見る
アカハナ「キャッ」とスサノオにしかみつく。
スサノオもふりむいてびっくり、と、剣の柄に手をかけて身構える
スサノオ「誰だ、お前は！」
タイタンボウ「まって下さい、私はこの火の国の者でタイタンボウっていうんです」

（WIPE）

58　火の国の部落
殺風景な村落　粗末な三角形の民家が並んでいる。木々はみなカラカラに枯れ、茶色い葉がたれ下っている。
みすぼらしい身なりの村人達の姿があちこちに見える
みんなシュロの葉のうちわをパタパタやりながら、元気なく、犬のよう



というと、後を向いてポンポンと手を叩く。
と、海の水がざーっと盛り上って、大きな亀が姿を現わして近づいてくる。
アカハナ、スサノオ、目を見はって顔を見合せる。(O・L)

41　海中

くらげ、タコなど、海の動物たちが泳いでいる。
老人の声「ヨルノオス国は海の底のまたその下、地の底にあるのじゃ」
大亀の背にワダツミ、スサノオ、アカハナがのって海の底へおりて行く
アカハナ、キョロキョロと珍しそうにあたりを見まわす。
きれいな模様の小さな魚がアカハナのそばを泳ぐ。
アカハナ、捉えようとして亀の背中をはなれて追いかける。
アカハナと小魚の追っかけっこ。
(ギャグ)

42　更に深い海中

ごつごつした岩の面に深海魚が泳いでいる。
大亀の背中に乗っておりて行く一行。
あたりが段々暗くなる。
ワダツミが手にした杖を前にかざす。
杖の先から光が出て、行く手を照らす。
アカハナの顔にタコがへばりつく。
アカハナ「こら!しつれいだぞ」

43　海底

薄暗い海底に大きな洞穴がぽっかり口を開けている。
ワダツミとスサノオ達をのせた大亀がおりて来る
大亀、洞穴の前でとまる
一同、大亀の背からおりる。
老　人「(洞穴を指して)この洞穴は夢のひら坂となってな。ヨルノオス国の入口なのじゃ」
(O・L)

44　洞穴の中

薄暗い洞穴が斜めに続いている
スサノオとアカハナ、下へ下へと進んで行く。
洞穴の中の歩きO・Lして数カット重ねる。
急にあたりが明るくなる。
スサノオ「(立ち止って)わーすごい」
洞穴が開けて、大きな水晶の林が一画に拡がっている

45　水晶の林の中

スサノオ、水晶の林の中を歩いていく。
アカハナ、スサノオのうしろにしがみつくようにして、こわごわ行く。
青に、紫に、赤に、美しく光る水晶の林が次々に画面に現われる。
アカハナ「おや……あれは?」
と指さす。
水晶の林の向う、行く手に青白く光る城塞とも御殿ともつかないものが見えている
スサノオ「ヨルノオス国だ!」

46　ヨルノオス国の城門

ひっそりと静まり返って青白い光を放っている。

47　その見張台

見張りが居眠りをしている。

48　水晶の林の中

スサノオ、口に手を当てゝ、大声で叫ぶ
スサノオ「オーイ、兄さんいるぅ? スサノオだよオ!」

49　見張り台の上

その声がガンガン、エコーして居眠りしていた見張人、仰天して、手すりを越して転落してしまう

50　ツクヨミの宮殿。一室

戦いの大臣、大きな剣にもたれ居眠りをしている。他の兵卒達も、それぞれ眠っている。見張り人が走り込んでくる。
見張り人、慌てて蹴つまずき、尻もちのまま鏡のように滑らかな床(ゆか)の上を滑って、眠っている戦の大臣にどしんと突き当る。
大臣、びっくりして眼を覚す。
(他の兵卒達は相変らず眠ったまゝ)
見　張　人「タタタタ…タイヘン、タイヘン、タイヘン、タイヘンデスヨー。」
戦の大臣「バカモノ!何事だ?」
見　張　人「た、大変でございます……ス、ス、スサノオ様か……」
見張人の額は傷だらけでコブまで出来ている。
戦の大臣「そのザマはどうした?」
見　張　人「(どぎまぎして)は、はい勇敢に抵抗いたしましたが何分にも寄手は……大軍……」
大　　臣「大軍だと!?」
ツクヨミの声「バカ、スサノオはまだ子供だ」
ツクヨミの声がした途端に眠っていた兵卒達は、はじかれたように眼をさます。
宮殿の中央、一段高い所に大きな鏡が立っている。その鏡にうつった影像がゆらゆらと動いて消え、暗い模様の動きになり、その中央に、ヨルノオス国の主ツクヨミの姿が現れる。
ツクヨミ、鏡の中から歩み出て来る。
ツクヨミが鏡の外へ踏み出すと、鏡は普通の鏡にもどり、ツクヨミの後姿や、大臣達の姿がうつっている
ツクヨミ「(戦いの大臣に)行ってみなさい……スサノオがわたしを改めるわけがない」
戦の大臣「いやいやツクヨミさま、スサノオさまは、子供ながら稀代の強力、安心はなりません。万一のため、なにとぞ氷の鏡をおかし下さるよう」
ツクヨミ、しぶしぶ腰に結んだ氷の鏡へ手をやる。

51　ツクヨミの宮、城門

スサノオとアカハナとが来る。
アカハナ「何だか淋しくて気味の悪い国だねえ」
声　突然、頭上から声がふって来る。
「とまれ!!」
驚いて見上る二人。
城壁の上にズラッと並んだ兵士たち。
声をかけたのは戦の大臣である。
スサノオ「やア、開けてくれませんか、兄さんに会いに来たんです」
戦の大臣「軍勢はどこにかくされた。スサノオ殿」
スサノオ「軍勢?そんなものいやしないよ」
戦の大臣「(部下たちに)計略だ、不意を襲うつもりだぞ。油断するな」
スサノオ「(怒って)何いってるんだい?なにしに軍勢なんかつれてくるのさ」
戦の大臣「なんといわれても、その手には乗りませんぞ。それがしは戦いの大臣、百戦練磨のツワモノですぞ」
スサノオ「この、わからずや!!」
というなり、傍の水晶の柱を折って投げつける。
水晶の柱は城門に当って、城門、バリバリとこわれる。
あわてふためく兵卒たち
戦の大臣「(急いで鏡をスサノオの方に向けて)氷の鏡よ、力を貸したまえ」
鏡から、青い光が一閃して、スサノオの身体を包む。
みるみる、スサノオの身体は氷に包まれる。
アカハナ「あっ!スサノオ・スサノオ……ああ、さむくなっちゃった。…」
アカハナ、驚いて城門の破れから、中へとびこむ。

52　ツクヨミの宮中、一室

アカハナが走り込んで来るとピョンとツクヨミの膝の上に乗る。
ツクヨミ「何だお前は」
と、びっくりして立ち上る
アカハナ、ツクヨミの胸ぐらを捉んで足をつっぱったまま、
アカハナ「ひどいや、ひどいや、自分の弟なのに氷にしちゃうなんて」
ツクヨミ「乱暴させないためだ、心配しなく



東映動画研究・そのささやかな出発として



シナリオ〔　〕
「わんぱく王子の大蛇退治」

製作　大川博
企画　吉田信
　　　高橋勇
　　　飯島敬
脚本　池田一郎
　　　飯島敬
動画監修　山本早苗
音楽　伊福部昭
原画監督　森康二
原画　吉沢日出夫
　　　熊川正雄
　　　大塚康生
　　　楠部大吉郎
　　　永沢詢
　　　奥山玲子
　　　喜多真佐武
　　　勝井千賀雄
　　　月岡貞夫
動画　小田部洋一
　　　竹内留吉
　　　彦根範夫
　　　小田克也
　　　生野徹太
　　　堰合昇
　　　大田朱美
　　　中谷恭子
　　　小林和子
　　　吉田茂承
　　　勝田稔男
　　　児玉喬夫
　　　相磯嘉雄
　　　菊地貞夫
　　　斎藤賢
　　　福島信行
　　　森英樹
　　　平田敏夫
美術　小山礼司
色彩設計　横井三郎
背景　福本智雄
　　　杉本英子
　　　影山勇
　　　千葉秀雄

考証　蕗谷虹児
撮影　石川光明
　　　菅原英明
録音　森武
　　　石井幸夫
編集　稲葉郁三
効果　岩藤龍三
記録　上山英子
演出助手　高畑勲
　　　矢吹公郎
トレース　進藤みつ子
　　　坂本洋子
　　　刈谷貞子
　　　湯沢加代子
色彩　中村富美子
　　　戸塚房江
　　　関一江
　　　伊藤滋子
仕上検査　佐藤章二
製作進行　松下秀民
主題歌
「母のない子の子守唄」
作曲　伊福部昭
作詞　もりしまたかし
歌　渡部節子
舞踊振付　旗野恵美
声の出演　住田知仁
　　　岡田由記子
　　　久里千春
　　　山内雅人
　　　川久保潔
　　　木下秀雄
　　　巌金四郎
　　　東京放送劇団
演出　芹川有吾

40　海上

老人「あの魚はアクルといいましてな、乱暴で、みんなが困っていたのじゃよ（ひっくり返った船を見て）おう……これは」

と手にした杖を差し出すと、杖の先からピカピカッと光が出て、船がひとりでもとへもどる。

スサノオ「あなたは……？」

老人「わしか、わしはこの海を治めるワダツミと申す者……」

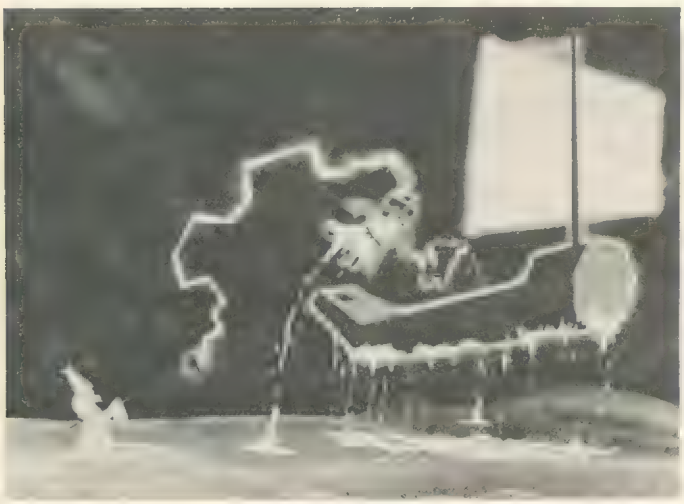
と云いながらスサノオとアカハナを杖でさしてぐるぐる廻すと両者の体はふわりと浮び上って船中へおりる

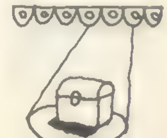
スサノオ「ぼくスサノオっていうんです。あのう、ヨルノオス国って知ってますか」

老人「知ってるとも……そこへ行きたいのか？」

スサノオ「え、」

老人「よろしい、この海を平和にしてくれたお礼じゃ、わしが案内しょう…





季刊ファントーシュ

▶　うぎゃあ！ついにファントーシュが来たのだ。もう、うれしくて涙流してよだれ流して鼻水流しておもらししながら見ました。面白かったです。自分の希望としてはＴＶアニメ小視考でぜひ「宇宙戦艦ヤマト」を!!東映動画研究ではシナリオより絵コンテをのせて下さい。
○アニメ用具売ります。タップ（３つ穴）トレス台・アニメカラー・かくはん棒・セル他往復ハガキで連絡下さい。
〒160　新宿区西新宿５－10－４
小林　辰行

▶　拝啓
１月19日発売の「少年マガジン７号」で「ファントーシュ誌のことを知りました。
中　略
実は昨年10月上旬「ローリングストーン」誌で貴誌の創刊を知ったのですがどうも連絡がうまくつかず図っておりました。ロ…誌には連絡先として03－396－2439（夜間）と書いてありましたので、毎日ＰＭ８：00以降電話しましたが、まったくつながりませんでした。５～６回かけましたが……。
思い余って「ロ…誌」の編集部へ「電話番号のまちがいではないか？」と調査を依頼したところ「夜間よりも午前中の方が都合が良いそうです。」との返事を得ました。この際の電話料金500円以上。
11月の上旬と思いますが、午前中電話したところ「本はまだ出来ていませんが案内状をお送りしております」とのことでしたので、私の方の住所を申し上げて案内状の到着を待っておりました。ところが待てども待てども何も来ません。その後２回電話してどうやら住所を聞きちがえられたようでしたので12月上旬、確かに住所を確認していただきました。
12月２日にようやく案内状を発送していただいて当方に到着したのが12月８日。さっそく定期購読として現金書留・速達便にて12月９日発送しました。にもかかわらず、12月24日書留が不存のため返送されてきました。以来どうして不存で受け取っていただかなかったのか不信に思い、たびたび電話しましたがつながらず、１月10日に速達で問い合わせましたが、19日現在まだ御返事をいただいておりません。
10月以来、電話・郵便料金等3000円近くかけましたが、連絡がつかないのは残念です。
後　略
（宝塚市　梅名　英生）

――えらい!!ノーベル賞をあげたい。これは並木が年末に引っ越したのと、ファントーシュのメンバーが夕方起きて夜明けに寝るためにおきた悲劇です。

▶おねがい
ファントーシュに、アニメーターになりたい諸君の為にというのとかアニメーターになるためにはっていうのやってほしいのです。
おねがい　おねがい　おねがい　おねがい
おねがい　おねがい　おねがい　おねがい
おねがい　おねがい　おねがい　おねがい
おねがい　おねがい　いたします。
（枚方市　貞島紀子）
あんないいもん他の人にやらせられますかってんだ……………ほんとに……………ほんとだよ……………………ほんとだよネッ???並木さん（アニメーターの並木・絶句）

▶（抜粋）――みんながあまりに期待すると重荷になるかもしれませんが天狗にならないで、じっくりと２号を創って下さい。爆発させて下さい。FANTOCHEが船ならぼくらは風になって助けていきたいな、そして時には潜水艦になったり、ヤマトの様に大宇宙を駆け巡って下さい。ガンバレ！ファントーシュ!!
（青森市　成田利光）

〒101 千代田区外神田１－１－５－905
FANTOCHE 編集室　甲谷　勝

▲WANTED！　More Readers Like Mr. and Mrs. MATHUZAWA. 杉並区の松沢ご夫妻が素適な判コを送ってくれました。郵便の人、見たことあるでしょ！　松沢さんありがとうございました。たいへん重宝してます。

▶　前略
感想は大してないのです。ただ、ずいぶんつっこめるだけぶっこんだなぁとひたすら感心し、そんけいもしております。
だけど洋画やら人形劇はあまり興味のない私にとって悲劇の１ページでした。アア……のひとこと。でもテレビの秋の新番組紹介、ほんとにあたりまえのことしか書かないのですね。あえていえば苦労話らしきものものっていないし、すべてオモテ向きの話題しかとりあげてない。編集の方がスーパーマンでないのであれやこれやいってもはじまらないけれどなんか見たいなーというゴシップがよみたい。私にしてみれば手塚治虫やディズニーなんかどうでもよいのです（作者なんぞ！）出来た作品がすばらしければ………！名前で作られた読者でないぞ私は！　しろーとの作品だってすばらしければどんどんしょうかい

ANIMATION・NEWS

第15回　日本SF大会
TOKON－6

第15回　日本ＳＦ大会は６年ぶりの東京大会・ＴＯＫＯＮ－６です。まだ１度も大会に参加されたことのないあなた、毎年でておられるあたな、そして時々参加されてるあなたも、今年の夏はＴＯＫＯＮ－６でお会いしましょう。
大会委員長　　野田昌宏

■開催日　51年８月14～15日
■会　場　大手町・日経ホール
■合　宿　本郷館
■主　催　SFセントラルマート
参加希望の方は〝案内書送れ〟と記入の上50円切手を同封して上記へおくって下さい。
〒177　練馬区南田中２－23－28
㈱スタジオぬえ　ＴＯＫＯＮ－６　事務局
☆尚、当日ＳＦ映画を１本、アニメーションは　アトムと　エイトマン　を上映しします。

○初めてなのかどうかはっきりしないが、アニメーションで初めてのミュージカル「ハイジの歌」"Heidi's Song"をハンナ・バーバラ・プロダクションが製作するそうである。
もちろん原作はヨハンナ・スピリさん。

川本喜八郎

残念ながら昨年のショーには新作フィルムが現われなかったが、２年がかりで作っている「道成寺」が今年のスクリーンには登場するであろう。現在、エコースタジオにて快調撮影中。作品完成前ではあるがこのスチールを本誌の表紙の為にお借りした。

岡本忠成

今年の正月に、半年間の幕を閉じた海洋博に展示の一環として「水のたね」を上映。これは閉場の施設と供に今後も引き続き上映されるようだ。　また閉場のマルチスクリーンを用いた新作の話も有りゃ無しや。今年のパペットアニメには、みんながニッコシ好評の「人間いじめシリーズ」の続編が制作待期中、お楽しみに。

残念ながら………

５回を迎える川本・岡本パペットアニメーショウは、今年でおしまいとのことだが、ほんとのおしまいではなくて、新たな構想のためのひと休みというのが本当のことらしい。幕の内弁当でもつつきながら、次の幕開きを待つつもりでしょう。



すべきではないだろうか？上映会といっても地方の人間は遠征できんのです。真のアニメーション誌とは何ぞや？　しろーとの作品も知りたい、このさい作者なんていい、出来た作品がよければ!!　　　　中略

アニメ史はやらないのですか。れんさい形式で分析してゆくのだ。まず手を出したアニメーターふんずかまえて質問ぜめ！（オッソロシーッ）

気を悪くしないように、決してこんな意見は本気で読まないで気楽にどーゾ!!

（前橋市　阿久沢千明）

飢えているあなたの気持はワカル
あなたもいい作品を伺ってみては？

▶ファントーシュ1号　ありがとうございました。大変バラエティーにとんだ構成で、おもしろく拝見させていただきました。

残念なのは、アニメのつくり方の載っていなかったこと。私達もアニメを作ろうと、今暗闇で手さぐりしている最中でしたので（今もそうですが）とってもたよりにしていたのに………。

加えて、アニメ上映会やその他の催しの情報及びその参加方法等、もっとわかりやすく事後報告でなく、事前報告として教えていただきたい。なしにろ地方なのでどこでどんな事が行なわれるのか切実に、知りたい、と希望しています。なにかそういった情報誌を発行しておられるようですが、それを購読させていただくことはできませんか？

とにかく、アニメに関することにはまったく（刊行本は作り方やなんかなくて）ヤミであったのに、ファントーシュによって、一条の光を見た想いです。

中　略

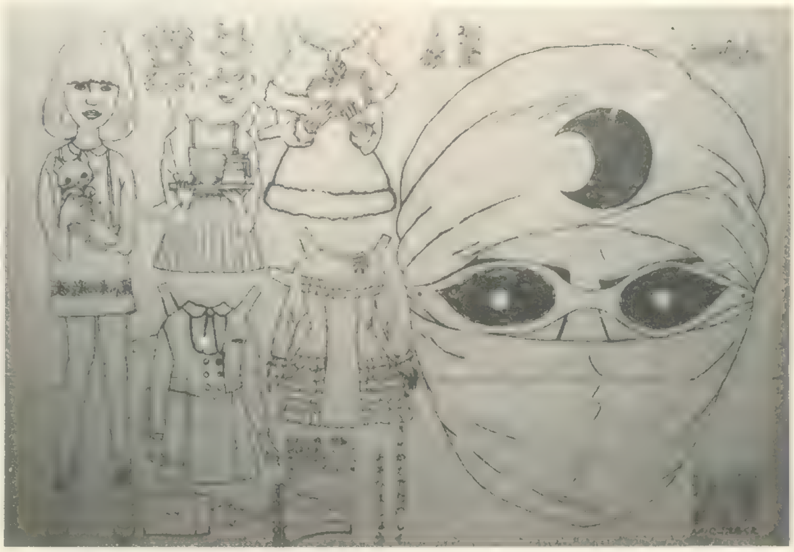
もっと私がお金持ちだったらいいんですけど、アニメをつくろうとがんばっている今、サイフの底には穴があいたようです。ホントにアニメっていうのは、お金が逃げるって意味なのですね。では、乱筆乱文誤字脱字は私の特技とするところですので、大目に見て下さい。　　　　（久賀田郁子）

▶11月の末ごろに予約しましたアニメ誌「季刊ファントム」はいったいどうなっているのでしょうか？　　　（大東市　上田志津代）

うちは飛びません……「ファントーシュ」です。でもジェット機のようにはやく届けばいいですね。でも幽霊のように得体の知れないのがファントーシュの実情なんですネ。でもほんとにおくれて申しわけない。

▲WANTED！　More Readers Like Mr. NAKANO.　明石市の中野君がふろくの付いてないファントーシュにふろくを送ってくれました。「アタシのきせかえ人形つくって！」と広瀬和子さんが言ってました。

このペエジは読者の方々のペエジです。ファントーシュに対する御意見、アニメに関する質問など何でもおよせ下さい。



森卓也

"笑い" というテーマで、東京と上方の笑いの違いを本にまとめるそうです。又、キネマ旬報社の「世界映画人名事典」の国内編を執筆中。日本のアニメ作家は何処かしら？とアニメを深しまわっているそうです。

◈「ガンバの冒険」の原作者・斉藤惇夫氏は「ゴリックの冒険」(1,200円)を、70年2月28日に、「冒険者たち」(1,300円)を、72年5月5日に、いずれもアリス館牧新舎（新宿区箪笥町41、大崎ビル。PHONE（269）2081）から出している。

2月下旬に公開されているワーナーの「ブレージング・サドルス」の中に、何とワーナーまんがのバッグス・バニーのパロディーとおぼしきものが出て来る。お見逃し無きよう。

ウッド・ペッカーのシリーズの中でも特に面白い「ペッカーの怪虫退治」が大沢商会から8㎜で発売されるらしい。

「シンドバット黄金の航海」が当ったためか、ハリーハウゼンの新作「シンドバットの虎の目」が制作中である。巨大な原始人と剣歯虎との格闘が見られるそうだ。初め「世界の果てのシンドバット」という題であったが変ったらしい。ハリーハウゼンの構想を基にビバリー・クロスが脚本を担当。サム・ワナメーカー監督、パトリック・ウェインがシンドバットに粉し、他にタリン・パワー、ジェーン・シーモア。300万ドルの巨費を投じて、アメリカでは来年の春に公開が予定されている。コロンビア配給。日本でも公開の予定がある。

ほりえみつこ

この3月8日で19才をむかえる彼女、現在4月新番組「キョーダイン」のレギュラー出演でヒーヒー、同じく4月新番組「ねこめ小僧」では主題歌を唄ってます。もう1本、テレビシリーズの「大非常線」のテーマ、"哀愁のスキャット"（作詩／中村しのぶ　作曲／渡辺宙明）も唄っています。応援してあげて下さい。

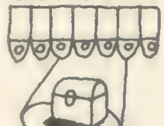
鉄腕アトムのＬＰが発売されています。テーマの他には効果音が入っていて、観賞用と言うよりは集収家向け。自主作品の効果音にも使えるかな？　購入方法 ☞ Ｐ．47

ＰＡＦ・2（プライベート・アニメーション・フェスティバル）の第2回が行なわれます。

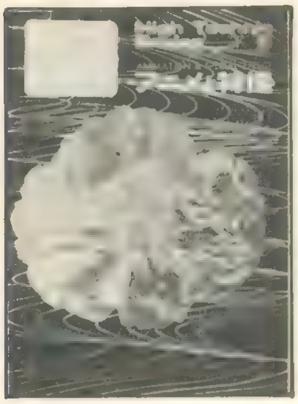
東京　5月22日　PM7：00～
　　　高円寺会館

静岡・名古屋・大阪・神戸で行なわれますが日時、会場等はまだ決定していないようです。

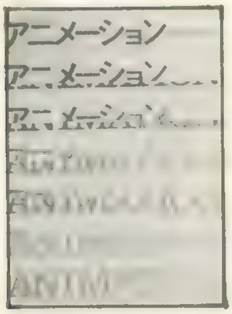
くわしくは　　アニドウ（833）6961



本棚

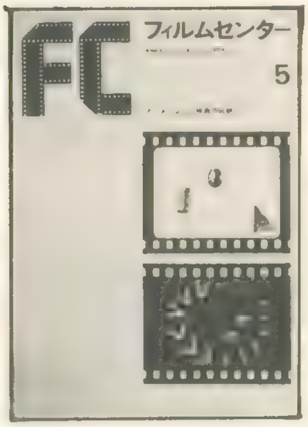


別冊小型映画「アニメと特撮」
海外の自主作品から国内のＣＦ、人形アニメ、劇場用カトゥーンまで、あらゆる素材を用いた様々なアニメフィルムについて、絵入りで初心者にも解りやすく書かれている。これから自主作品でも作ろうかという向きにはうってつけ。お薦め品。　玄光社　1800円

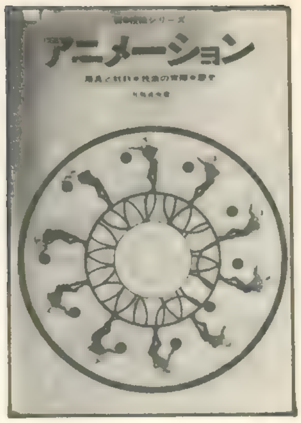


「アニメーション」　ジョン・ハラス、ロジャー・マンベル共著　伊藤逸平　訳
理論・実際・応用と銘うって欲張りな本である。三角関数を使った数式要も出て来るので、勉強に……なる……!?　初心者にはあまりお薦めできない。　ダヴィッド社　2600円

「アニメーション入門」　森　卓也著
アニメーション観賞の手引きとでもいう本。本誌にも原稿をいただいた森卓也氏が、肩の凝らない文章で過去何年間かに作られた、あらゆるアニメについて幅広く書いている。これを読むとアニメがもっと面白く見られる。アニメファン必読。美術出版社　680円



フィルムセンター５号
「アニメーション映画の回顧」
フィルムセンターでの46年の同名の特集の際、プログラムを兼ねて発行されたもの。ほとんどが現在でも国内で観る事のできる作品なので、フィルムと対照するとたいへん参考になる。よくまとめられている。尚、フィルムセンター以外では扱っていない。日本国の援助があるので、安い！　150円
東京国立近代美術館フィルムセンター発行
★〒103　東京都中央区京橋３－11
☎03（561）0823～４



「アニメーション」　月岡貞夫著
解りやすい図解入りで、アニメーション制作の実際方法を中心に、特撮、フィルム年表なども混じえて、アニメーターである著者によって書かれている。　美術出版社　1800円



「ファントーシュ」
日本で最初の――などとうたっているが、やたらと誤字脱字がめだつ。印刷は悪いし、編集者がぐうたらなためか、註文してもなかなか届かない。アニメーションの本であることは間違いないらしい。校正見習初心者向き。１号バックンバーがどうせ残っているだろう。
ファントーシュ編集室　400円（送料込）

森　康二

「草原の少女ローラ」も終って、次期カルピス劇場まで少しの間、お休みだそうです。

月岡貞夫

東宝の「続・人間革命」を終えて、再びＣＭの仕事に大忙し、去る２月18日「モーション・ペインティング」の上映をスタジオで行い、夜おそくまで花を咲かせたそうです。

古川タク

自身のマンガ「マンホール・マン」のアニメ化を進めている。１本１分位で、10本程の作品になるそうだ。

おかだえみこ

「小型映画」「西部劇通信」などにカットを絵いておられる。またアニドウの機関誌フィルム1/24にも、たいへん面白い原稿をちょくちょく載せている。

小野耕也

ウィンザー・マッケイのマンガ「リトル・ニモの翻訳を進めています。なにごとも問題がなければ、いずれパルコ出版より刊行されますのでご期待を……。
ＳＦ雑誌「奇想天外」復刊第２号から載せるＳＦを、いよいよ書きはじめました。このごろ、むかしのフェリックスのマンガ映画が見たくてたまりません。

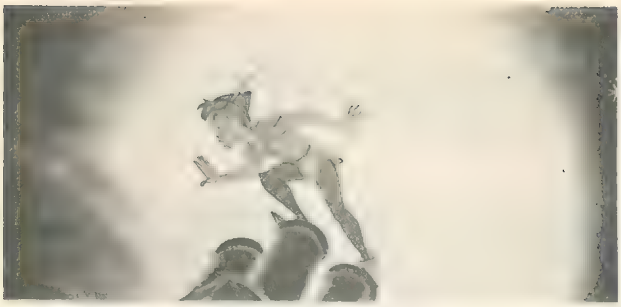
中村武雄

本誌への執筆を終え、長編「くるみ割り人形」にかかりきりのようだ。



▲
コマーシャルフィルム用のキングコング

——ファントーシュでは、去る1月21日(水)に東宝の協力を得て、ウォルト・ディズニーの「ピーターパン」の特別試写会を催しました。その時のアンケートを少々、御紹介しましょう。



○解説にもあったけれど、何しろ“ないない島”へ出発するところが、もう非常によかった！涙が出てきそう。ディズニーも、やっぱりいいんだな。画面に熱気があったしアニメ離れ（もともと、そとびっとりくっついていてたわけじゃなかったけど）を起こしかけてた私をひき戻す魅力が十分あった。

フルアニメの良さがたくさんでてるし、何より色彩の豊さはサスガ！なのだ。クラブ内での熱気がピンとこなかったので(?)いい刺激になった。ありがとさん(**森　啓子　17才**)

○とてもすばらしかった！「ピーターパン」とは、もう子供の時以来の再会です。(もちろんディズニーのアニメの彼と）一昔前みたきりで物語の細部をほとんど覚えてなかったのは無理ないけれど、あの四人とベルとがロンドンの夜を自在にとびまわるシーンは、一緒に飛んでいる錯覚が再びしました。ワニもおもしろい！本当におもしろい！今度はじめてそれに気づいた！早く劇場公開して下さいネ、公開されたら、またゆきます。楽しみに待っております。（**村松順子　25才**）



○ディズニーの新作アニメに夢がなくなり、また安易なＴＶアニメが氾濫する今日においてこそ、この「ピーターパン」などに表現されているディズニーの過去の業績は正しく再評価されるだろうと思います。

ジェームズ・バリーの原作に比較し、ワニを除くキャラクターに魅力がえしいのは欠点ですが、作品全体としては夢の世界の実在感を確かに見る者にもたせてくれる力強さに満ちていると思いました。（**林　譲治　25才**）

★アニドウ★

上映会

★３月23日(火)　夜７時開映
３月例会　「はげ山の一夜だけの一夜」
「禿山の一夜」　Ａ・アレクセイエフ
「新・はげ山の一夜」　相原信洋
その他　会場・高円寺会館(北口)
料金・400円（ぴあ持参350円）
アニドウ会員無料

★４月20日(火)　夜７時開映
３月例会
「見よ！日本まんぐあえいぐあの伝統を!!」
〔その四〕
「アカ吉の智恵」昭24　村田安司
「かぼちゃ騒動」昭26　芦田いわお
「動物オリンピック」昭３　村田安司
「よくばりきつね」昭23　渡辺　功
「きつねのホームラン王」昭26　鳥羽幸一
「兎と亀の決勝戦」昭27　藪下泰司
その他全部で１時間半くらいのフィルムを
会場・高円寺会館（高円寺北口）
料金・400円（ぴあ持参350円）
アニドウ会員無料

その他・５月「ＰＡＦ」本誌邦訳　載「ノーマン・マクラレンの世界（日本語版）」６月「見よ日本まんぐあえいぐあの伝統を!!その五」「漫画王フライシャーの復活」・７月「漫画王フライシャーの大復活」「アニメの誕生〜ザ・ビギニングス」・８月「見よ日本まんぐあえいぐあの伝統を!!その六」「謎の短編U.P.A」等々……超豪華ラインナップ!!
問い合わせは 03(833)6961（夜間）すどう



◎各地サークル紹介◎

阪神地区、特に大阪以西の方々、お待たせしました。新しいアニメーションサークルがまた一つ生ぶ声をあげました。

H・A・G

「阪神アニメーショングループ(H・A・G)」と名付けられ現在のところ会員約30名。今年の初めに発足したばかりのグループだが、3月には上映会を予定しており、自主制作も進めていきたいとがんばっている。今のところ会費というのはとっていない。会員募集中！

問い合わせは

〒657　神戸市灘区楠ヶ丘2－5－7
田原　実　☎ 078（841）3786

日本アマチュアアニメーション映画協会

6月に予定されている発表会のために、各員自主制作進行中とか。この発表会は無料である。どなたでも気軽に入れます。

第6回　日本アマチュアアニメーション映画祭

★6月15日　東京・新宿朝日生命ホール
午後6時より。お問い合わせは

〒103　東京都中央区日本橋本町2－17
高松ドラッグ　　高松政男
☎ 241－2459

T・A・C

現在、PAFのための自主作品“りんご”を制作中、8㎜で1分位の作品になる予定。

上映会の予定もある。



4月“フライシャー特集”
「ばった君街へ行く」「スーパーマン」「ポパイ」等。
6月　PAF
8月　作品未定
10月　“ベルギーの作品”

いずれも「熱田青年の家」で土曜日の1時から4時半まで。第何土曜日かわからない。

問い合わせは

〒400-17　中島郡平和町六輪那古良6－17
平和団地71号　円法　憲生

ふうせん

他の上映サークルとは違い、ふうせんはアニメーション自主制作グループです。現在4人しかおらず活動らしい活動はしていないが「アニメを作りたい！」という人が仲間になれば活動をはじめたいと思っています。

会誌発行、集会等の活動も今はやっていません。

連絡先　池田市綾原1－2－6　推原豊内
TEL　0427－52－2709

SOLAR・CROSS

活動状況

3年前から、さる漫研のアニメーション部として大活躍。TVアニメの批評などを中心にあくまで趣味的にやっていた。

昨秋、母体となった漫研が活動を停止したのをきっかけにSOLAR・CROSSとして独立。アニメファンクラブ的あいまいさから脱出してオリジナルアニメーションをつくるべく新たな活動を開始した。

まず手はじめにTVアニメーションのテーマソングの本格的集大成を企画している。全7冊、A5コピー印刷、各40ページ前後。2ヵ月に1冊発行。第1集発行は、3月中旬の予定。郵送料共　7冊で￥1500

申し込み・お問いあわせは下記連絡先まで

現在のところ、新規会員募集はしていないが、集会は、毎月第2日曜・大阪梅田近辺にて行っている。参加歓迎

会員数　4名　全員女性　平均年令19.5才
連絡先　〒665　宝塚市花屋敷つつじが丘12－4　　松木千佐子

日本国内観賞可能電影　あなたも上映会を…の2

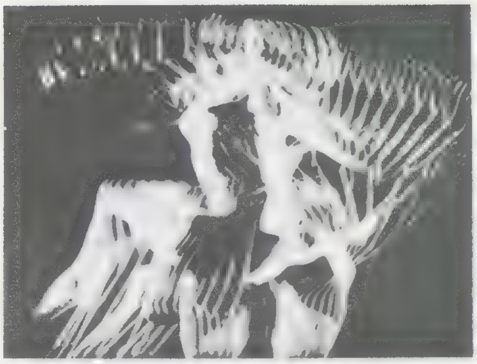
加奈陀大使館 フィルムライブラリー



▲ブリンキティ・ブランク　Blinkity Blank
（線と色の即興詩）
N・マクラレン　フィルムに一コマずつ直接描き込むシネ・カリグラフの代表作
7分48秒　カラー　1949年

人間対マイクロフォン、人間対椅子、人間対人間の「人間アニメーション」？

▼隣人　Neighbours
N・マクラレン　8分10秒　カラー　1952年



▲流れるバレー　Pas de Deux
男女のバレーが、ストロボ効果により音楽に合わせて美しくきらめく。アニメと言えるかどうかは分らないが見ておいて欲しい。
13分22秒　白黒　1967年



▲開会の辞：マクラレン　Opening Speach
N・マクラレン　6分51秒　白黒　1961年

▼歩く　Walking
ライアン・ラーキン　人間の歩く様をさまざまなタッチでアニメートしている。ラーキンはこの他に木炭を使った幻想的な作品「シリンクス」がある。
5分6秒　カラー　1968年



▼マリー　Tête en Fleur
ベルナール・ロンプレ　砂のような細かい粒子が、音楽に合わせてさまざまに形を変える。エッチングによる作品。
2分44秒　カラー　1969年



大使館によっては、条件しだいでフィルムの地方貸し出しをしてくれる所が有ります。貸り方その他については1号の「波の彼方のアニメーション」を御覧下さい。

みんなでなかよく見ましょう！

本棚



「THE ART OF WALTDISNEY」
FROM MICKEY MOUSE TO THE MAGIC KINGDOMS

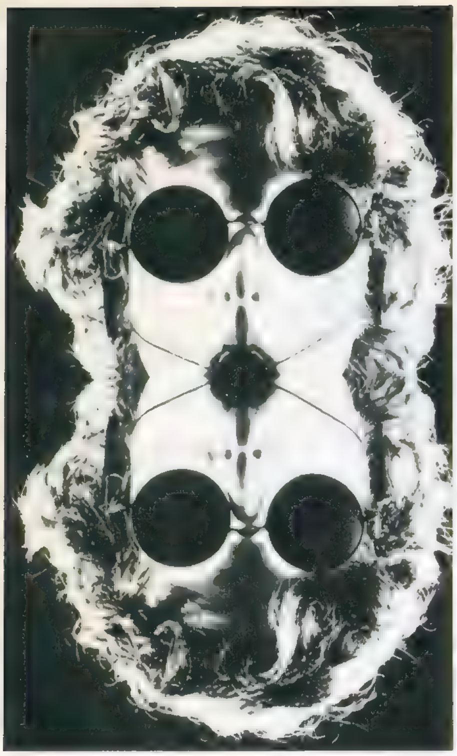
扉を開けると、見開きの折り込みでディズニーのフィルムに登場したキャラクターが、飛んだりはねたりしている。（あまりうまくないのだが……）しかし、そんなことでがっかりはしなくてすむのだ!! ウォルトの生いたちから始まるこの本には、セル原図はもちろんのこと、初期のアリスやうさぎのオズワルド、シリーシンフォニー等のポスター。彼自身の書いたミッキーのキャラクター表（model sheetと言うのだ）やらストーリーボード背景原図、見開きの背景、消しゴムの跡も生々しい原画等々。カラーの印刷もどっかの専問誌と違って非常によい。手あかの部分を感じさせる本である。買って損のない本。不思議な事に同一名、同一著者で、豪華版と縮刷版、さらに近々、その中間の厚さのものが発売されるようだ。御予算に合わせて3種類！お好きなものをお選び下さい……といったところであろうか。

CHRISTOPHER-FINCH 著　ABRAMS 社。

大16400円　中5000円位　小　2940円

月刊絵本の3月号でアニメの特集をやっています。写真いっぱい、座談会などもりだくさんの内容で、我が「ファントーシュ」も紹介されている。解説は本誌でもおなじみの、古川タクさんです。

3月15日発売の「別冊TVランド」で、〝TV映画20年史〞という、子供番組の特集をしています。



◎「トミー」（東宝東和／配給）

今、話題のロックミュージカルではあるが、ヒットはしないだろうとウワサされる映画。日本人には、ロックサウンドが定着していないのか？音だけでいいのか？今までに興業的にいい成績をあげた映画はないといわれている。その点だけはアニメの方がグッと強いが実験的な事をやっている点では目と耳を向けていただきたい1本です。映像をウンヌン、リズムがウンヌンではなく、この映画が使用した日本の山水電気のＱＳ＝クインタフォニックス・サウンド・システムがおもしろいのである。

本編上映中、やむことのないサウンドにかこまれっぱなしなのである。体が音の中をさまよい、時にはおどってしまうのである。だまされたと思って、音と映像の芸術を、見てきて下さい。映画はこんな事もできるんだ！ということをたしかめてきて下さい。

今年はディズニーのアニメが劇場で大部見れる年の様である。まず1つは「ピーターパン」が東宝で全国公開される時点で4本、「ドナルド・ダックの人喰いザメ」BEE AT THE BEACH「ドナルド・ダックのライオン大騒動」LION AROUND「ミッキー・マウスのがんばれ！サーカス」MICKEY CIRCUS「チップとディールの怪獣をやっつけろ」OUT ON A LIMB が公開され、「大自然の驚異」が2番館に流れる時点に8本を集めた総集編（約65分）が併映されます。内容は「花と木」「うさぎとかめ」「三匹の親なし子猫」「田舎のねずみ」「風車小屋のシンフォニー」「仔牛のフェルディナンド」「みにくいあるの子」「プルートのなやみ」以上。

◎RECORD◎

TVまんが4月番組主題歌(2月20日現在)

マシングランプリ・ハヤブサ
詩／保富康午　曲／すぎやまこういち
唄／水木一郎

コンバトラV
詩／八千三郎　曲／小林亜星
唄／水木一郎とざ・ぶれっすんふぉー

ゴワッパー5・ゴーダム
詩／若林一郎　曲／小林亜星
唄／水木一郎とヤングフレッシュ

大空魔竜ガイキング
詩／保富康午　曲／菊地俊輔
唄／ささきいさおとコロムビアゆりかご会

ねこめ小僧
詩／棋図かずお　曲／渡辺宙明
唄／ほりえみつことコロムビアゆりかご会





「フリッツ・ザ・キャット」で日本中に話題こそふり巻いたが興行的ヒットを得ずに、暗黒街へ帰っていたラルフバクシ監督が、昨年やはりマフィア物の「クーンスキン」を作りアメリカで話題だけに終った。力みなぎるラルフバクシは今、米FOXで〝WAR WIZARDS〟＝未来戦争（仮）という、未来戦争を雄大な構想と大担なタッチで描いているそうである。もう一本、FOXには〝TARZOON, SHAME OF THE JUNGLE〟＝ターザン・ジャングルの恥という、真可不思議なというか変なタイトルのアニメが入っている、監督はボリス・シュレンジャー、声はジョニーワイズミュラーＪＲとか。「ロッキーホラー・ピクチャー・ショー」もＦＯＸに入荷しているし、今年はいい年か!?

先号でお知らせした、サンリオ・フィルムのロック・ファンタジー「メタモルフォセス」は、6月末日、完成を目標にラスト・スパートの真最中。人形ファンタジー「くるみ割り人形」もパイロット版が完成。次号にて、くわしく紹介します。

やたらめたら大作を配給しているＣＩＣに「アゴ」の後は「ＢＵＧ・バーグ」という、ゴキブリちゃんの映画が入荷している。〝ちゃん〟をつけても恐い映画です。

◎オリジナル・サウンドトラック・レコード

「JAWS」MCA-7166

深海をさまよいゆくカメラ、不気味なBG。泳ぐ女の足元へ、グーとせまるカメラ。もちろんこれはサメを表現する、「何だろう」と見る者、聞く者をまよわせる。これが「シンデレラ・リバティー」を作曲したジョン・ウィリアムスなのだろうか!?　傑作中の傑作だ。

「続エマニエル夫人」FML-51

大ヒットに気を良くして作られた2作目だがまともな所は音楽だけだろう。音楽はフランシス・レイ。「狼は天使の匂い」でも自ら唄っていたように、今回はクリステルとデュエットしている。聞けるのはこれだけ………。

「O嬢の物語」MP-2520

〝エマニエル〟の一作目、あの曲を作り唄ったピエール・バシュレの作品。サントラとして聞くに対し本編を未見なので、？だが、仲々いいムードである。

「ラッキー・レディ」IAS-80451

FOXの今年の大目玉商品として売り出し中の大作。ライザ・ミネリ、ジーン・ハックマン、バート・レイノルズのトリオが巻き起こす大海洋アドベンチャー！だれが見ても大笑い、だれが見ても楽しい。音楽は「キャバレー」「レニー・ブルース」のラルフ・バーンズ。コミカル・タッチの大バック・グラウンドミュージックをお楽しみあれ！あなたも！

「華麗なるヒコーキ野郎」MCA-7167

いま「スーパーマン」を演じるか！演じないか!?より次の作品はなあ〜に、ってくらい大人気のロバート・レッド・フォードの新？作。音楽は大大巨匠ヘンリー・マンシーニ。〝マーチ〟が仲々の曲とのこと。

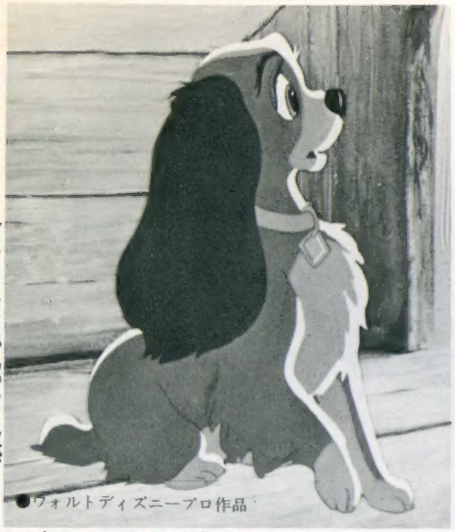
「危険なめぐり逢い」RVP-6017

これこそわからない。映画は夏頃公開になってしまって見てない。音楽はフランシス・レイだがシンセサイザーを使っている。一体この曲の各パートがどんなイメージなのか？にわかにイヤな音も出ないではない。青木雄









●ウォルトディズニープロ作品

下のシールをパラパラまんが応募者にプレゼント!



◘堀口忠彦ぷろふぃいる◘

アニメ界に入ってすぐ、木下連三氏の下につきアニメを学ぶ。最初の仕事は「ネコジャラ市の11人」のタイトル作画。そして同じくNHKの「みんなのうた」「世界の音楽」そして「お笑いオンステージ」等のオープニングを作る。現在、「お笑いオンステージ」があまりにも有名。

ファントーシュ御愛読者プレゼント－2



●ウォルトディズニープロ作品

1．「わんわん物語」試写会御招待…………50名
2．「鉄腕アトム・音の世界」レコード……5名
3．「ピンクパンサー2」ポスター…………30名
4．「ピーターパン」ポスター………………30名
5．新着洋画・特別試写会…………………100名

●試写会は東京近郊の方で必ずこれる方、レコードは直接コジマ録音へ、ポスターは送料140円分の切手を同封の上、(はずれたら返します)下記編集室へお申し込み下さい。すべ6月30日(水)を〆切とします。ヨロシクネ!(定購の方はNo.を記入して下さい。)

〒101 千代田区外神田1－1－5－905 甲谷勝方ファントーシュ編集室P2係

2．は下記広告のコジマ録音にお申し込み下さい。

アニメ雑記

沖縄ではFENのテレビ放送をやっている。僕が沖縄に行ってたときは、よくFENを見ていた。

ある日、この深夜番組で東宝の映画「地球防衛軍」をやっていた。もちろん、英語版。

宝田明と志村聡が英語ペラペラ。おそらく吹きかえだろうが、あまりにも口の動きにぴったりで、声も似ていて、アメリカの連中が見ている分には、日本映画を見ているつもりになるだろうが、我々から見ると、これはもうアメリカ映画なのだ。

「鉄腕アトム」が輸出されていたそうだが、おそらくそれもああいった感じになったろう。

一度でいいから見てみたい。



★

いつだったかT君とアニメについて話した。

「今の日本には　アニメーターと言われる人は数多くいるけど「アニメ作家」になるとひとりもいないんじゃないかな。」

「うん、でも一応自分の作品を作って　それなりに認められている人は　けっこういるんじゃないかな。」

「でも　そういう人達だって　実際はアニメだけでやっていけてるわけではないし　各自の本職はデザインやさし絵といった　少し別なものを持っている場合が多いんだよね。」

「ふむ。つまり自分のアニメ作品で　十分やっていけるような社会ではないと言うこともできるね。」

「カナダのNFBとか、アメリカのディズニーなんかもそうらしいけど　アニメ作家を国で養成したり補助することも必要かもしれないな。」

「でも、アニメーターの側にしても　アニメを奨励する賞とか　一般に発表するシステムを作るとか　まだまだやることはあるようだね。」

「ほんとにアニメって　これからなんだなあ。」



◘編集後記

ガウッ！ガウガウッ、ガゥウォンガウンガウン、ガウワォ〰ン（ンゴ〰〰ッ！）
ザ・ピーナッツ「今回は内容的に少しかたよりが見られる、それにしても疲れた、もう字を書く元気もない………と言っています。」

（須藤）

ピーナックくれ〰

（甲谷）

ぼくは、ひろせかずよしで、広瀬和子さんではないのヨ、ウフッ

（広瀬）

須藤氏の言ってるザ・ピーナッツは「ゴジラ対モスラ」のザ・ピーナッツのことで、甲谷氏の言ってるのは　当世はやりの「一ヶ百万円」のことだそうで……？

（吉沢）



◘◘定期購読の申し込み方法◘◘

年間購読料（年4冊、送料込）2,000円
1冊のみ（送料込、1号は400円）500円
お申し込みは、必ず定額小為替か現金書留にて、編集室まで。

◘ファントーシュ読者アンケート

第2号いかがでしたでしょうか？今号も又、アンケートにお答え下さい。プレゼントも用意してます。
◎あなたの好きなTVアニメ１本。
それ以外のアニメーション１本をあげて下さい。
◎本誌に対する、御意見、御感想。
◎どのようにして本誌を知りましたか？（　　　　　　）
◎購入方法
（書店・通信販売・催し物・その他）
書店名（　　　　　　）

☆貴サークルの機関誌・会報を送って下さい。

ファントーシュでは、アニメーションの発展と横のつながりを持つことを主旨として活動していますが、まず資料を作成しよう！と一部の活動をはじめています。その一環として各地サークル、ファンクラブの機関誌、会報を集めております。ユニークなものは誌面にも取りあげられ、（形としてまだ存在していませんが）ファントーシュ資料室に収められ、記録されます。バックナンバーもあれば幸いです。
お礼として何らかの特典を必ずつける事を、お約束いたします。

（吉沢・須藤・広瀬・甲谷）



◘今号「アニメーターが語る」に使用させていただいたカットは、週間少年ジャンプ〝ライオン・ブックズ〟シリーズから「モモガンのムサ」です。

◘今号の表紙は、㈱オフィス・アカデミー作品・TVアニメ「宇宙戦艦ヤマト」のエンディングに使用した松本零士氏の自筆の〝スターシア〟です。

◘今号へのスチル及び資料協力。
東宝（ウォルト・ディズニープロ）／ブエナビスタ映画／東和／東映／20世紀ＦＯＸ映画／ヘラルド映画／コロンビア映画／オフィス・アカデミー／松本零士／川本喜八郎／岡本忠成／出崎統／高山弘／鶴見和一／子供の文化　他―――
ありがとうございました。

■季刊ファントーシュ　第２号■
■昭和51年４月１日　初版発行■

発行責任者………………広瀬和好
発行所……ファントーシュ編集室
〒101　千代田区外神田1-1-5-905
PHONE 03（833）6961＆03（364）3750

編集●須藤隆／甲谷勝／吉沢亮吉
協力●西井豊／神田豊／山本博一
高橋理恵／鶴見和一／山田けい子／高山弘
印刷●内外企画株式会社

表紙・松本零士／川本喜八郎

定価400円（送料100円）

□本誌取り扱い書店

○神田ー書泉グランテ。書泉ブックマート。東京堂。廣文館書店。ウニタ書舗。○新宿ー模索舎。西田書店。駅ビル栄松堂。紀伊国屋書店。○渋谷ー東急プラザ、紀伊国屋。NHK角ー放文社。○池袋・大井町・高田馬場・芳林堂書店。○下北沢ー北野書店。○日比谷ツインタワー２Ｆ・紀伊国屋。○吉祥寺ーウニタ書店。

川本喜八郎「道成寺」



……夜半ばかりに家主の女
ひそかに　此の若き僧の寝たる所に
這いいたりて………

「今昔物語」より

発行　ファントーシュ編集室

定価400円